

# 生目台住宅団地計画区域内 埋蔵文化財等調査報告書

内野々第Ⅰ遺跡  
内野々第Ⅱ遺跡  
石仏・石塔調査

昭和57年5月

宮崎県住宅供給公社  
宮崎市教育委員会

生目台住宅团地



模型写真

BN15469086

## はじめに

当公社では、現在人口増の著しい宮崎広域生活圏の住宅需要に対応するため、公共・公益施設の整備された良好な環境の住宅及び宅地の供給を目的に生目台住宅団地の開発を進めており、昨年9月に造成工事に着手したところです。

この造成工事に先立ち、埋蔵文化財の試掘調査を宮崎市教育委員会にお願いしたところ当該団地の計画区域内に一部遺跡のあることがわかり、当公社としましては、この遺跡について記録として保存する必要性を感じ、県及び市教育委員会の指導、協力のもとに今回本格的な発掘調査を実施いたしました。

埋蔵文化財等は歴史や文化を理解するうえで欠くことのできない先人の残した貴重な遺産であり、その保存は地方文化の形成に大きな役割を果すと考えます。

当公社におきましても、そのような認識のもとに住宅団地の開発を進めているところであり、また計画に際しましても、それらの点を十分に考慮した開発計画にしております。

この報告書は生目台住宅団地計画区域内における埋蔵文化財の発掘調査についてその概要をまとめたものであり、この報告書が文化財保護の一助になるとともに、関係各位の幅広い利用を期待しております。

なお、この発掘調査にあたっては、関係機関、特に県教育委員会文化課、市教育委員会社会教育課に多大な御協力をいただきましたことを、ここに深く感謝するとともに、今後とも一層の御指導、御協力をお願い申し上げます。

昭和57年5月

宮崎県住宅供給公社

理事長 本部安夫

## 序

宮崎市は、長期総合計画によると昭和60年には、人口30万人、世帯数で約10万世帯に達すると見込まれております。

のことから県住宅供給公社では、大規模の住宅団地を造成し、低廉で良好な環境の住宅及び宅地を供給する目的をもって、生日台住宅団地計画が成されてきたところであります。

宮崎市教育委員会では、県住宅供給公社から依頼を受けて計画区域内における埋蔵文化財等の分布調査を行い、その後、試掘調査を実施し、本調査が必要であるとの認識から宮崎県住宅供給公社と協力して発掘調査を実施いたしました。

この報告書は、内野々第Ⅰ・Ⅱ遺跡の発掘調査記録と計画区域内に分布する石塔・石仏の調査記録であります。

内野々遺跡は、平安時代（9世紀）を主体とする遺跡であり、宮崎県におけるこの時代の生活跡を知る貴重なものであります。また、石塔・石仏につきましては安土桃山時代後期から江戸時代後期にかかる各種の石塔が確認され、なかでも大迫石塔群につきましては、大迫寺の存在とその歴史を想起するに貴重な石塔調査となりました。

今後、生日台住宅団地計画区域内は、地形や景観に大きな変貌を遂げることになりますが、この調査記録が関係各位の参考となるとともに文化財保護の一助となれば幸いです。

発刊にあたり、調査につきまして、色々と御配慮、御協力いただきました、宮崎県住宅供給公社、炎天下のもとで調査に従事していただきました北川内・生日地区の皆様方に対し深甚の謝意を表します。

昭和57年5月

宮崎市教育委員会

教育長 黒木定彌

## 例　　言

1. 本書は、宮崎市生目台住宅開発区域内に存する遺跡について行った事前調査の内野々第Ⅰ・第Ⅱ遺跡及び石塔調査の調査報告書である。
2. 発掘調査は、宮崎県住宅供給公社の依頼を受けて、昭和56年7月15日から同年9月5日までの期間で宮崎市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査に際して、内野々第Ⅰ遺跡・内野々第Ⅱ遺跡の2遺跡を同時に実施することとなったため、内野々第Ⅰ遺跡を、県文化課職員の派遣を依頼し、同課主事の菅付和樹氏に担当してもらった。
4. 調査の関係者は次の通りである。

### 調査主体

#### 宮崎市教育委員会

教育長	黒木定彌
教育次長	後藤立身
社会教育課長	山田義男
同課長補佐	松山耕吉
社会教育主事	野間重孝（調査担当）
社会教育指導員	諸方博文（調査担当）
○派遣調査員	菅付和樹（宮崎県文化課主事）

5. 本書の執筆分担は下記のとおりである。

第1章 序説1及び第3章.....	野間重孝
第1章 序説2及び第4章.....	諸方博文
第2章.....	菅付和樹

6. 掲載した図面の実測、製図及び図版の作成は、それぞれ調査担当者が当たった。

7. 本書の編集は野間重孝が主となって行った。

8. 本書における出土遺物は、宮崎市教育委員会が保管している。

昭和57年5月

宮崎市教育委員会

## 本文目次

第1章	序 説	1
1.	発掘調査に至る経緯	1
2.	位置と歴史的環境	3
第2章	内野ヶ第I遺跡の発掘調査	5
1.	遺跡の立地	5
2.	調査区の設定	5
3.	土 層	6
4.	遺物出土状況	8
5.	遺 物	11
6.	小 結	24
第3章	内野ヶ第II遺跡の発掘調査	32
1.	遺跡の立地	32
2.	調査区の設定	33
3.	上 層	33
4.	遺物の出土状況	35
5.	遺 構	38
6.	遺 物	42
7.	小 結	60
第4章	生日台団地建設予定地域内の石仏・石塔について	67
1.	はじめに	67
2.	調査結果	67

## 挿 図 目 次

第1図	生日台住宅同地計画区域内遺跡位置図	2
第2図	内野々第I遺跡 調査区割図	5
第3図	土層断面図	7
第4図	遺構分布図	8
第5図	第2竪穴式遺構土層断面図	9
第6図	布痕土器分布状況図	10
第7図	K-10区布痕土器出土状況図	10
第8図	出土縄文土器実測図・拓影	11
第9図	出土弥生中期土器実測図・拓影	13
第10図	出土弥生土器実測図	15
第11図	出土布痕土器実測図・拓影	17
第12図	出土布痕土器実測図・拓影	18
第13図	出土土師器壇実測図	20
第14図	出土土師器実測図及び須恵器実測図・拓影	22
第15図	出土石器実測図	23
第16図	内野々第II遺跡 地形図及びグリッド図	32
第17図	1-02区 北壁土層図・1-02区東壁土層図	34
第18図	K-02区 西壁土層図	34
第19図	K-02区 土器群出土状況	35
第20図	K-03区 上層土器群出土状況	36
第21図	K-03区 下層土器群出土状況	37
第22図	遺構配図及びグリッド図	38
第23図	2号住居跡 実測図	40
第24図	3号住居跡 実測図	41
第25図	1号住居跡出土环及び高台付壇実測図	45
第26図	1号住居跡出土环・高台付壇・鉢実測図	49
第27図	1号住居跡出土壺・櫃・広口壺・高台付壇実測図	51
第28図	1号住居跡出土遺物及び2号住居跡出土・环・高台付壇・壺実測図	53
第29図	3号住居跡出土环・高台付壇・広口壺・壺実測図	55
第30図	遺構外出土遺物実測図	59
第31図	大迫石塔群配置略図	69

## 表 目 次

第1表	内野々第I遺跡出土布痕土器一覧表	16
第2表	内野々第II遺跡出土遺物観察一覧表	43, 44, 46, 47, 48, 50, 52, 54, 56, 57, 58

## 図 版 目 次

図版1	内野々第Ⅰ遺跡遠景・第2竪穴状造構	25
図版2	△ F-5区土師器鉢出土状態・K-10区布痕土器一括出土状態	26
図版3	△ 出土縄文土器・弥生土器	27
図版4	△ 出土弥生土器	28
図版5	△ 出土布痕土器	29
図版6	△ 出土布痕土器及びその他の土師器・須恵器	30
図版7	△ 出土土師器壺・石器	31
図版8	内野々第Ⅱ遺跡遠景（南東より）	63
図版9	△ K-03区下層土器群出土状況	63
図版10	△ K-03区上層土器群出土状況（底）	63
図版11	△ K-02区 落ち込み造構	63
図版12	△ 第2号住居跡	63
図版13	△ 第3号住居跡	63
図版14	△ 1号住居跡出土遺物（环・高台付壺・麦・瓶・須恵器溶着粘土塊）	64
図版15	△ 1号住居跡出土遺物（土鍤・紡錘車・甑把手）	65
図版16	△ 2号住居跡出土遺物（环・高台付壺・麦）	65
図版17	△ 3号住居跡出土遺物（环・高台付壺）	65
図版18	△ 3号住居跡出土遺物（広口壺・麦・木の葉底）	66
図版19	△ 造構外出土遺物（环・弥生式土器）	66
図版20	△ 造構外出土遺物（石器）	66
図版21	生日台团地建設予定地域内の石塔（群）	70

# 第1章 序 説

## 1. 発掘調査に至る経緯

宮崎市生目台住宅団地計画に伴う埋蔵文化財等の調査は、当初は宮崎県住宅供給公社より、宮崎県教育委員会に調査依頼が成され、昭和51年から始められることとなった。このときの計画区域内は四方から谷間の入り込むかなり比高差のある山地であり、全体の踏査は無理な状況にあった。そのため調査は、外周のみに終り、石塔類の分布は予知しているものの埋蔵文化財の分布については確認することができなかった。そこで、これらについては、再調査の必要性が県教育委員会より指摘されていった。

その後、昭和56年になってその再調査の依頼が宮崎市教育委員会に成され、以後、宮崎市教育委員会が主体となって調査を進めることとなった。

### 埋蔵文化財等分布調査（昭和56年6月10日・11日）

分布調査は、協議によって県住宅供給公社側から区域内の案内者を立ててもらい県文化課の指導のもとに実施した。調査は、山稜の尾根伝いに歩く方法をとり、少しでも平坦面がある場合には、そこを踏査する形で行った。その結果、山ノ神、道しるべ、馬頭観音碑等の石塔の存在や埋蔵文化財包蔵地と思われる2箇所を確認することができた。計画区域内は谷間の入り込む起伏の大きい地形を成していることもあって遺跡の立地がむずかしい状況を呈していた。2箇所の包蔵地と思われる箇所は、計画区域内の東南部にあたり、北河内町の集落から北西に入り込んだ谷間に位置する川迫池を挟んだ舌状に延びた丘陵先端部のやや傾斜をもつ平坦地である。川迫池を挟んだ東側丘陵平坦部（第Ⅱ遺跡）から上師器片数点を表探している。一方西側丘陵平坦部（第Ⅰ遺跡）では遺物の表探はなかったが、遺跡の立地が予測される地形を呈していた。また、分布調査によって確認された石塔及び石塔群については今後、県住宅供給公社との協議により何らかの保存が可能な状況にあるため、所在箇所と紀年銘等の記録にとどめており、住宅団地造成着手時に保存に係る仮移転が考えられるところである。

### 埋蔵文化財試掘調査（昭和56年6月16日～18日）

埋蔵文化財包蔵地と思われる2箇所については、遺物の包含状態や層位の確認を必要とするため宮崎県住宅供給公社との協議によって、3日間の試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は、県文化課の協力と指導のもとに川迫池の西側丘陵上（内野々第Ⅰ遺跡）の試掘調査を県文化課によって行い、東側丘陵上（内野々第Ⅱ遺跡）の試掘調査を宮崎市教育委員会が担当することとなった。

西側丘陵上の試掘調査では、対象面積約1,000m<sup>2</sup>に対して5箇所の試掘トレンチをあけている。遺物としては、弥生式土器（下城式系）片の他、土師器片の包含が確認された。

東側丘陵上の試掘調査では、やや南傾斜している平坦部の中央部に南北に2×4mのトレンチを組み掘り下げていった。トレンチの南側では表土層約24cmを剥ぐとすぐにオレンジ層の上面をとらえた。北側においてはオレンジ層を掘り込んだ黒色土層を確認することができ、何らかの遺構の存在が窺われた。遺構内からは、土師器片や須恵器片が多量に出土するにいたった。

2日目には、新たに、先に組んだ第1トレンチの北側に幅50cmの壁をおいて南北に2m×東西に5mの第2トレンチを組み調査を進めた。第1トレンチの北側に確認していた遺構は、第2トレンチにおいては、北辺限界と西辺限界を検出することができ、東辺についてはなおも遺構の広がりがあるものと思われた。

調査3日目は、50cm幅で残していた壁を取り除き、落ち込み遺構の露出に専念したが遺構の性格までは判断することができなかった。出土遺物としては、土師器が主体を占め、壺や高台付焼が見受けられ、須恵器では格子目タタキの施された破片が数点出土している。また、その他に土鍬の出土があり興味深い。

以上のように両試掘地点からは、遺物、遺構の検出をみたため、前者を「内野々第Ⅰ遺跡」とし後者を「内野々第Ⅱ遺跡」とすることにした。

その後、両者の協議によって、宮崎県住宅供給公社と宮崎市教育委員会との間に「生目台住宅団地計画区域内埋蔵文化財等発掘調査に係る覚書」を交わし、宮崎市教育委員会が主体となって発掘調査を実施し、記録保存することになった。また、発掘調査は、2遺跡同時に実施することになったため宮崎県文化課の埋蔵文化財担当職員の派遣を依頼し、内野々第Ⅰ遺跡の発掘調査を担当してもらうことになった。



第1図 生目台住宅団地計画区域内遺跡位置図

## 2. 位置と歴史的環境

内野々第Ⅰ・第Ⅱの両遺跡は、大淀川南岸の市街地から西側の山地へ約4km程入り込んだ地点の宮崎市北川内町字内野々に所在する。この地域には、標高30m～100m内外の比較的起伏の激しい丘陵がひろがっているが丘陵地帯の間には盆地状の水田地帯もひろがっておりその丘陵の南側麓に住宅と狭い道路がつながっている。また、付近には丘陵の谷間に利用してつくられた溜池や追田等も多くみられることから一見して前代の農村風景を連想させるが近年の耕地整備等とともに、このような景観も失われつつある。

次に内野々第Ⅰ・第Ⅱの両遺跡が立地する宮崎市北川内町の歴史的背景についてであるが、北川内町のみの歴史には不明瞭な点が多いので本稿では同町を含む古城地域の歴史を概観することにしたい。古城地域の歴史としては、まず第一に同地域が建久8年(1197)の『日向国岡田帳』にみられる八条院領國富荘内に比定されていることをあげなければならない。國富荘は日向の土豪日下部氏によって初開発された荘園と考えられており、17ヶ所の一円荘と2ヶ所の寄郡によって構成されていることから形態的には複合荘園に属すると思われるが、このうち古城地域は大淀川下流の南岸に開かれた「一円荘 大田百町」の西城に比定されている。また、この地域は北部から西部にかけて宇佐八幡宮領の大墓別府(宮崎市大塚町)や浮田荘(同浮田、生日、小松地区)に隣接していたと考えられることから一円荘大田を中心とするこれら3ヶ荘の荘域境界が問題視されるところであるが、付近の地理的条件や地名などからみて此度の生日台圃地建設予定地付近の丘陵にそれらの境界があったことも推察される。

ところで『日向国岡田帳』にみられる國富荘内の地頭職としては「土持太郎宣(信)綱」と「平五」の二者をあげることができるが一円荘大田の地頭職はこのうちの後者にあった。この「平五」の出自や國富荘内での活動等に関しては、かれが撰闇家領島津荘の初開拓者として知られる大宰大監平季基の子息「平五大夫兼輔」との説も出されているが史料的な制約もあってその全容は解明されていない。一方、國富荘が八条院領となったのはおよそ保安年間(1120～1124)頃のことと考えられているが寿永3年(1184)4月の時点においては、八条院の本家職とともに平頼盛(池大納言)の領家職も確認されており寄郡の問題と相まってその領有、支配関係は複雑である。やがて建暦4年(1211)に八条院が没すると國富荘は他国の八条院領荘園とともに春華門院や後鳥羽天皇などの皇族に相伝されていたと考えられているが嘉慶4年(1306)に至っては後醍醐天皇の領有下に入ったと伝えられている。次いで後醍醐天皇は、元弘の変(1331)の行賞として國富荘を足利尊氏に与えているが、尊氏は應永3年(1340)6月5日付で國富荘を京都都嵯峨の應心寺(天竜寺)に寄進している。当時の國富荘内では「土持宣栄」という人物が北朝方として活動していたが、かれは先の『日向国岡田帳』にみられた土持宣綱の直系に属する人物であり、國富本郷を本拠としていわゆる「奥三ヶ国」の雄、島津貞久や足利尊氏の御台所領島津荘日向方種佐院(東諸県郡高岡町)に派遣されていた畠山直綱(足利一門の日向守護職)らの軍勢催促に応じていた。また、当時の戦闘に際しては、荘園内からの兵力動員が不可欠であったが、建武5年(1339)9月20日付の『畠山直綱軍勢催促状案』(土持文書)からは、國富荘内の名主・莊官等が「制法に背いて」直綱の催促に応じなかつたことがうかがえる。この事例は南北朝内乱期における在地領主層の反守護活動をしめすものとして注目されるがこれに対し直綱は、土持宣栄をして「催促に応じない者については、その住宅に火を放ってでも召集せよ」と嚴命してい

る。尚、建武4年(1337)4月23日付の「称対清種軍忠状」(池端文書)には「國富莊大田城」での合戦が記されているが「國富莊大田城」に関する史料はこの時期に散見されるのみであり、その後の動向や詳しい位置、創築者等は不明である。

やがて南北朝時代の末期になると「院御莊」と呼ばれた国富莊は、上持氏と伊東氏によって分割され、各々の一族に分有されているがこれは内乱期に乗じてなされた両氏の恣意的な行為であり日向における莊園制の崩壊をしめす事例のひとつに数えられている。その後、伊東氏は国富莊を足懸りとして上持氏や同族の田嶋氏等を征圧し、いわゆる「日向山東」(宮崎平野中央部)の支配権を強化していくのであるがその最大の障壁となつたのが「山西」の島津氏であった。

およそ室町時代から戦国時代にかけての日向史は島津氏の攻略に対する伊東氏の攻防戦を中心と展開されていくが当時の古城地域は、山東南部の要害である曾井城(宮崎市曾井)の管轄下にあったものと考えられる。この曾井城の歴代守将としては、伊東氏支族の曾井氏や長舟加賀守、八代彦右衛門尉等をあげることができるが伊東氏の全盛期には「伊東氏48城」のひとつとして八代民部左衛門が守將となっていた。また、伊東氏の没落後には島津氏側の守将が同城へ入っているが「上井覚兼日記」<sup>註⑫</sup>の天正11年(1583)4月26日条に「曾井の市」の記事があることから当時の曾井地区には、何らかの市場が開かれていたことも推定される。

さて、江戸時代に入ると曾井地区が既肥藩領となったのに対して、古城地域は延岡藩の飛地となっているが当時の注目すべき事例としては修験者の存在があげられると思う。例えば文政元年(1818)12月付の「修験書上帳」には、古城村や大塚(大墓)村に数人の修験者が居たと記されているが古城<sup>註⑬</sup>村に住した修験者たちの道場としては、伊満福寺(宮崎市古城町)とその背面につらなる丘陵地帯が想定されていることから内野々第Ⅰ・第Ⅱの両遺跡周辺にもその可能性が推測されるところである。

## (主要文献・史料)

註① 『日向郷土史料集』第5巻所収、日向郷土史料刊行会 昭和38年

註② 日高次吉・日高正晴『西都の歴史』西都市教育委員会 昭和51年

註③ 竹内理三『莊園分布図』下巻 吉川弘文館 昭和51年

註④ 石川恒太郎『赤江郷土史』赤江地区振興会 昭和39年

註⑤ 日高次吉『宮崎県の歴史』山川出版社 昭和50年

註⑥ 山口隼正「南北朝期の日向国守護について」～『豊日史学』第34巻2号

鹿児島史学会 昭和41年

註⑦ 上持文書『日向古文書集成』第Ⅱ類-164号 宮崎県 昭和13年

註⑧ 池端文書「同 上」第Ⅱ類-90号

註⑨ 日向記『日向郷土史料集』第10巻所収、日向郷土史料刊行会 昭和36年

註⑩ 同 上

註⑪ 同 上

註⑫ 大日本古記録『上井覚兼日記(上)』岩波書店 昭和29年

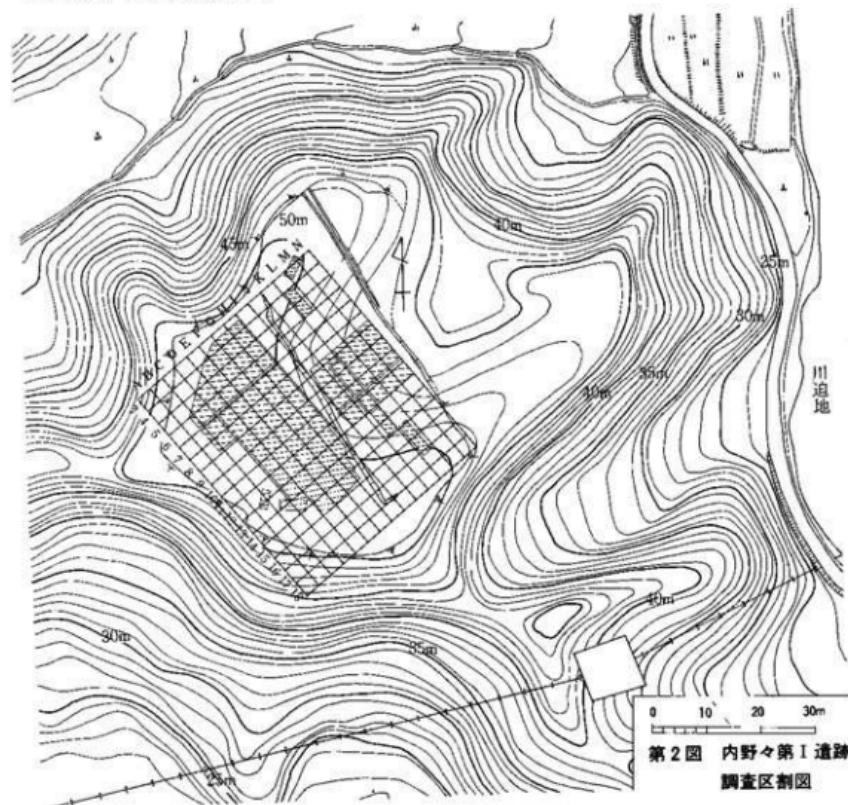
註⑬ 沢武人「修験道の美術・文学」～『山岳宗教史研究叢書』15 名著出版

## 第2章 内野々第I遺跡の発掘調査

### 1. 遺跡の立地

内野々第I遺跡は、宮崎市北川内町の丘陵地帯に位置し、北東方向に開けた標高45~50m前後の緩斜面上に営まれた遺跡である。三方は比高20~25mの急な斜面で囲まれ、西側から伸びる尾根は、遺跡の北側の東西に入り込んだ谷を囲むように続いている。東側には、現在川迫池という灌漑用大水池があり、たくさんの小谷を従えている。また、南側は、水田や人家の存在するやや開けた谷が、東から西へとのびる。この遺跡の北東側谷の出口付近には、現在も人家に水を供給している湧水点がある。そして、付近にも数ヶ所湧水が確認されており、遺跡の営なされた当時から水の便はよかつたものと考えられる。なお、谷を挟んで北東200mの地点には、内野々第II遺跡が存在する。

### 2. 調査区の設定(第2図)



第2図 内野々第I遺跡  
調査区割図

本遺跡は、戦前から戦後にかけて、一時期開墾され畠地に利用されていた。しかし、その後放棄され、現在では茅の繁茂する荒地になっていた。調査を行うにあたって、先ず茅を払った後、比較的平坦な地形に沿って $3 \times 3$ mのグリッドを設定し、西から東へA～N、北から南へ3～18としてグリッド番号を定めた。発掘調査は、畠を開く際に生じた段差に応じ、上段と下段に分けて行った。そして、緩傾斜の上段はほぼ全面を剥ぎ、小さな谷地形の下段は中央のやや平坦な部分を中心に順次トレーニチを入れ拡大してゆく方法をとった。

### 3. 土層

昭和56年6月に実施された試掘調査で、表土下から弥生中期の土器が出土したが、上段の遺物包含層は薄いことがこの時予見されていた。今回の調査では、上段については遺物包含層が耕作などによって殆ど擾乱されていることが確認された。また、谷地形の下段は中央部分にのみその存在が期待されたが、調査の結果、プライマリーな遺物包含層の確認は出来なかった。

緩傾斜とはいえ調査区の勾配差は約5mにも及ぶため、自然層の堆積状況は各区一樣ではなかったが、L-4・5トレーニチにおいて確認された本遺跡の基本的な層序は次のとおりである。

第Ⅰ層 茶褐色土。次のⅡ層の風化したもので、やや粒の粗いバサバサした層である。以前、畠地になったことがある。

第Ⅱ層 黄褐色土。粒子が細かく、ホカホカした柔かい層であり、第Ⅰオレンジ（アカホヤ）と呼ばれる。

第Ⅲ層 明褐色土。かなり粘性を帯びキメは細かい。縄文早期の遺物を含む層である。

第Ⅳ層 暗褐色土。次のⅤ層との間に切れ切れに存在する。粘性を帯び硬質のブロック状の層である。

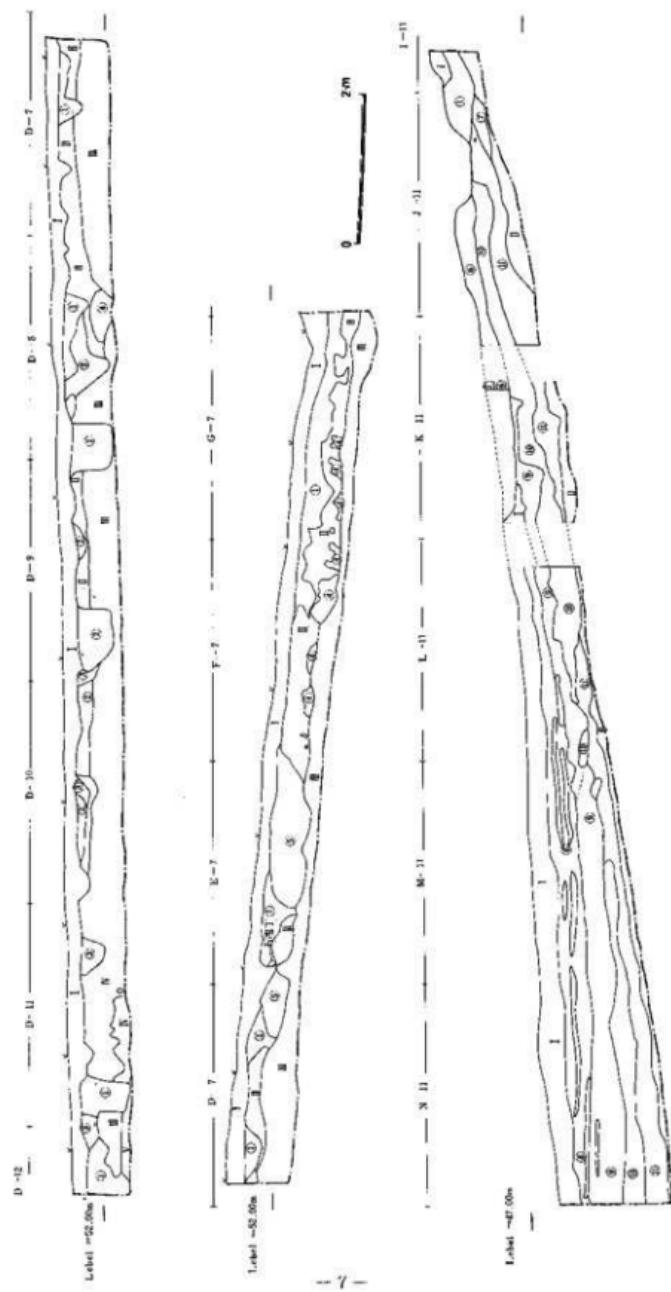
第Ⅴ層 明黄褐色土。砂質の綿まとった層である。シラスの風化した第2オレンジ層と考えられる。

実際はこのほかに、風水による二次堆積や畠地造成の際の客土等があり、また、地形による土層の堆積の違いなど複雑な様相を呈する（第3図）。

#### 第3図の説明

- |                     |                       |
|---------------------|-----------------------|
| I. 茶褐色土             | ⑤暗黄褐色側粘質土。            |
| II. 黄褐色土            | ⑥暗褐色土。若干砂質。           |
| III. 明褐色土           | ⑦暗黄褐色土。IIの風化したもの。     |
| IV. 暗褐色土            | ⑧黒褐色土+暗褐色土+アカホヤ。旧耕作土。 |
| V. 明黄褐色土            | ⑨暗褐色土。旧耕作土らしい擾乱層。     |
| ① Iの擾乱土。Iが多い        | ⑩、⑪には歎間とおこられる砂質の隙がある。 |
| ② Iの擾乱土。IIが多い       | ⑫黒褐色砂質土。谷間への流入土らしい。   |
| ③ 暗褐色砂質土。腐植土        | ⑬暗褐色土。⑫からIIへの漱移層。     |
| ④ 黄褐色硬質土。IIと同質だが固い。 |                       |

第3図 内野今第1道跡土層断面図



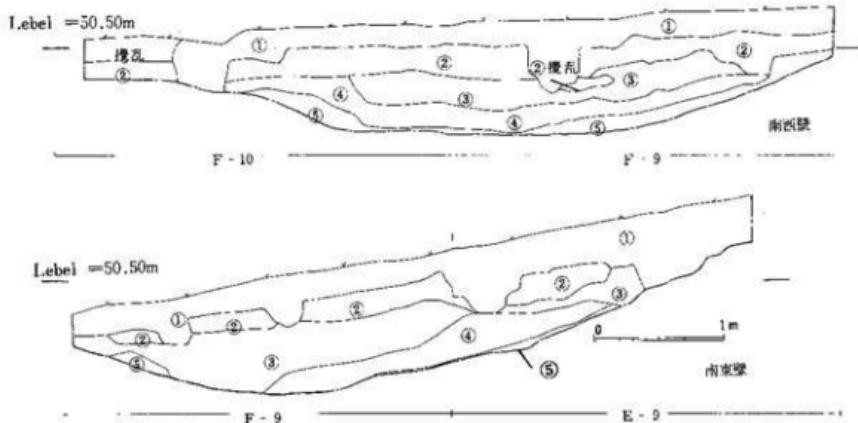
#### 4. 遺物出土状況

本遺跡は調査区全域にわたって茅がおい繁り、表面下約40cmの深さまで根がびっしりと入り込んでいた。そして上段では遺物包含層が薄く、弥生土器や土師器、須恵器等が混在していた。比較的平坦な下段の谷間ににおいても土砂の流入や客土によって、数時期の遺物が混在している有様であった。また、本来は無遺物包含層であるべき第1オレンジ層内にも弥生時代以降の土器片が出土し、風雨または開墾によって相当擾乱されているものと考えられた。

遺構としては、明褐色粘質土層まで掘り込まれた竪穴状遺構が上段で2カ所検出された（第4図）。なかでも第2竪穴状遺構は中央に幅約20cm深さ約40cmのピットがあり、東西径約165cm、南北径約510cmの不整円形をなすものである。第5図は、第2竪穴状遺構の断面図であるが、遺物は土に埋められており、傾斜地で遺物流入の可能性があるうえに遺物がいずれも細片であるため、時期については比定し難い。第1竪穴状遺構は、先の試掘調査の際に第3試掘坑にかかり、焼土が検出されていた。この落ち込みは南側の端がはっきりせず、全体的なプランも明確なものではなかった。土層の堆積は第2竪穴状遺構に比して浅く不明瞭で、約1m程度高所に位置する。試掘調査では、この遺構の南西端で弥生中期の土器が出土したが、本調査でも焼土の中に同時期の土器が、また、焼土の南側ではアカホヤに埋もれた状態で土師器が3点出土した。このうち壺と鉢とは、鉢の内側に壺を重ね、伏せた状態で出土した。その南側には底部の欠けた壺形土器が横倒位で出土した。



第4図 内野々第1遺跡遺構分布図

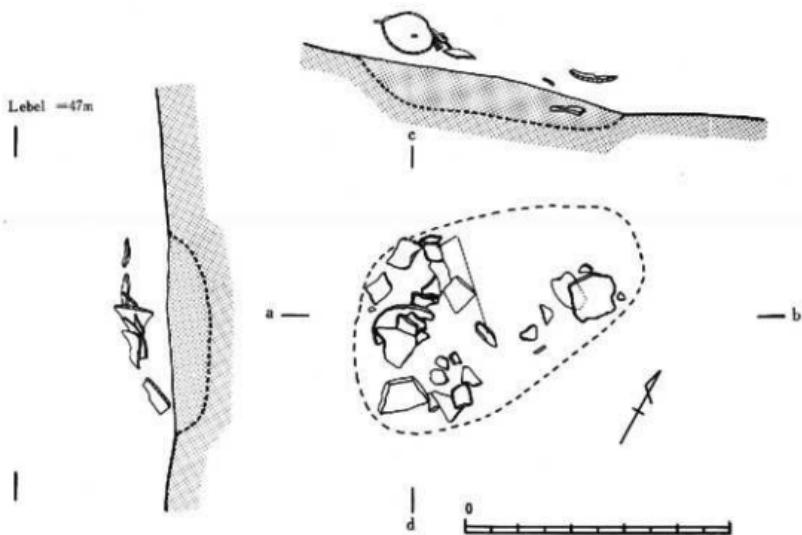
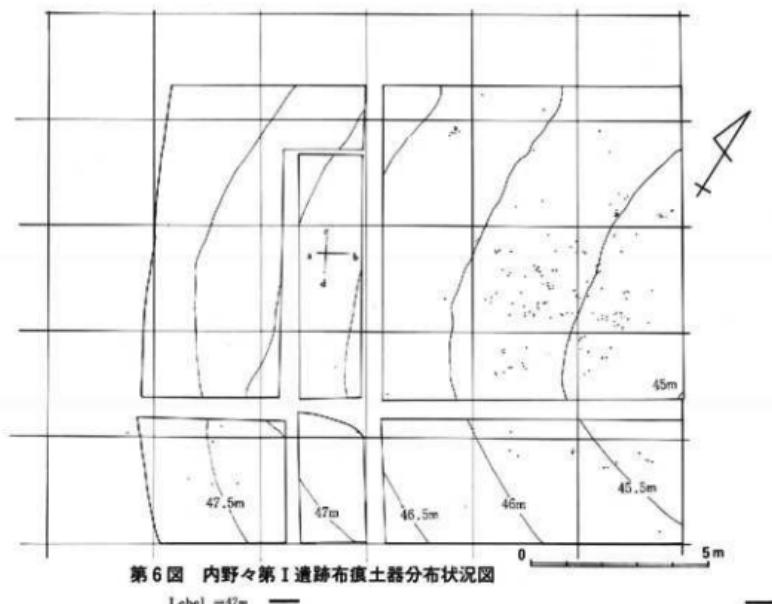


第5図 内野々第I遺跡第2竪穴状造構土層断面図

第5図の説明

- ① (茶) 褐色土……表土。キメ荒くパサつく。土質は柔かい。
- ② 黒褐色土……キメが細かく固く縮まっている。
- ③ 暗褐色土……若干粘性を帯び、縮まっている。
- ④ 晴茶褐色土……アカホヤ粒を含み粘性を帯びる。縮まっている。
- ⑤ 明褐色土……黄褐色に近いキメ細かな層で粘性を帯びる。基本 層序の上にあたる。

下段の谷地形では、土師器片や弥生式土器片とともに内器面に布痕のある土器片が多数出土した。その分布はMN-9~11区に集中し、標高45m~50cm前後に偏在する(第6図)。K-10区では特に一括して出土したが、数個体の破片の集まりであり、何ら造構を伴わなかった(第7図)。他の土師器片、須恵器片、弥生土器片は主に旧耕作土の暗褐色土層及びアカホヤ上面の風化層等から出土している。



第7図 内野々第I遺跡K-10区布痕土器出土状況図

## 5. 遺物

今回の発掘調査において出土した遺物は、縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・石器等であるが、いずれも小さな破片が多く、完形になるものは土師器2点、弥生土器1点、打製石鏃1点、石庖丁1点のみである。また、明らかな遺物包含層として確認し得るのは縄文土器の出土した明褐色粘質土層のみで、他の遺物は上に上段ではアカホヤ上面の風化層及び表土下部、下段では旧耕作土或いは流れ込みによるとみられる堆積土中、そしてアカホヤ上面の風化層に混在し、相当の擾乱を経ているものと考えられる。

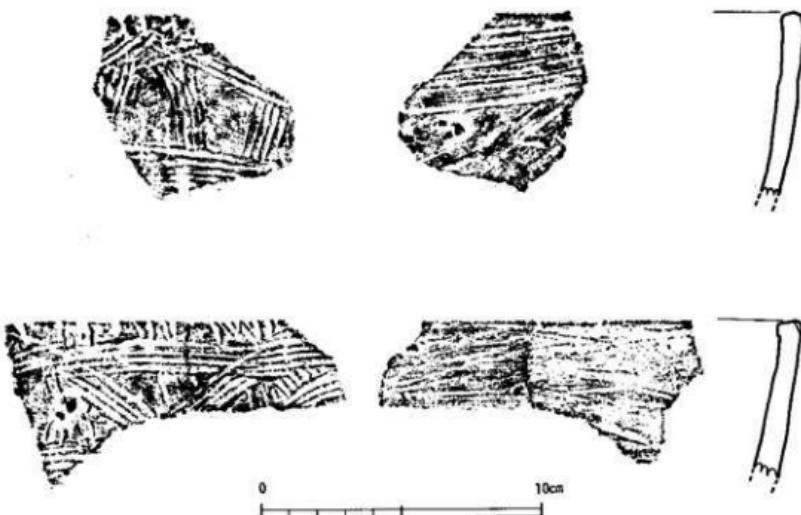
### 〈土 器〉

#### 縄文土器 (第8図)

D-7区・C-7区から数点出土した。焼けた礫や黒曜石のチップとともに出土している。口唇外面に刻み目を持つ条痕土器である。

1は、口縁部がやや丸みを帯び若干肥厚するもので、貝殻条痕文が内外面ともに見られる。施文順位は、縦、斜め、横の各方向の順である。口唇部外面にはヘラ状の施文具によるとみられる粗雑な刻み目を持つ。器厚7mmを測り、胎土には雲母粒を含む、焼成良好な淡褐色を呈する土器である。

2は、内外面ともに貝殻条痕文が施され、口縁部端が半らに整形されている。また、口唇部はわずかに肥厚し、外面に粗雑な刻み目が不統一な間隔でつけてある。外面の施文順位は、縦、斜め、横の各方向の順である。色調は淡褐色で焼成良好な器厚8mmの土器である。1・2とも条痕は幅11.8mm、4条を1単位とする。



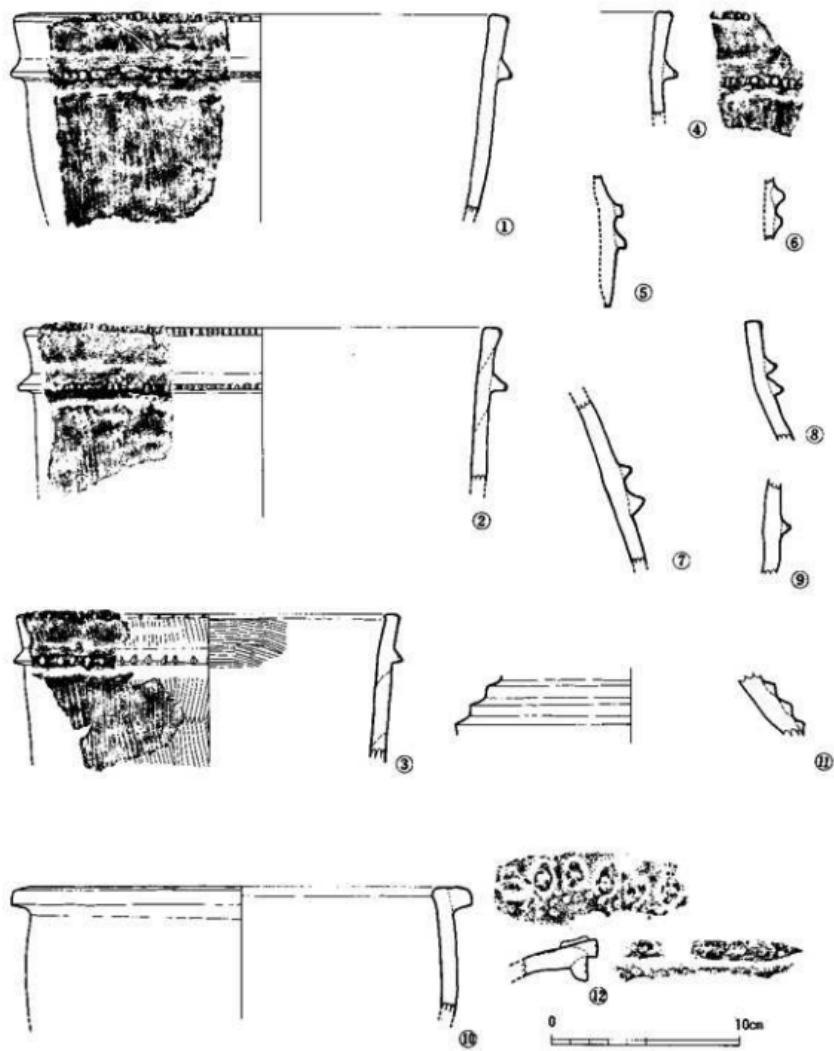
第8図 出土縄文土器実測図・拓影

## 弥生土器 (第9図～第10図)

弥生式土器片は遺跡全面に分布するものの上飾器片や須恵器片等と同レベルに出土している。出土遺物は細片が多いためここでは特徴的なものや大きめの破片についてできるだけ図示した。

第9図は弥生中期の様相を示す上器である。1はD-5区～E-5区にかけて出土し、2はF-5区焼土内出土である。1・2ともに口唇部と突帯に刻み目が施されているが、深さも間隔も乱れている。口唇部はややふくらんでいる。内面は斜め方向のハケメの上からナデ調整。口縁部は平らで横ナデ。外面は縦ハケのあと突帯を付けて両側を横ナデしている。突帯下部にはそのまま縦ハケメが残る。1の胎土には1～3mmの白っぽい砂粒が多く含まれ、黒雲母の極細粒もみられる。2には2～10mm大的白っぽい砂粒が含まれる。1・2とも焼成は良好で、色調こそ1が茶褐色、2が明赤褐色と違うが、器厚や胎土、調整など同一個体と考えられる。推定口径26cm前後。3は、F-14区アカホヤ層上面出土。調整手法は1・2と同じである。口唇部は丸く端部が若干内湾する。胎土に5mm大的砂粒を少し含む。淡褐色を呈し、焼成は良好。推定口径20.5cm。4は試掘の際1と同地点から出土した。胎土・色調・焼成・突帯の様子など1と同一個体と考えられる。これら1～4の蝶形土器はいわゆる「下城式」と呼ばれるもので、直立ぎみの口縁を持ち、薄糸平遺跡出土のものと同手法である。5～7は突帯土器の刺部分である。5・6は裏面の刺離が美しい。L-9・M-10区から出土。突帯部分は貼り付けた後横ナデ。その上下は横方向のミガキがかかっていてなめらかである。胎土に細砂粒を含む淡黄褐色の上器である。焼成はやや甘い。7は試掘の際、1・4とともに出土したもので、2条の突帯を貼り付けた後、横ナデしている。突帯の上下には、縦ハケメが残りその上を横ナデする。スヌの付着がみられる。内外面ともに茶褐色を呈し、内面は横ナデがみられる。器厚8mm。胎土に2～5mm大的砂粒を含み焼成は良好である。8はJ-11区旧耕作土中出土。口唇部は平らでわずかに肥厚し、口唇部外周と2条の貼付突帯上に刺突による刻み目が入る。口縁部はかなり内傾する。全面横ナデが施される。胎土に1.5～4mmの砂粒を含み、焼成は良好。淡褐色を呈する。器厚8mm。9はK-12区アカホヤ層上面出土の胴部片である。1条の突帯の上に規則的に幅広の刻みを斜めに施している。外面調整は横ナデ、内面は斜め方向のハケメが見られる。内外面とも淡黄褐色で1～2mm程の砂粒を含む。焼成は良好。10は肥厚した口縁部を持つ蝶形土器片。F-9区第2堅穴状遺構のふちに流れ込みの状態で出土。L字状の貼り付け口縁を持ち口縁部は内湾する。風化のために器面調整は不明である。胎土に小さな砂粒を多く含み淡赤褐色を呈す。焼成は良好。推定口径24.5cmを測る。11はKL-9区出土の蝶形土器の肩部片。3条以上の突帯を有すると思われる。突帯部分は貼り付けた後横ナデを施す。胎土に細砂粒を多く含み淡黄褐色を呈する。焼成は良好。12はD-8区表土内出土である。蝶形土器の口縁部と考えられる。口唇部及び直下の突帯は貼り付けによるもので、径4.5mmの竹管によるとみられる刺突文がめぐる。口縁部上面には、長径1.5cmの楕円形の豆粒状貼り付け浮文がほぼ等間隔にならぶ。浮文の内側には同竹管による刺突文が施される。胎土は砂粒を多く含み暗赤褐色を呈す。焼成は良好。

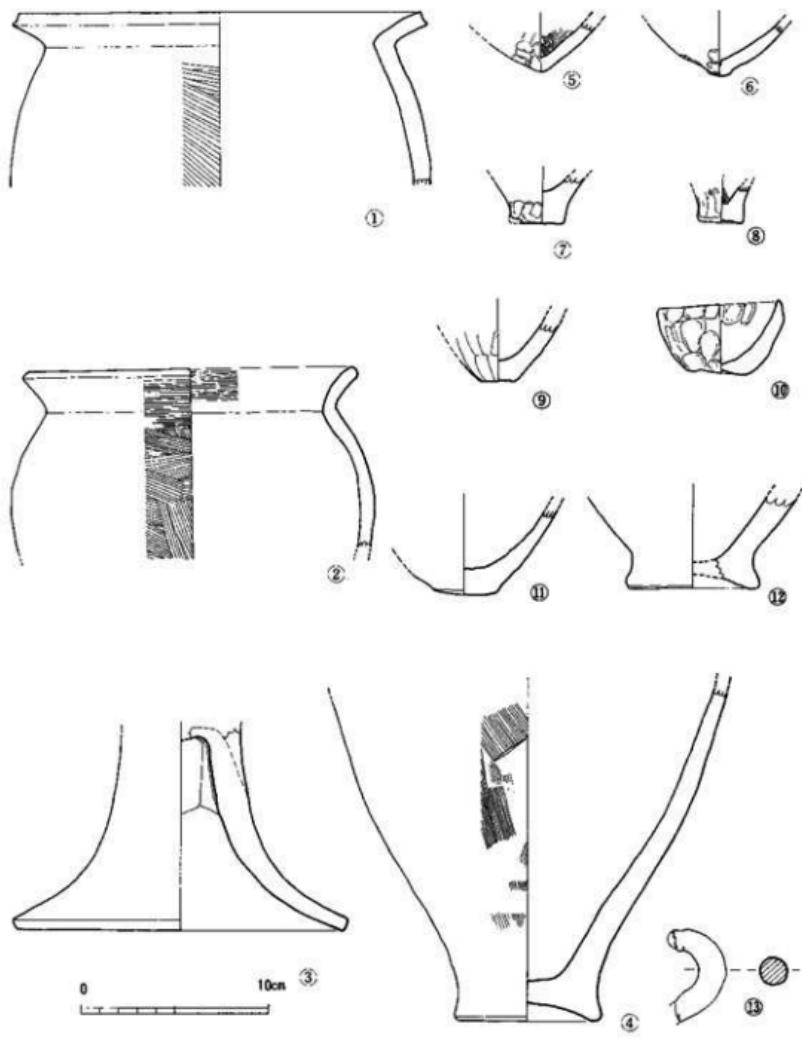
注(1) 「薄糸平遺跡」 日本鉄道建設公團下関支社・高千穂町教育委員会  
昭和53年3月



第9図 内野々第1遺跡出土弥生中期土器実測図・拓影

第10回はその他の弥生土器について図示したものである。

1・2は変形土器の口縁部である。1は外面頸部から胴部にかけてハケメ調整がなされ、口縁部及び内面は横ナデである。胎土に1mm前後の砂粒を多く含む。焼成は良好でやや赤味を帯びた淡茶褐色を呈する。胴部には部分的にスス痕も見られる。K-13区アカホヤ層上面出土。推定口径21.4cm。2は外面をハケメ調整し、口縁部は横方向のハケメを施す。内面頸部以下は剥離のため不明。胎土に1mm大の砂粒を含む。焼成は良好で全体に淡褐色を呈し、外面は少々赤味を帯びる。外面口縁部や胴部にはスス痕が見られる。推定口径17.2cm。K-14区アカホヤ層上面出土。3はK-14区アカホヤ層上面出土の高壺の脚部である。全面的に風化が著しく調整はわざりにくいか、内外面ともにハケメがみられ、内面裾部は横ナデである。内面の壺部直下はヘラ状の道具でくり取った痕跡がある。胎土に黒雲母や石英の微粒子を含む。焼成は少しだけ、内外面ともに淡赤褐色を呈す。4は変形土器の胴部以下である。全面に風化が進み内面調整は不明。外面にかすかに縱方向や斜め方向のハケメが見られる。底部外面は横ナデ、裏面はナデ調整されている。胎土に1~2mmの砂粒を多く含む。焼成は良く淡褐色を呈する。若干上げ底である。K-12・13区出土。5・6は尖底ぎみの底部片である。5は風化しているが、外面に指頭痕が残り、内面は指によるたまわりのナデアゲがなされる。胎土に1mm以下の細砂粒を多く含む。焼成は良好で、外面淡暗褐色、内面淡黄褐色を呈している。K-13区アカホヤ層上面出土。6も風化が進んでいるが外面に指頭痕が残り、その上をナデしている。底部は指つまみによって成形してある。内面調整は不明。胎土に1~2mmの砂粒を多く含む。焼成は良好で内外面とも淡黄褐色を呈す。外面にスス痕らしいものが見られる。K-14区アカホヤ層上面出土。7・8は割合小型の土器の底部である。7は底部にわずかに指頭痕が残るが、内外面ともにナデ調整されている。胎土に1~5mm入の砂粒を含む。焼成は良好で全面淡黄褐色を呈する。D-6区表土下部出土。8は風化が著しく調整痕は判りにくいが、外面にはハケメやヘラ痕らしきものがみられ、内面はハケメ調整されている。胎土は細かく1mm以下の砂粒を少量含む。焼成は良好で淡黄褐色を呈す。D-11区出土。9・11・12は底部片である。9は風化が著しく調整は不明。外面はハケメがかすかに観察される。胎土は細かく焼成も良い。焼きムラがあり暗褐色~褐色を呈している。上段出土。11は同じく風化が進んでいる。全面ナデ調整がなされている様である。底部は不安定である。胎土には2~4mm前後の砂粒が多く含まれて表面に浮き出ている。焼成は若干甘く、内面に一部焼きムラがある外は淡黄褐色を呈している。K-13区アカホヤ層上面出土。12は内外面ともに横ナデ。少し上げ底になる。胎土に1mm前後の細砂粒を含む。焼成は普通で赤褐色を呈する。G-8区出土。10は手捏ねのミニチュア土器である。外面及び内面の口縁部に指頭痕が残る。内面はナデられている。風化が著しい。胎土は細かく焼成は良い。内外面とも淡褐色を呈する。E-8区出土。13は把手と思われる部分で、断面径1.4cmを測る。風化しているがナデ調整と思われる。胎土に1~1.5mmの砂粒を含む。細かな胎土である。焼成は良好で淡赤褐色~淡黄褐色を呈す。M-8区アカホヤ層上面出土。



第10図 内野々第I遺跡出土弥生土器実測図

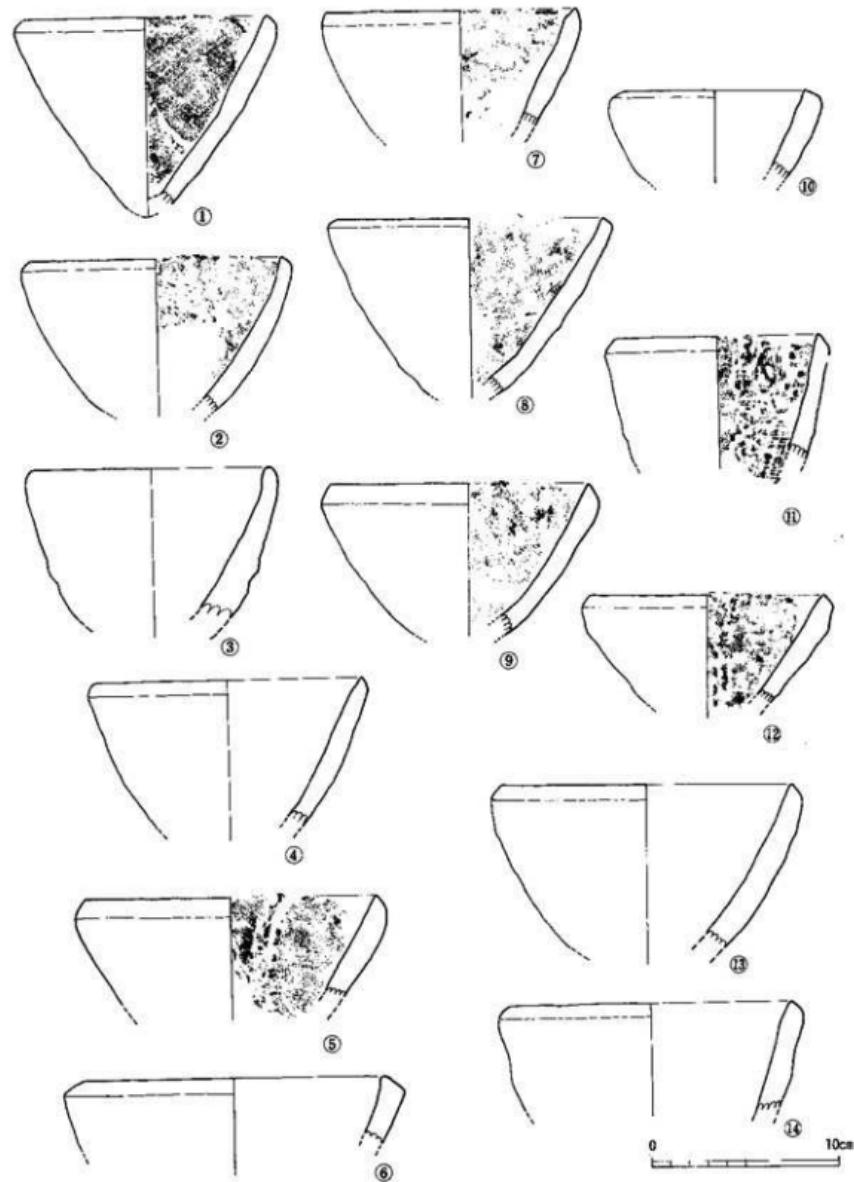
## 土器（第11図～第14図4まで）

今回の調査では、県内でも出土例の少ない内器面に織布の圧痕のある鉢形土器が多数出土した（第I表、第11図～第12図）。

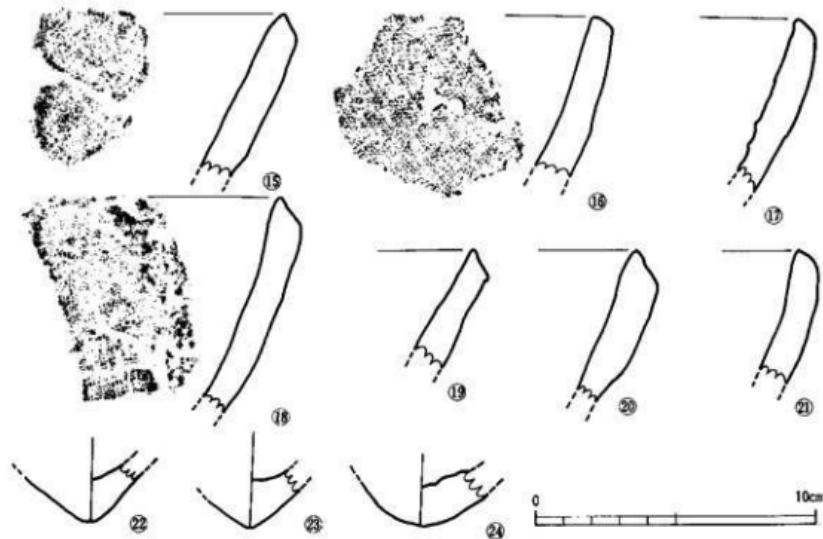
これら布痕土器は胴部から口縁部にかけて若干厚みを増し、口縁端は外側へ斜めにそぎ落とされている。このそぎ落としは、同一個体においても箇所によってその角度が違い、平坦に近い部分から鋭い角度の部分まである。また、成形は手捏ねによるもので外面には凹凸が残る。瓦の製作技法に類似している。破片も不規則な割れ方を示す。同一個体でも計測する箇所によって口縁部の厚さのかなり違うものがみられることがある。同様に同一個体でも布目の乱れがあり、計測箇所によっては密度の違うことがある。故に1cmあたりの経糸・緯糸の本数もそれ程参考にならない。この布痕土器は非常に吸水性が強いので、使用範囲も制限されると考えられる。以上、布痕土器の特徴を述べたが、底部は基本的には尖底をなすものと思われる。第12図24は尖底の変形と考えた方が良いと思われる。

第I表 内野々第I遺跡出土布痕土器一覧表

捕獲番号	出土地区	胎 土	燒 成	色 調	1mあたり の石片数(箇所)	推定口径 (cm)	備 考
第11図1	K-10区 アカホヤ層上面	1~6mmの小石を含む。	普通	淡茶褐色	8×8	12.9	布痕あり。布の擦り落とします。一括出土。
2	K-10区 アカホヤ層上面	細かい砂粒を含む。	良 好	茶褐色	8×7	13.4	一括出土。
3	M-8区 アカホヤ層上面	2~5mmの小石を多く含む。	良 好	淡茶褐色	7×7	12.5	口縁が少し削けた跡がある。底付近は砂利。
4	M-10区 暗褐色薄移層	1mm程度の小石を含む。	良 好	淡赤褐色	不明	14.2	布痕は消耗著しい。
5	K-10区 アカホヤ層上面	3~7mmの小石を含む。	普通	淡茶褐色	7×7	15.5	口縁が削けた跡がある。底付近は砂利。
6	L-N区	1~3mmの砂粒を多く含む。	良 好	明赤褐色	10×10	16.0	布痕は少し消耗している。やや薄である。
7	K-10区 アカホヤ層上面	4mm程の小石を含む。	普通	淡茶褐色	7×8	13.3	一括出土。
8	K-10区 アカホヤ層上面	細かい砂粒を含む。	良 好	茶褐色	6×6	14.1	底付近は2枚。砂利と砂岩も。底付近は砂利が多い。
9	不明	細かい砂粒を含む。	普通	淡茶褐色	5×5	13.7	
10	L-N区 アカホヤ層上面	2~10mmの小石を含む。	良 好	淡茶褐色	不明	9.5	布痕は消耗著しい。
11	N-10区 アカホヤ層上面	2~5mmの小石を多く含む。	やや良好	淡茶褐色	不明	10.7	口縁が削けた跡がある。砂利が混入。底付近は砂利が多い。
12	K-10区	細かい2~3mm角の砂粒を多く含む。	普通	赤褐色	9×9	12.5	布の擦り落としがみられる。
13	K-10区	1~3mmの小石を多く含む。	普通	赤味を帯びた淡茶褐色	不明	15.4	布痕はかなり消耗している。
14	N-11区 アカホヤ層上面	やや砂。	良 好	淡赤褐色	7×5	15.0	布痕は少々消耗している。
第12図15	L-N区	2~3mmの砂粒を含む。	普通	淡茶褐色	5×6		
16	M-10区	粗面4mm程度の小石を主に含む。	良 好	赤褐色	7×9		
17	M-11区 暗褐色上面	1~8mmの石を含む。	良 好	淡黄褐色	6×8		
18	M-10区 暗褐色底面以上	底なし。	良 好	淡茶褐色	8×8		
19	I-9区 アカホヤ層上面	3mm程の小石を含む。	良 好	淡黄褐色	7×8		口縁のそぎ落としが鋭い。
20	N-11区	2mm程の砂粒を多く含む。	普通	淡黄褐色	不明		布痕は消耗している。
21	N-10区 暗褐色上	1~5mmの砂粒を多く含む。	普通	黄褐色	不明		布痕は消耗している。
22	不明	1~2.5mmの砂粒を含む。	良 好	にぼい褐色	不明		底付、目地の剥離が見れる。表面の化粧が薄い。
23	L-N区	~2mmの小石を含む。ややかわい。	良 好	にぼい褐色	不明		底部。布痕がかなり消耗している。底。
24	L-N区	1mm程の砂粒を含む。	普通	淡赤褐色	不明		底部。布痕は消耗している。やや尖底に近い。



第11図 内野々第I造跡出土布痕土器実測図・拓影



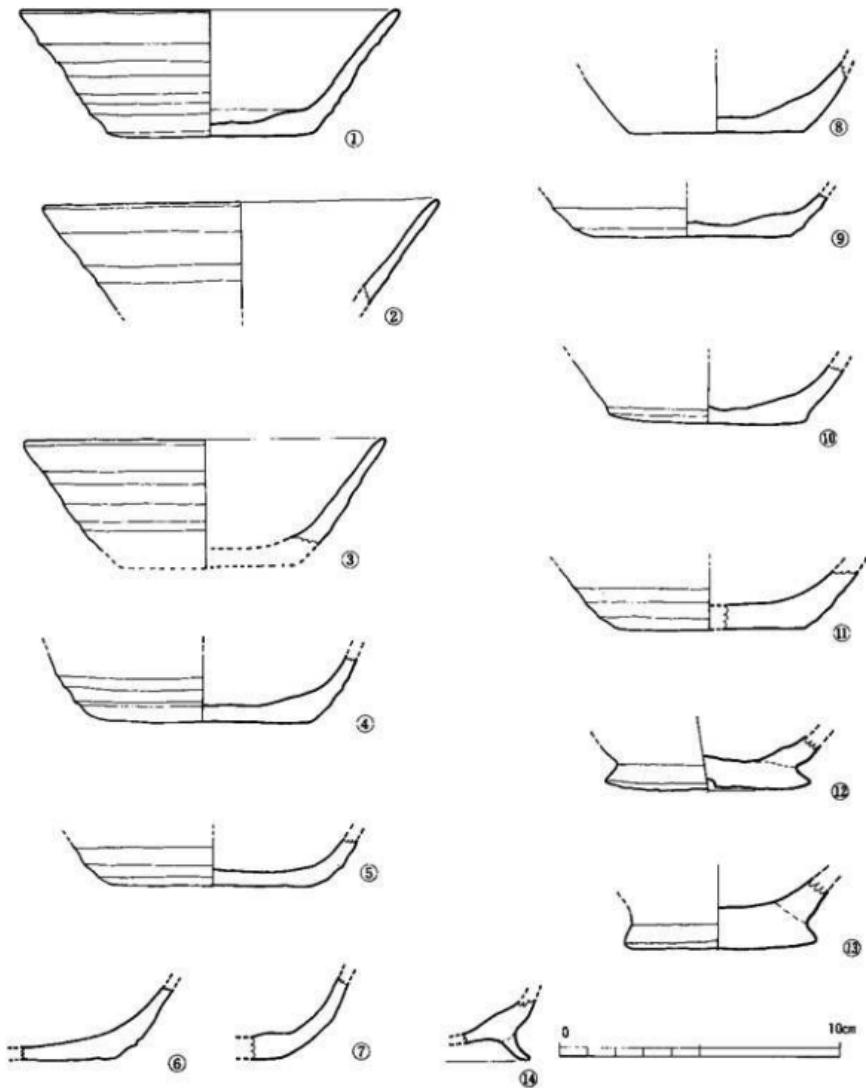
第12図 内野々塚I遺跡出土布痕土器実測図・拓影

註(1) 都城市尾平野洞窟、串間市下弓田遺跡、小林市こまくりげ遺跡、同市竹山遺跡、西都市国分寺跡、清武町宮崎学園都市遺跡5号・7号、同町辻遺跡、同町清武城址など次第に出土例が増加してきているが、いずれも出土量は少ない。

第13図1~11・14は下段の谷地形から、12・13は上段から出土した土師器塊である。これらの土師器は第II遺跡に関連するものと思われる。出土層位については第3図による。

1は推定口径13.5cm器高4.5cmを測る。内面はナデ、外面は強い横ナデ調整である。底部は風化が著しく切り離し手法は不明である。胎土は小砂粒を少々含むが精選されている。焼成はやや甘く内外面とも淡黄褐色を呈す。M-10区⑪層下面出土。2は推定口径14cm。内外面ともに横ナデされ、胎土は精選されている。焼成は良好で茶褐色を呈す。M-11区⑪層上面出土。3は推定口径12.9cm内外面ともに横ナデされ、胎土は精良。焼成がやや甘く淡黄橙色を呈す。M-10区⑨層出土。4はヘラ切りの底部片である。内面はナデ、外面は強い横ナデがなされ、胎土は精選されている。焼成がやや甘く赤褐色を呈す。N-9区⑪層下面出土。5もヘラ切りである。調整、胎土、焼成、色調とともに4に同じである。N-10区⑩層下面出土。6は風化が著しいため、底部の切り離し手法は不明。内外面ともにナデ調整と思われる。胎土には1~2mmの砂粒を多く含む。焼成は甘く淡赤褐色を呈する。出土層位は不明。7も風化が著しいため外面の調整は不明である。内面はナデ調整である。胎土はやや粗く細砂粒を多く含む。焼成は少々甘く赤褐色を呈す。N-12区⑪層上面出土。8はヘラ切りである。内外面ともにナデ調整がなされている。胎土に小砂粒を少し含み、焼成は良好である。暗黄褐色を呈する。M-11区⑨層出土。9は風化のために切り離し手法は不明である。内面はナデ、外面も強い横ナデがなされている。胎土に小砂粒を多く含む。焼成が甘く淡褐色を呈す。MN区⑨層出土。10は内外面ともナデ調整で、平底の底部もナデられている。胎土は小砂粒を少し含むが精良。焼成が良く赤褐

色を呈す。M-11区⑩層下面出土。11は内面がナデ調整され、外面は強い横ナデである。胎土に1～2mm大的砂粒を含む。焼成が良く赤褐色を呈する。L-10区⑪層下面出土。12・13はE F-9区の表土下部出土のもので、ともにヘラ切りの横に張り出す厚い底を持つ。内外面は横ナデがなされる。12は、底部中央にヘラで押し上げた様な孔がある。胎土には2mm前後の砂粒が少々含まれるが、精選されている。焼成は良く淡黄褐色を呈す。13は胎土に1～3mmの砂粒を含む。精良。焼成は普通で淡黄褐色～淡赤褐色を呈す。14は高台片である。全面横ナデされ、胎土は精選されている。焼成がやや甘く淡黄褐色を呈す。M-9区⑨層出土。



第13図 内野々第1遺跡出土土師器塚実測図

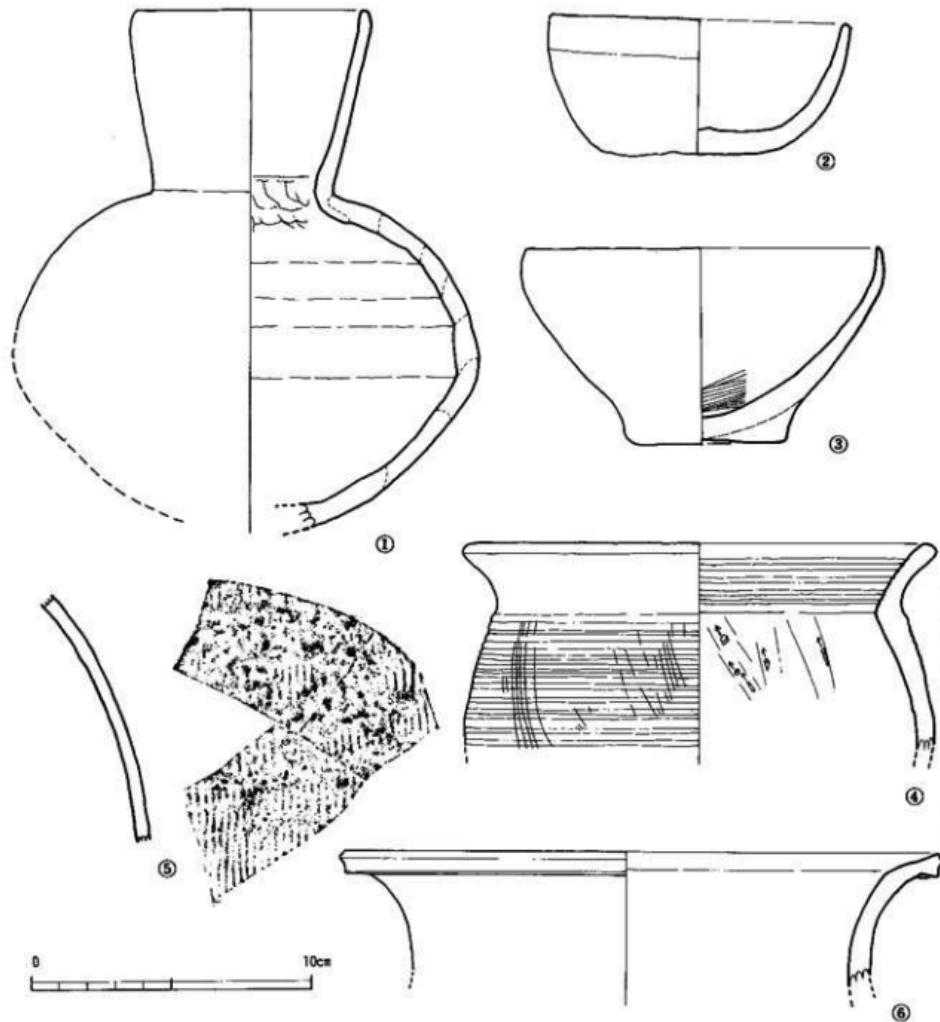
第14図1～4は前述以外の土師器である。このうち1～3は、第1竪穴状遺構の東南端と推測されるF-5区から出土した。

1は口縁部径8.3cm胴部最大径16.5cmを測る壺形土器である。口縁部は若干外に開き口唇部が丸く内溝する。胴部は張っている。底部を欠いているが、丸底になると考えられる。内面は横ナデがなされ、淡褐色。輪積みのあとが明瞭に残り、頭部にはシボリのあとが凹凸になって残っている。外面は部分的にヘラで磨かれているが、殆ど風化して調整ははっきりしない。淡赤褐色を呈す。胎土に灰はや石英砂を含む。焼成は良好。推定器高18.5cm。2は3の内側に重ねられ伏せた状態で出土した。器高4.8cm、口縁部径10.5cmの完形壺形土器である。内面調整は横ナデ、外面は斜めのナデである。底部は右回りに約1cm幅で粘土紐を巻いて成形してある。口唇部はややふくらみ、浄土江遺跡出土の土師器に見られる様な指頭つまみによる横引きが軽くなされている。胎土に0.5mm程の砂粒を多く含む。焼成はやや甘く、全体に淡赤褐色を呈する。3は器高6.8cm、口縁部径12.5cmの鉢形土器である。底部を一部欠損しているがほぼ完形である。口縁部が若干内溝ぎみにたちあがる。内面は口縁部から胴下部にかけて横ナデ、底部は横方向のハケメを施す。外面は、風化が著しいため調整不明だが、口縁部は横ナデである。胎土には1mm角の砂粒を多く含み、焼成が甘く淡赤褐色を呈す。4はK-10区布紋土器群の南側出土壺形土器片である。推定口径16.1cm。ぐの字形に外反する頭部から口縁部にかけて指頭つまみによるとと思われる横引きのナデが施され、口縁部内面は横ナデの上に少し深めの横ハケメが施される。また内面頭部から胴部は下から上方向へのヘラケズリが見られる。外面頭部以下には深めの横ハケメが施され、部分的な縦ハケメもみられる。これらのハケメはクシメと呼ぶ方がふさわしいかも知れない。内外面ともに淡褐色を呈し、胎土に2～3mm程の砂粒を多く含む。焼成は良好。

第14図5・6は須恵器である。本遺跡での須恵器の出土量は少ない。いずれも小破片である。

5は胴部片である。器厚4.5mmを測る。内面は青灰色を呈しなめらかである。外面は少々磨耗しているが自然釉がみられ平行タキが残る。胎土に2.5mm程の砂粒をまばらに含む。焼成は良好。第2竪穴状遺構内F-9区暗茶褐色土層出土。6は壺形土器の口縁部である。口縁部端がわずかにくぼみ、調整は丁寧である。胎土は細かい。焼成が良く、内面は灰茶褐色、外面は黒褐色を呈し、ともに自然釉がかかること。推定口径21.1cm。N-10区旧耕作土の暗褐色土層出土。

註(1) 「浄土江遺跡」 宮崎市教育委員会 1981年

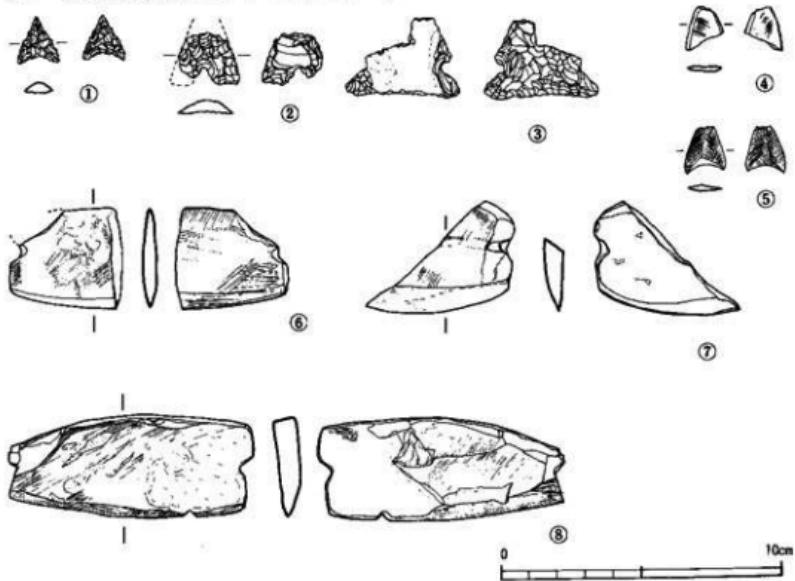


第14図 内野々第I遺跡出土土器実測図及び須恵器実測図・拓影

### 石器（第15図）

石器の出土量は少なく、土器との共伴関係の確認されたものは一点もない。

1はG-10区表土除去後に採集された打製石鎌である。全長1.4cm最大厚3.5mmを測る。チャート製。全体的に磨耗している。刃部調整は丁寧で両側から細かく交互に打ち欠いている。2はE-4区第1竪穴状造構西側アカホヤ層上面出土の打製石鎌である。基部、先端部が欠損している。刃部調整は粗雑である。現最大厚4.5mmを測る。姫島産と思われる白っぽい黒曜石製。3は下段において採集されたものである。チャート製。石匙の未成品と考えられる。内部は部分的に調整してある。これら1~3は明褐色粘土層において確認された縄文土器に伴うものと思われる。4・5は磨製石鎌である。4は先端部及び基部を欠く。砂岩製。D-13区表土下のアカホヤ層上面で出土した。刃部に棱を持ち研磨の際の擦痕が見られる。5はL-15区表土下アカホヤ層上面出土。頁岩製。研磨痕が著しく先端部は欠損している。中央に棱を有する。6~8は頁岩製抉り入り磨製石庖丁である。6はJ-11区南側表土出土。方形を呈し抉りの調整は丁寧である。刃部は数回角度を変えて研磨してある。全面に研磨痕が残るが、所々剝離時の面を残したままの状態で完全には研磨されていない。7は刃部が弧状になる。抉りは丁寧に研磨され、片側には紐状の細い擦痕が残る。表裏ともに剝離時の粗い面を残したままである。F-10区表土出土。8は不整方形を呈す。全体的に調整が雑で、剝離時の打点や円錐体、フィッシャーが残っている。研磨は刃部及び両側の抉りのみに行われ、刃部でも完全には磨き出している。表面の研磨は凹凸を若干均す程度のものである。抉りの調整は6・7に比べると雑である。これら4~8は弥生式土器に伴うものと考えられる。



第15図 内野々第I遺跡出土石器実測図

## 6. 小 結

今回の内野ヶ第1遺跡の調査では、遺構に伴う確実な遺物が見られなかった。そのため竪穴状遺構等の性格は不明である。ただ、第1竪穴状遺構の南西端で出土した完形の鉢や壺及び完形に近い壺形土器などは、それがその場に置かれていた状態での出土とみなすならば、第1竪穴状遺構の當された年代はこの土師器に近いものとなるだろう。しかし、一方では弥生土器が上段下段に広く分布するのに比べて土師器は主に下段に分布し、上段の遺構周辺にはあまり見られないことも指摘できる。また、第1竪穴状遺構と第2竪穴状遺構との間に時期差がみられるか否かについては今のところ言及し得ない。第2竪穴状遺構も床面近くから須恵器片などが出土しているが、傾斜が大きいので流れ込みの可能性が強く、これらの遺構の時期比定は今後同様の発掘例が増加するのを待って再考したい。

遺物の中で注目されるのは、割合多量に出土した織布痕のある土器である。この布痕土器は以前縄文時代の遺物とともに出土したこともあるが、その胎土や焼成、色調さらに製作技法が布目瓦と近似している点などから、やはり土師器とみなしたい。そして布目瓦との関連や用途については資料の増加（とりわけ遺構に伴う）に待つところが大きいため、今後の課題としたい。層位的には布痕土器より若干土師器が上層に位置していたが、これも傾斜地ゆえに流れ込みの可能性があり、即、時期差とは考え難い。

また、本遺跡出土の口唇部に刻み目を持つ条幅文土器は、県内では若宮田遺跡で報告されているが、その出土例は少なく、今後究明されるべき課題である。施文方法等からは縄文早期のものと思われる。

上段出土の壺形土師器は淨土江遺跡のものより新しいと思われ、壺や鉢にはその手法が一部遺存していると考えられる。さらに布痕土器は下段出土の回転ヘラおこしの土師器の時期にそう遠くない頃のものと考えられることから、これらは平安時代前半頃に比定するのが妥当ではなかろうか。

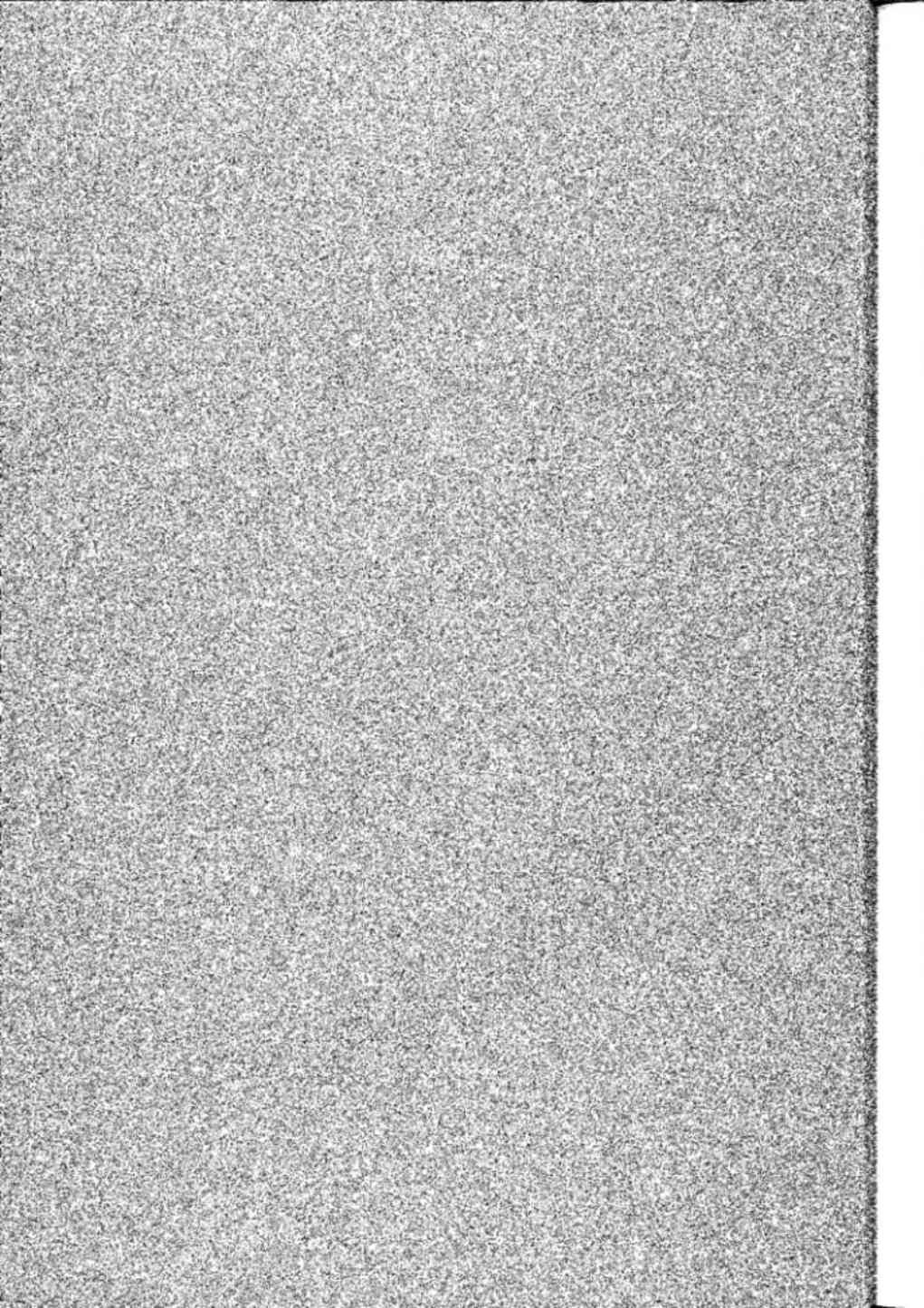
以上、本遺跡が當された時期は、時間的制約の中で調査なし得た限りでは、縄文早期、弥生中期、平安前半期の3時期であった。しかし、土器の出土量や出土例が少ないと、遺物が遺構に明確に伴うものかどうか不明であること、数時期の遺物が混在していることなど、それぞれの時期の性格についてはいずれも把握するのに困難な状況であった。また、遺物の整理・検討に十分に時間をかけることができなかったために、考察不十分な点が多くあることは否めない。御教示を乞う。

註(1) 「若宮田遺跡」 南高崎農業協同組合・清武町教育委員会 1979年

宮崎郡清武町若宮田所在の遺跡。

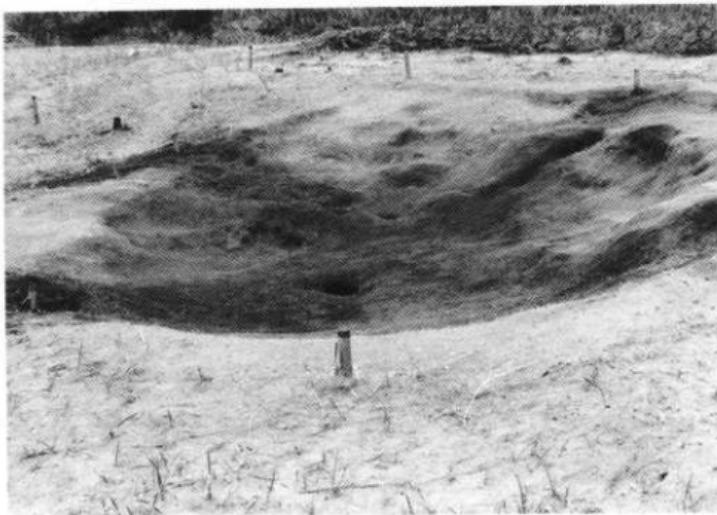
(2) 「淨土江遺跡」 前掲。6世紀中葉から8世紀中葉に比定されている。

# 図 版





内野々第Ⅰ遺跡遠景



内野々第Ⅰ遺跡第2竪穴状遺構  
図版1 内野々第Ⅰ遺跡遠景・第2竪穴状遺構



内野々第Ⅰ遺跡、F-5区土師器鉢出土状



内野々第Ⅰ遺跡K-10区布痕土器一括出土状態

図版2 内野々第Ⅰ遺跡F-5区土師器出土状態

内野々第Ⅰ遺跡K-10区布痕土器一括出土状態



①



②

内野々第I遺跡出土縄文土器



①



⑤



⑥



⑧



②



⑦



⑨



⑩



⑪



③



④



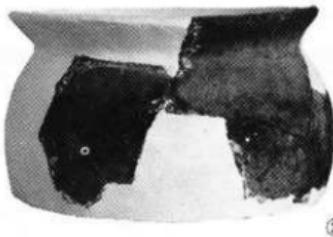
⑫

内野々第I遺跡出土弥生土器

図版3 内野々第I遺跡出土縄文土器・弥生土器



①



②



③



④



⑤



⑥



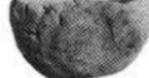
⑦



⑧



⑨



⑩



⑪

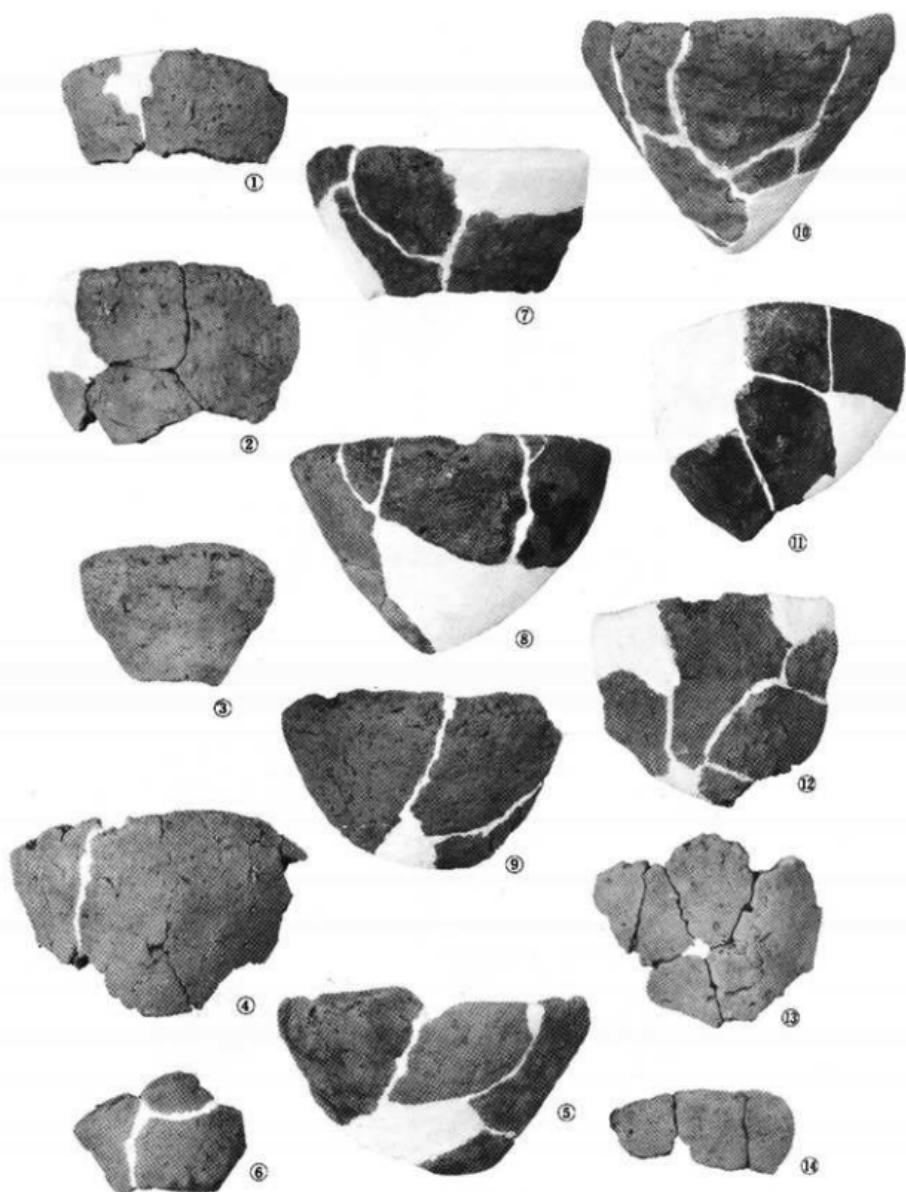


⑫

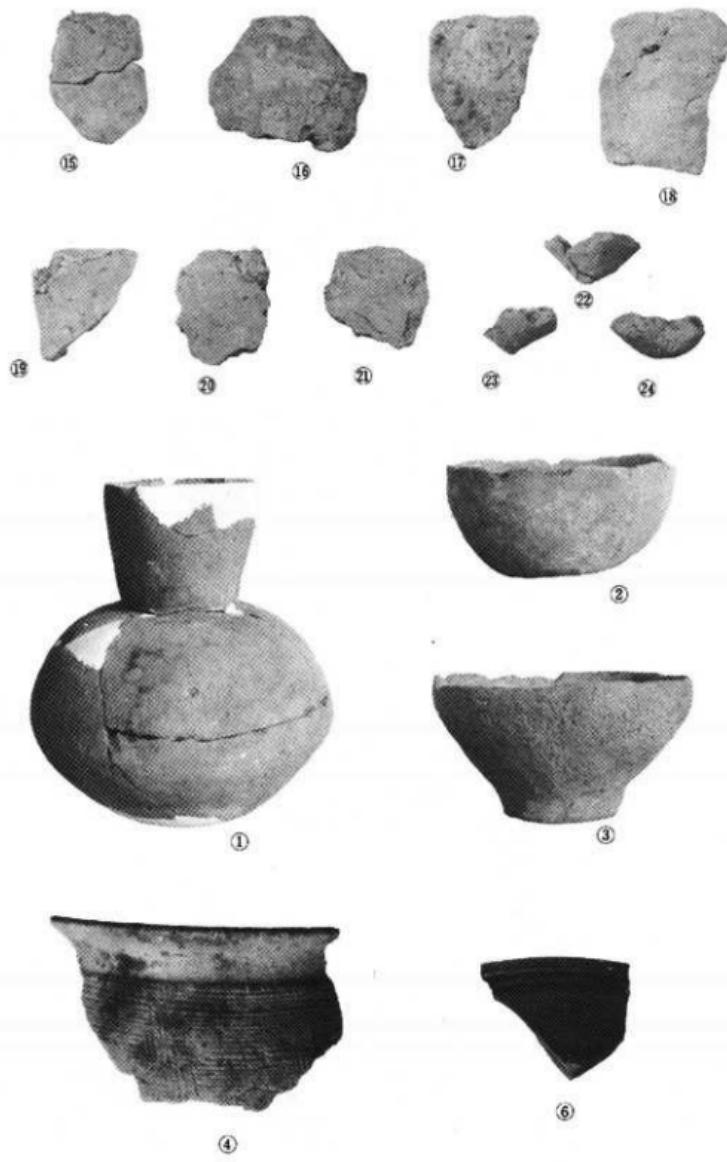


⑬

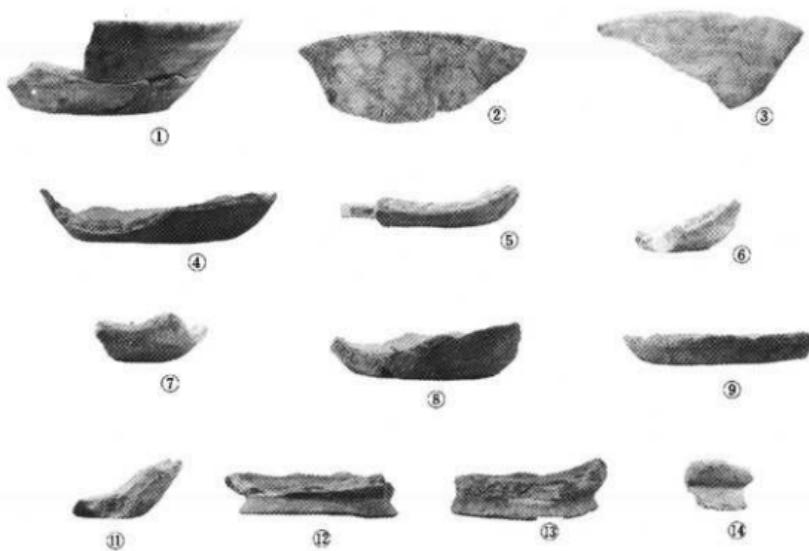
図版4 内野々第I遺跡出土弥生土器



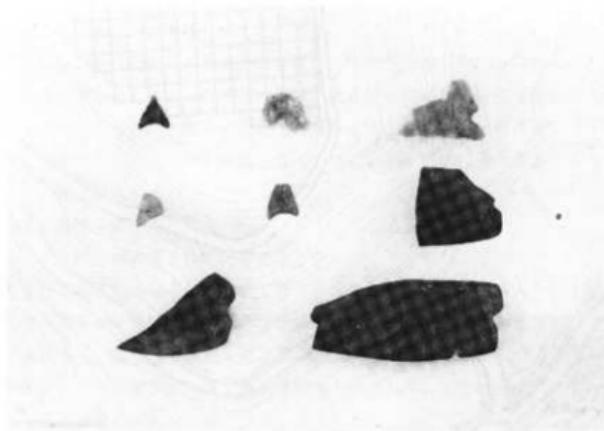
図版5 内野々第I遺跡出土布痕土器



図版 6 内野々第 I 遺跡出土布痕土器(15~24) 及びその他の土師器・須恵器



内野々第Ⅰ遺跡出土土師器塊



内野々第Ⅰ遺跡出土石器

図版7 内野々第Ⅰ遺跡出土土師器塊  
内野々第Ⅰ遺跡出土石器

## 第3章 内野々第Ⅱ遺跡の発掘調査

### 1. 遺跡の立地

内野々第Ⅱ遺跡は、宮崎市北川内町字内野々に所在している。当地は、生目台住宅団地計画区域内の東南部にあたり、現在の北川内町の集落の外れから、北西方向に入り込む谷間がありその出口に川迫池の築堤が存在している。川迫池は、池尻において分かれる谷間へと延び複雑な地形を成している。

遺跡は、それらに挟まれた南北に突き出した丘陵先端のゆるやかな南傾斜地に占地している。

標高は、約50mで谷間の水田面との比高は26mを測る。また、内野々第Ⅰ遺跡は、川迫池を挟んで南西の方位に対峙している。

この遺跡の立地する尾根には、北川内町から生目地区に通ずる山道の往還があり、往古は良く利用され、特に生目神社への参詣道路として利用されたとのことである。

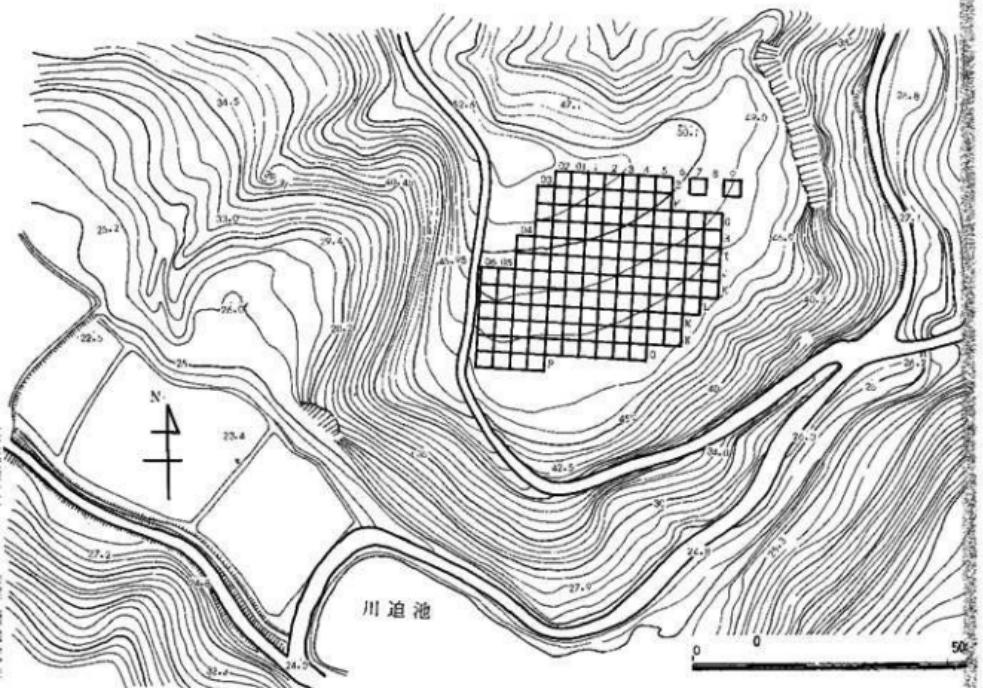


図16 図 内野々第Ⅱ遺跡地形図及びグリッド図

## 2. 調査区の設定（第16図）

発掘調査を対象とする地表面は、北方が高く標高50mを呈し、南方が標高47mと比高差3mの南傾斜地で、やや東方向にも傾斜する地形を成している。

試掘調査は、この面のやや西寄りの中央部で行っておりその際に落ち込み遺構等を確認しているため、全面発掘調査を行うことを意識したグリッドを組み、発掘調査を開始することとなった。主軸を南北方向にとった3×3mを1グリッドとする調査区を設定した。北からの縦軸をE、F、G～Pとし、北側部分は、調査の成り行きから拡張することも考えられたためA、B、Cは予備区とした。また、縦軸を調査対象区の南北に延びる最長区に設定し、これを基軸としたため、横軸については、その基軸から東西に分けて番号を振ることにし、東方向に1、2、3～9、西方向に01、02、03～06と記号を付し、調査区名は、E-1、E-2、E-01、E-02というように呼ぶことにした。調査区の設定は第1回のとおりであり、地形状から欠番を生じる個所も多い。

調査区内からの遺構はK-01、K-02、K-03区を主体とする1号住居跡、I-01、I-02を主体とする2号住居跡、F-1、F-01を主体とする3号住居跡が上なものであり、B-1～I-7区に斜行に延びる溝状遺構とF-03～M-1区に延びる溝状遺構が検出されている。

## 3. 土層

調査区域の一般的な土層は、第Ⅰ層の表土層が約20cmほどの厚さがあり、第Ⅱ層に黒褐色上層が約20cmほど入るが、この層は、ところによっては消滅しており、表土層の下部に直ぐオレンジ層の層序が見受けられる。オレンジ層は、上部が明るいオレンジ層で下部になると黄褐色を呈するオレンジ層となる。下部のオレンジ層は粘質をもってくるようになり、厚さは約1mほどである。その下層はシラス層となっている。

### (1) I-02区の層位（第17図）

I-02区は、2号住居跡の営まれている区である。

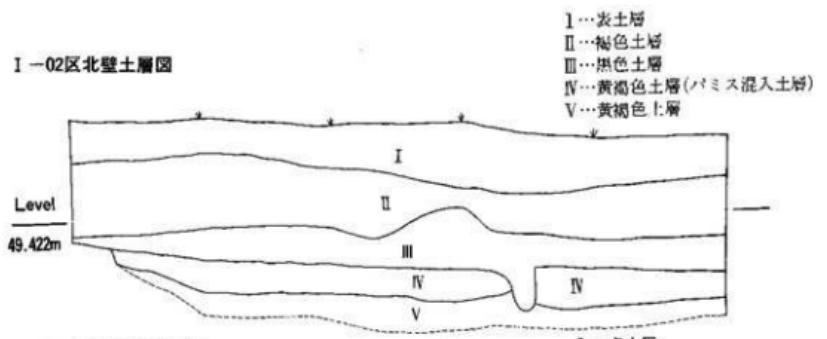
第Ⅰ層は、表土層であり約20cmを計る。第Ⅱ層は、黒褐色土層が約20cm内外入り、第Ⅲ層に黒褐色土層が約13cmほどの厚さに入る。この黒色上層は、第Ⅱ層の黒褐色土層の下部からオレンジ層にかけて掘り込まれた2号住居跡の埋土であることを観察することができる。第Ⅳ層にパミス混入の黄褐色土層が入り、この層の下部が住居跡の床面となっている。第Ⅴ層は、黄褐色を呈するオレンジ層となり、下部オレンジ層に相当する。

### (2) K-02区の層位（第18図）

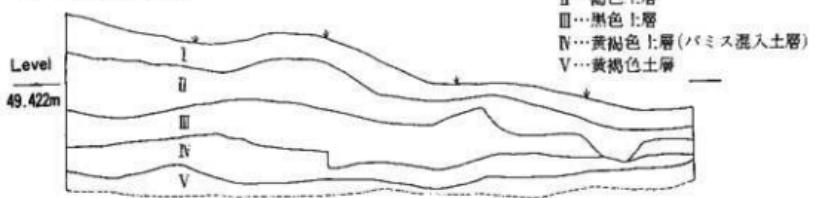
K-02区は、1号住居跡の営まれた区である。

第Ⅰ層は、表土層であり約20cmを計る。第Ⅱ層に黒褐色土層が約20cm内外入り、1部において、この層の検出されない部分が見受けられる。第Ⅲ層にパミス混入の漆黒色土層をブロック的に観察することができる。第Ⅳ層に、第Ⅲ層で観察された漆黒色土層の下部に、同じくパミス混入の黒色土層をブロック的に観察することができた。第Ⅴ層に黄褐色上層が入り、この層は1号住居跡の床面となる。第Ⅵ層は、黄褐色を呈するオレンジ層となる。

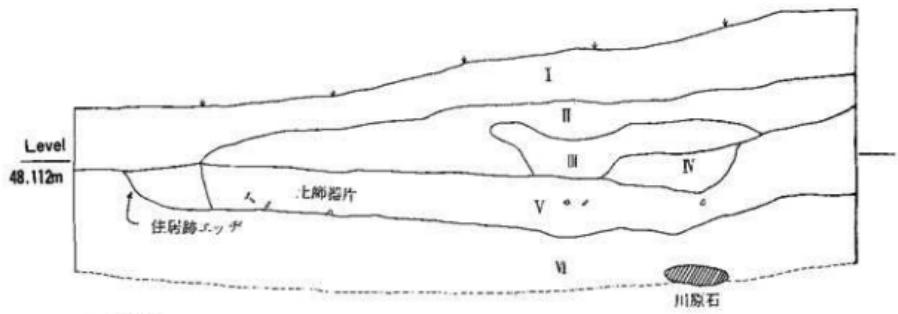
I - 02区北壁土層図



I - 02区東壁土層図



第17図 内野々第Ⅲ遺跡 I - 02区北壁土層図・I - 02区東壁土層図



- I … 表上層
- II … 黒褐色土層
- III … 黒色土層(バミス混入土層)
- IV … 黑褐色土層(バミス混入上層)
- V … 黄褐色土層
- VI … オレンジ層

第18図 内野々第Ⅲ遺跡 K - 02区、西壁土層図

#### 4. 遺物の出土状況

遺跡は、山上に営まれているが、この地は戦時中、土地所有者によって開墾され、芋等の作物が栽培されていたこともあって、表土は攪乱されている。特に表土層が薄く直下にオレンジ層が入ることもあって遺構内を除いて、遺物の出土状態が良好ではなかった。表土層の中に縄文式土器片や弥生式土器片を数点検出することができたが、包含層として層位を確認することはできない状況にあった。出土遺物の大半が破片化された状況にあった。

H-5、I-5区周辺にかなり破片を濃密に出土しているが遺構の検出はみなかった。

その他、調査区中央部において散逸した遺物の出土をみることができ、大半は土師器であり少量の須恵器片が含まれていた。

##### (1) K-02区の遺物出土状況 (第19図)

K-02区では、第IV層となるバミス混入の黄褐色土層において濃密に遺物の出土を見受けることができ、土師器の片及び高台付塊を多く検出している。その他、壺類及び須恵器が見受けられ、特に注目しなければならないのは、焼けた粘土塊の検出が見受けられ、なかには須恵器の広口壺の口縁部が溶着したものも検出されている。

+

+



第19図 内野々第Ⅲ遺跡K-02区、土器群出土状況

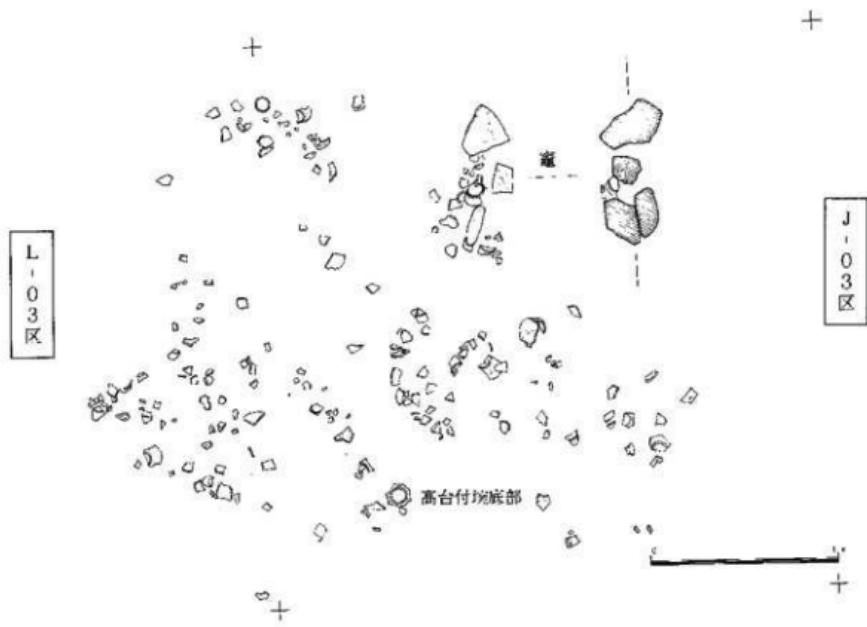
(2) K - 03区〔1号住居跡〕の遺物出土状況(第20・21図)

K - 03区は、K - 02区の西側に接する区であり、この区では、第IV層の上層と下層の2枚に分けて土器群の出土状態を観察することができたが、層序的には明確に変るものではなかった。

上層部からは、土師器の环や高台付境の出土が主体であり、須恵器の高台付境も数点検出され、下層部になると环及び高台付境の出土には変化が見受けられないが、それらに伴って土師器の甕の出土が見受けられるようになり、その他、布痕土器を数点共存している。特に、これら土器群の中に纺錐車が1点と土鍬が検出されていることは注目しなければならない。

(3) 2号住居跡遺物出土状況(第23図)

この住居跡内の出土遺物は、破片が散逸した状態で出土しているが、北側中央部において須恵器環が完形品で出土している。また、その周辺に土師器の甕のまとまりや环のまとまりが出土している。



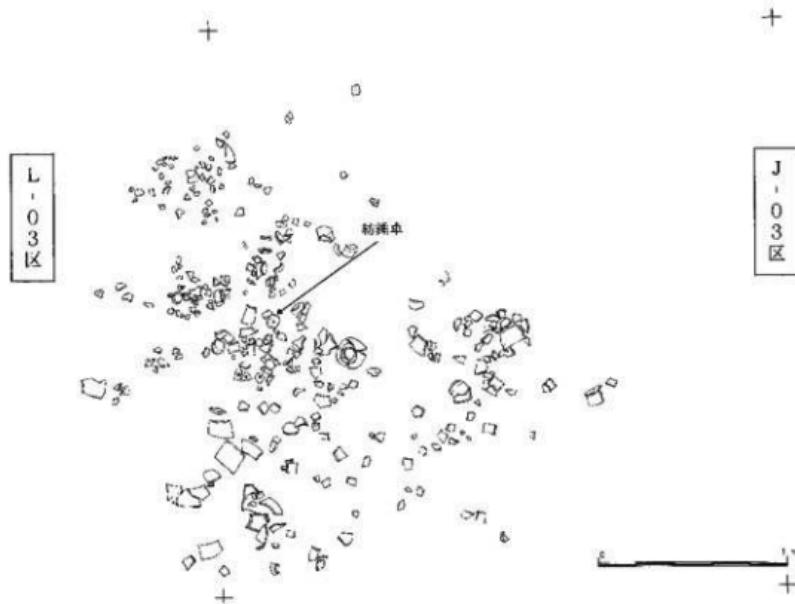
第20図 内野々第Ⅱ遺跡K-03区、上層土器群出土状況

遺物には、土師器の壺及び高台付壺が主体を占めている。

#### (4) 3号住居跡遺物出土状況

住居跡の東側に寄った中央部に焼土があり、その周辺にかなりかたまた状態での遺物の出土を見受けることができる。

遺物は、全体的には住居跡の南半分に多く出土している。この住居跡では、土師器の壺や高台付壺は少くなり須恵器の出土が多く見受けられる。須恵器では、高台付壺や、垂められた壺の完形品、それに広口壺、格子目タタキの施してある壺等が出土している。その他、土師器の甕が多く出土しており特に木の葉底を呈する甕底部が検出されている。

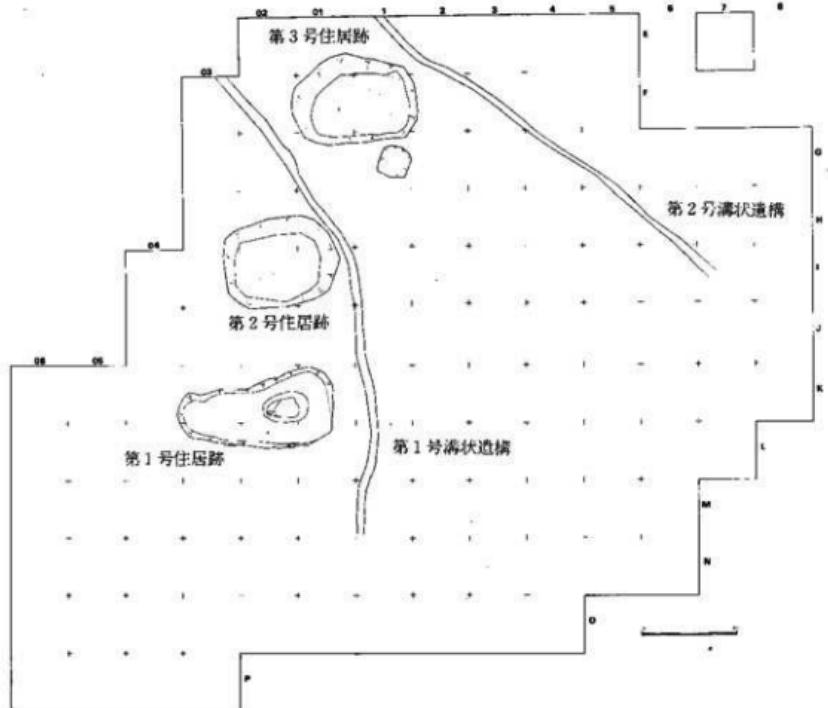


第21図 内野々第Ⅲ遺跡K-03区下層土器群出土状況

## 5. 遺構 (22図)

この遺跡では、表土層直下にオレンジ層が入ることもあって、遺構掘り込み上部の検出には非常に苦慮する向きがあったが、反面ではオレンジ層を掘り込んだ部分は明らかの遺構であるという目安もあった。

遺構内からは、3基の住居跡が検出され、特に1号住居跡では床面に約5cmほどの炭を堆積した隅丸方形形状の掘り込み遺構をともなっていた。また、床面を築き固めた状態の溝状遺構を検出している。その他、調査区内のK-06区、L-06区において浅い落ち込みによって広く炭の堆積を見受けることができたが性格については判然としないところである。



第22図 内野タ第Ⅱ遺跡遺構配置及びグリッド図

### (1) 第1号住居跡

#### 位 置

調査区域の西側中央部にあたり、グリッドでは、K-02、K-03、L-02、L-03区内に位置している。東西に細長くなるもので東側K-02区では隅丸方形状の落ち込み遺構が検出された。

#### 構 造

形状は、東西に細長く、東側はやや細く端部は丸味を帯びる。西側は、やや裾開きとなり隅丸状を成す変形した長方形状を呈する。また、K-02区にあたる遺構の中央部において、さらに隅丸方形状の落ち込みが見受けられる。この落ち込みは、1号住居跡の床面から約50cmほど下がり、床面には約5cmの厚さの炭の堆積を検出することができた。また落ち込み上部周辺に焼かれて凝固した粘土塊の散在が見受けられた。

#### 規 模

東西の主軸長は、8.1m、西辺長2.1m、東辺長4.0mを計る。また、K-02区を中心に掘り込まれている落ち込みは、上辺部が東西主軸長2.4m、南北主軸長1.6m、床面が東西長2.7m、南北長1.7mの隅丸方形状を呈する。

#### 主軸の方位

ほぼ東西方位を示す。

電 K-03区の西部中央部にあたり、住居跡の西側北辺部に位置する。

竈は、シラスの凝固した土塊を組んで構築している。西側に径35cmほどの土塊を立て、奥部に扁平な土塊を1個配し、東側に2個を積み重ねた状態の簡単な構築である。土塊は、かなり焼けており、火袋部には焼土が堆積している。中に高台付焼等が検出された。

壁 遺跡の立地している地形が南傾斜でもあることから北辺部の壁は削り取られてかなり高くなつており南辺においては、ほとんど平坦的である。東部においては、隅丸方形状を呈する落ち込み遺構へとなだらかに傾斜している。

### (2) 第2号住居跡（第23回）

位 置 調査区西側にあたり、1号住居跡と3号住居跡の間に挟まれて、グリッドでは、I-02区を中心として位置している。

構 造 住居跡の掘り込み上縁部は、やや変形した格円形状を呈し、床面は隅丸の長方形状を呈する。地形が南傾斜しているため北辺部はゆるやかに深く切り込まれ、南辺部ではゆるやかな浅い掘り込みとなっている。土層が軟弱なため住居跡の縁部は明瞭でない。また、柱穴等の検出はみなかった。

規 模 東西方向に長く、東西主軸長は掘り込み上縁部で6.13m、床面上軸長4.45mを計る。南北方向上軸長は上縁部で4.7m、床面3.55mを計る。北辺部における床面までの深さは1.1m、南辺部における床面までの深さは20cmである。

主軸方位 ほぼ東西方向を示す。

焼 土 住居跡南西隅、それから約70cm北東方向に離れた2箇所に焼土の分布を見ることができる。焼土中には、炭片の他、小片の土師器を検出したのみである。

(3) 第3号住居跡（第24図）

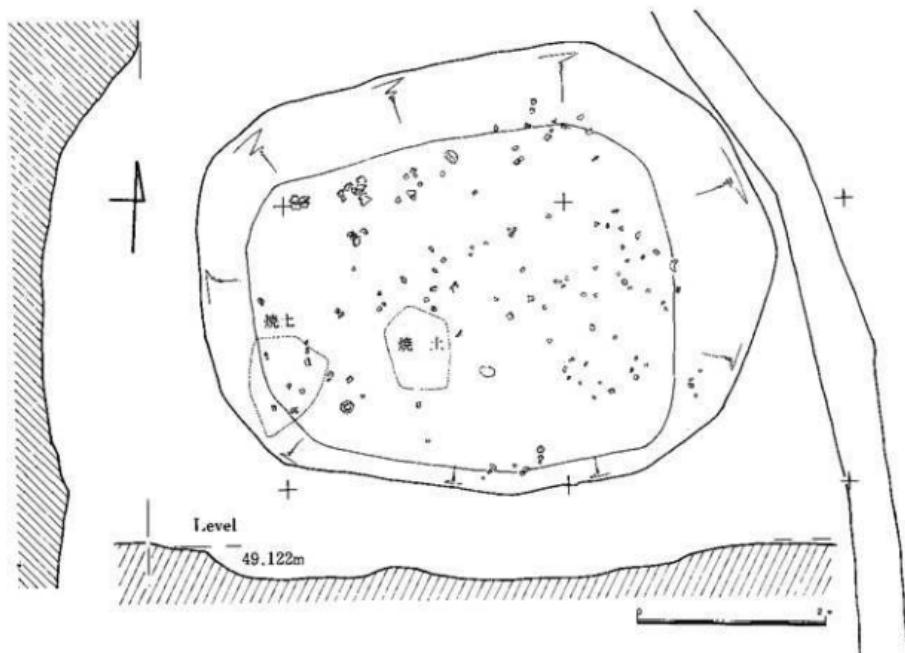
**位 置** 調査区西側にあたり、1号、2号住居跡よりやや東側に寄って、グリッドでは、F-1、F-01区を中心として位置している。

**構 造** 挖り込み上縁部はやや変形した隅丸長方形状を呈し、床面は西側に寄って細く、東側が幅開きとなる変形した隅丸長方形状を呈する。2号住居跡と同じく地形が南傾斜しているため、北辺部はゆるやかに深く切り込まれ、南辺部はゆるやかに浅く掘り込まれている。掘り込み上縁部、床面辺縁部とともに明瞭ではない。柱穴等の検出はみなかった。

**規 模** 東西方向に長く、東西方向主軸長は掘り込み上縁部で6.56m、床面5.1mを計る。南北方向主軸長は、掘り込み上縁部で4.3m、床面3.15mを計る。北辺部における床面までの深さ85cm、南辺部における床面までの深さは40cmである。

**主軸方位** ほぼ東西方向を示す。

**焼 土** 住居跡東側寄りの中央部に広い範囲の焼土を検出している。焼土中には上飾器の小片を除いて遺物は検出されなく、焼土の南半周囲に甕の破片や高台付焼、壺類の土器群の出土を見ている。



第23図 内野々第Ⅱ遺跡2号住居跡実測図

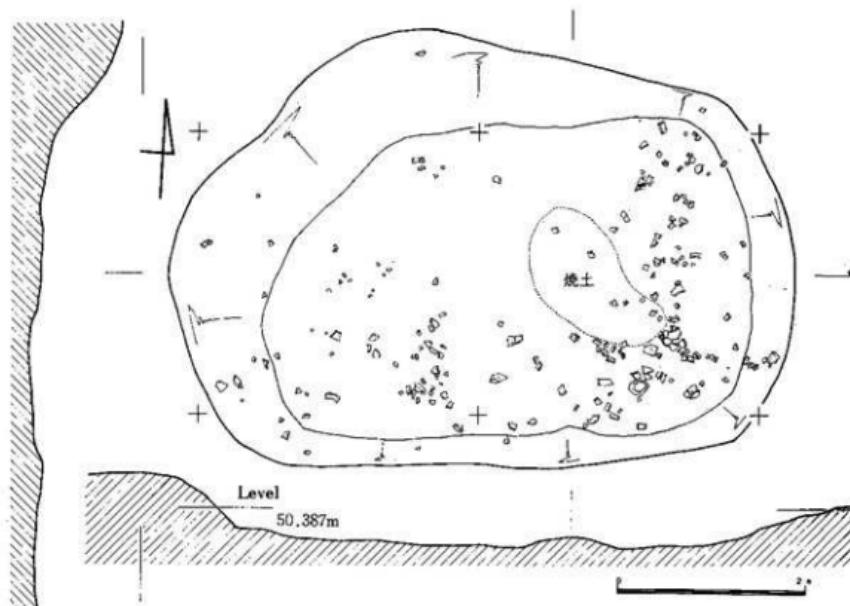
#### (4) 第1号溝状造構

F-03区北東隅から2号住居跡の東辺部に沿って湾曲をもちながらM-1区へと延びている。F-03区から北方向はさらに延びるものと思われるが、M-1区においては途切れしており、さらに延びるものかどうかについては判然としない状況にある。

溝状造構は部分的に確認することのできる第II層の黒褐色土層から掘り込まれているものであり、床面は、オレンジ層の上面となっている。層位的に表土からオレンジ層までの層が薄いこともあって、擾乱層が厚く溝状造構の側壁を検出することは困難であり部分的に5cmほどの深さの側壁を検出するにとどまっている。この溝状造構の幅は50cm内外を示しており、床面は築き固められており、粘土を貼ったような状態を呈している。

#### (5) 第2号溝状造構

E-1区の北辺中央部から3号住居跡の東辺に沿って斜行をもちながらI-7区へと延びている。E-1区から北方向は、さらに延びるものと思われるがI-7区においては不明瞭となり、I-7区南東隅からJ-8区にかけては、地形に沿った落ち込みが見受けられ、それに続くものと思われる。溝状造構の形状、状態は第1号溝状造構と同様である。



第24図 内野々第3号住居跡実測図

## 6. 遺 物

### 縄文式土器及び弥生式土器（第30図）

縄文式土器は、試掘調査時に1点、本調査において2点の計3点を検出している。いずれも表上下の擾乱層からの検出であり、当遺跡に包含層をもつてゐる可能性は薄い。他に弥生式土器の底部を1点検出している。

1は、口縁部が大きくゆるやかに外反し胴部径より大きくなるものである。口縁部はくびれ部で最も肥厚し端部は尖る。肩部から胴部にかけては薄くなっていく。口縁部内外面と肩部はヘラナテ調整であり、内面は不明である。色調は暗褐色を呈し胎土に砂粒を含む。

2は、胴部片で試掘時検出されたものである。器厚は厚く表面は最初に横方向のヘラ調整が成されたのち斜行の半竹箒による刺突文が施されている。色調は赤褐色を呈し、胎土に砂粒及び石英粒を含む。

3は、口縁部で直線的に立つものである。口縁部に斜行のヘラ状圧痕がめぐらされている。また表面にはヘラ先による不規則な横方向沈線が施されている。色調は暗褐色を呈し、胎土に砂粒及び石英粒を含む。

4は、弥生式土の壺底部であり、底部はあげ底で胴部へは長く外開きに立ちあがる。立ちあがり部に縱方向の刷毛目調整が施されている。色調は黄灰色を呈し、砂粒を多く含む。この底部は弥生中期の下城式系統の上器と思われる。

### 石 器（第4図）

**石斧** 円錐を欠いて作った簡単なものであり、片面に自然面を残し、片面に打ち欠いた大きな剥離面を残している。基部を除いた周縁に剥離調整が加えられている。石質は凝灰岩。

**小形尖頭器** 縦長の剥片を利用したもので、尖頭部両サイドはチップによる入念な剥離調整が行われている。断面は三角形状を呈する。石質はチャート。

**敲き石** 敲き石が3点検出されているが、これらについての時期設定は困難である。扁平な円錐を使用したもので周縁に敲打痕を残している。石質は、5.6が石英片岩で7は砂岩。

### 土師器及び須恵器

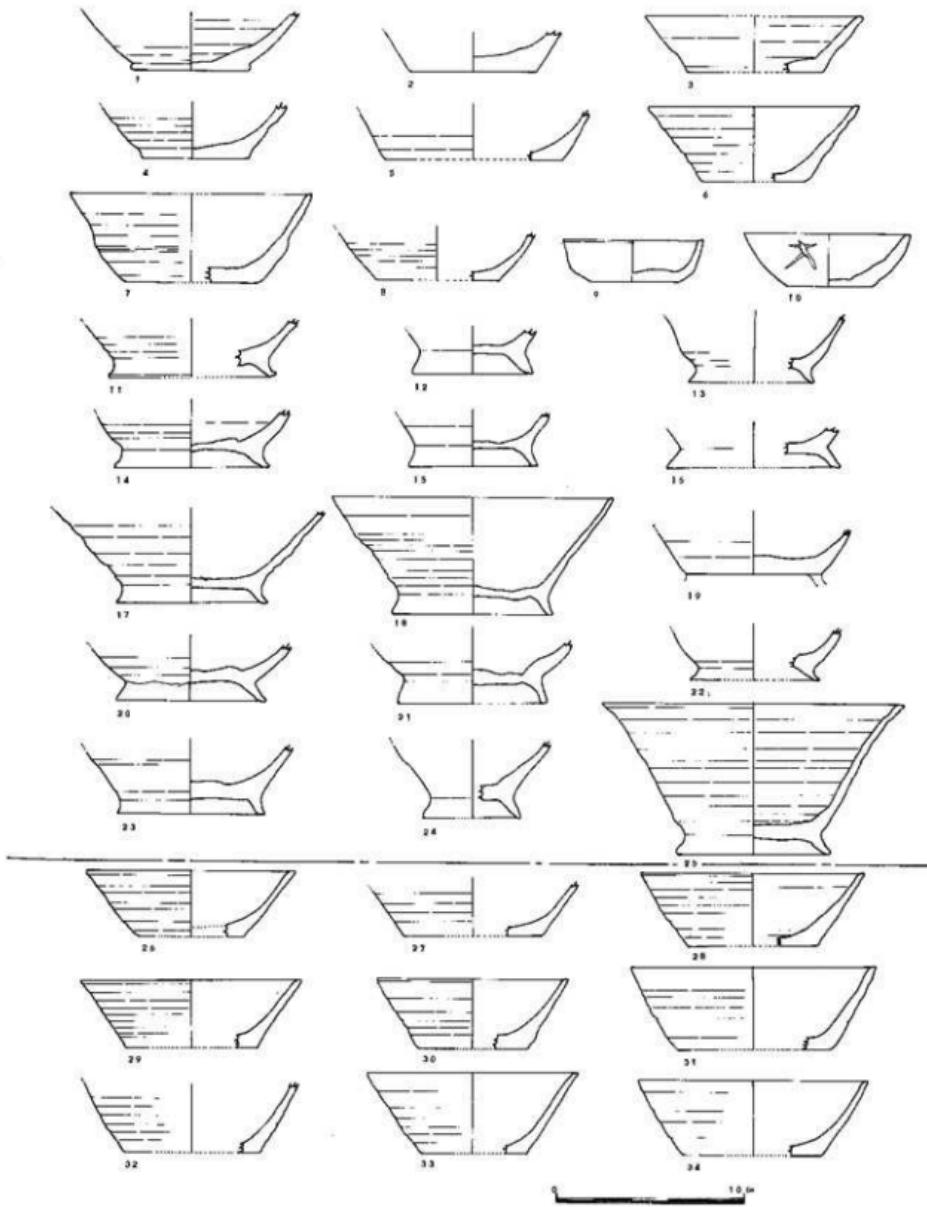
この遺跡の上体を占める上器で多量の出土を見たため、以下観察表にて報告する。

第2表 内野々第Ⅱ跡出土遺物観察一覧表

凡例  
・遺物番号は通し番号とし、実測図番号、写真番号と共通である。  
・法規欄の( )内は、鑑定結果を示す。

遺物 図版	幕 級	出土地点	法量(cm)	形 無 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
第25回 1	15 (土師器)	1分生垣跡 上 層	高 高 6.3	・口縁部を欠く ・底部から体部は開きながら直線的に立ちあがる ・底部はへたり切り離し	ロクロ成形 外面 1.体部 内面 回転ナダ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 性砂粒を含む
* 2 回版14 1	同 上	同 上	底 高(6.6	・口縁部を欠く、底部のみである ・底部から体部へは開きながら直線的に立ちあがる ・底部はへたり切り離し	ロクロ成形 外面 回転ヘラナダ 内面 回転ナダ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 性砂粒を含む
* 3	同 上	同 上	幕 高 2.9	・底端部は直線的に立ちあがる ・底部は厚く、体部、口縁部にかけて薄くなり、直線的に開きながら立ちあがる ・底部はへたり切り離し	ロクロ成形 内外面とも指標による波状を残している	焼成 良好 色調 淡赤褐色 性砂粒を含む
* 4 回版14 2	同 上	高 上	底 高 5.7	・口縁部を欠く ・底部は厚く、体部へは立ちあがりは厚くなる ・口縁部にかけては、かなり薄くなる ・底部は、へたり切り離し	ロクロ成形 外面 指標による波状を残している 内面 回転ナダ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 性砂粒を含む
* 5	同 上	同 上	-	・口縁部を欠く ・底部は厚く、体部への立ちあがりは厚くなる ・口縁部にかけては、かなり薄くなる ・底部は、へたり切り離し	ロクロ成形 外型 回転ナダ 内面 不明	焼成 良好 色調 淡赤褐色 性砂粒を含む
* 6	高 上	同 上	幕 高 4.0	・体部から口縁部は、直線的に開きながら立ちあがり、厚さもしたいくらいになり、口縁部はやや外反する ・底部は厚く、体型への立ちあがりが弱くなる ・底部はへたり切り離し	ロクロ成形 外型 指標による波状をよどませてある 内面 回転ナダ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 性砂粒を含む
* 7	同 上	高 上	幕 高 4.6	・非常によく、底部の穴である ・底部は厚く、体部への立ちあがりが弱が弱が薄くなっている ・口縁部は、やや内済氣味に立ちあがり、底部に丸い ・底部はへたり切り離し	ロクロ成形 外型 体部においては舌膜による波状が残り、底部はヨコナダ 内面 回転ナダ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 性砂粒を含む
* 8 (須恵器)	16 同 上	同 上	-	・口縫部を欠いている ・薄手の穴である ・底部の立ちあがりは、やや内済氣味である ・底部はへたり切り離し	ロクロ成形 外型 底部近くに指標によく波状がある 内面 回転ナダ	焼成 不良 色調 淡青灰褐色 性砂粒を含む
* 9 回版14 3	同 上	同 上	11 高 7.4 器 高 2.1	・非常に小形の穴である ・口縫部は短く直線的に立ちあがり、底部は丸い ・底部はへたり切り離し	ロクロ成形 内外面ともに回転ナダ	焼成 良好 色調 淡青灰褐色 性砂粒を含む
* 10 回版14 4	同 上	同 上	口 高 8.8 器 高 2.7	・底部は小さく、口縫部は直線的に開き底部は丸い ・口縫部下部に「大」字様の刻印が見受けられる	手づくね成形 内外面ともヨコナダ	焼成 不良 色調 淡青灰褐色 性砂粒を含む
* 11 (土師器)	高台付 1分生垣跡 上 層	高 台 高 5.6	・口縫部を欠く ・体部に内済氣味に立ちあがる ・底部は貼り付けによる、つまみ出しで、底部は尖り、やや外反する	外型 指標による波状を残す 内面 回転ナダ 高台 つまみによるロコナダ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 性砂粒を含む	

排便回数	器種	山上地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
第25回 12	高台付塊 (土師器)	I号住居跡 上層	高台高 1.0	・塊底部に高台を貼り付けたもので、貼り付け部が観察出来る ・高台は直線的に外開きとなり、端部はやや内傾気味である	高台 つまみによるヨコナダ	焼成 不良 色調 微砂粒を 含む
* 13	同上	同上	高台高 0.7	・口縁部を欠く ・体部は非常に厚いものである ・高台も厚い貼り付けで、直線的に外開きとなる。端部は丸く内側で接地する	外側 体部にヘラ削りの後 ヨコナダ 高台 つまみによるヨコナダ	焼成 不良 色調 胎土 微砂粒を 含む
* 14 回数14 5	同上	同上	高台高 0.9	・口縁部を欠く ・体部は直線的に外開きとなり、器厚は薄い ・高台は大きく外開きとなり、端部は丸く内側で接地する。	外側 体部に指痕による波状模様を残す 内面 回転ヨコナダ 高台 つまみによるヨコナダ	焼成 不良 色調 胎土 微砂粒を 含む
* 15	同上	同上	高台高 0.9	・口縁部を欠く ・体部は直線的に外開きとなり、器厚は薄い ・高台は立ち気味に外開きをする。端部は尖り内側に接地する	外側 体部、一部に指痕による波状模様を残す 内面 回転ヨコナダ 高台 つまみによるヨコナダ	焼成 不良 色調 胎土 微砂粒を 含む
* 16	高台付塊 (土師器)	I号住居跡 (上層)	高台高 0.7	・体部から口縁部を欠く ・高台は貼り付けである。やや外開きとなり端部は内側に平らとなり接地する	外側 端部は回転ヨコナダ 内面 同軸ヨコナダ 高台 つまみによるヨコナダ	焼成 良好 色調 胎土 微砂粒を含む
* 17	同上	同上	口径 14.9 器高 6.2 高台径 8.5 高台高 0.8	・口縁部を欠く ・体部はやや内窓気味に外開きに立ちあがる、器厚は薄く口縁部は無い ・高台は動かし付けでせき気味となる ・端部は内側に平らとなり接地する	体部はロクロ成形 外側 指痕による波状模様を残す 内面 内軸ヨコナダ 高台 つまみによるヨコナダ	焼成 良好 色調 胎土 微砂粒を含む
* 18 回数14 6	同上	同上	口径 14.9 器高 6.2 高台径 8.5 高台高 0.9	・体部から口縁部にかけては、直線的に外開きとなり立ちあがる。器厚は薄く口縁部は無い ・底部はハサクリ離し ・高台は貼り付けでせき気味となる ・端部は内側に平らとなり接地する	体部はロクロ成形 外側 指痕による波状模様を残す 内面 回転ヨコナダ 高台 つまみによるヨコナダ	焼成 良好 色調 胎土 微砂粒を 多く含む
* 19	同上	同上		・口縁部を欠く。また貼り付けの高台部も欠けている ・体部は直線的に外開きに立ちあがる ・底部はへり切り離し	体部はロクロ成形 外側 木口状による回転ヨコナダ 内面 回転ヨコナダ	焼成 不良 色調 胎土 微砂粒を 含む
* 20	同上	同上	高台高 0.9	・口縁部を欠く ・体部はやや内窓気味に立ちあがる ・器厚は薄い ・高台はへり切り離し ・高台は貼り付けで外開きとなり、端部は内側に平らとなり接地する	体部はロクロ成形 外側 指痕による波状模様を残す 内面 回転ヨコナダ 高台 つまみによるヨコナダ	焼成 良好 色調 胎土 微砂粒を 含む
* 21	同上	同上	高台径 7.9 高台高 1.0	・口縁部を欠く ・体部はやや内窓気味に外開きに立ちあがる ・器厚は薄い ・高台は貼り付けで直線的に立ち、貼り付け部を以て覗きすることができる ・端部は平らとなり接地する	体部はロクロ成形 外側 指痕による波状模様を残す 内面 回転ヨコナダ 高台 つまみによるヨコナダ	焼成 良好 色調 胎土 微砂粒を 含む
* 22	同上	同上	高台高 0.7	・口縁部を欠く ・体部は直線的に外開きに立ちあがる ・器厚はやや厚い ・高台は貼り付けで非常にはく離かい ・端部はやや外反りとなり尖がる	体部はロクロ成形 外側 木口状による回転ヨコナダ 内面 紗毛目状のヨコナダ 高台 つまみによるヨコナダ	焼成 良好 色調 胎土 微砂粒を 含む
* 23 回数14 7	同上	同上	高台径 7.9 高台高 0.7	・口縁部を欠く ・体部は直線的に外開きに立ちあがる ・器厚は薄い ・高台は貼り付けでせき気味となる ・端部は平坦となり接地する	体部はロクロ成形 外側 指痕による波状模様を残す 内面 回転ヨコナダ 高台 つまみによるヨコナダ	焼成 良好 色調 胎土 微砂粒を 含む

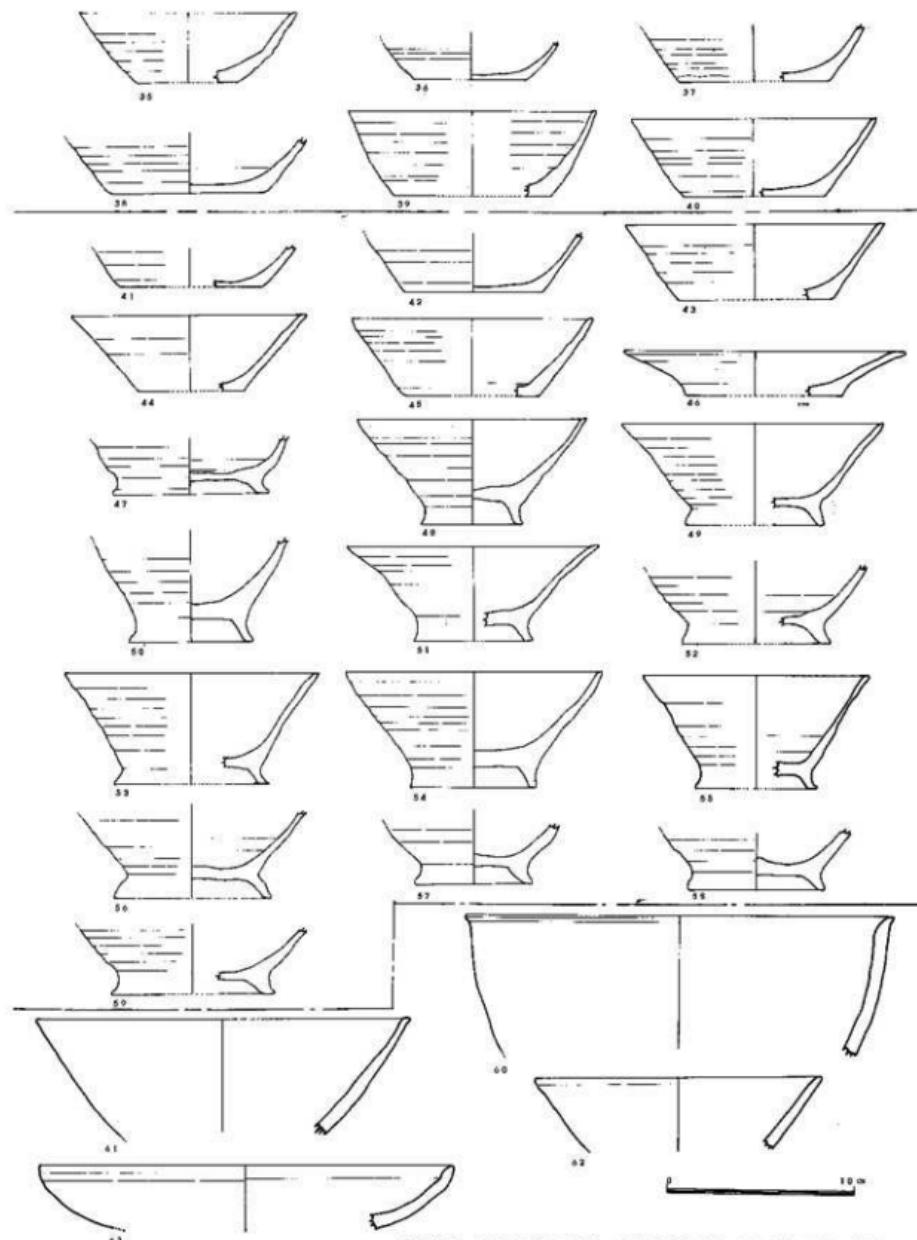


第25図 内野々第Ⅱ遺跡1号住居跡出土壺及び高台付塊実測図

標本 番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
第25回 24	高台付焼 (土師器)	I号住居跡 (上層)	高台高 0.9	・口縁部を欠く ・底部が薄くなり、体部は直線的に外開きに立ちあがる ・唇部は厚い ・高台は貼り付けでやや立ち丸味に聞く ・端部は頃く、内側に接地する	体部はロクロ成形 外面 ヨコナデ 内面 引イロコナゲ 高台 つまみによるヨコナデ	焼成 良好 色調 淡黄褐色 胎土 硅酸鉄を含む
* 25 回版14 8	高台付焼 (須恵器)	同 上	II 径 16.0 高 8.0 高台径 8.1 高台高 0.8	・体部は直線的に外開きに立ちあがり、口縁部はやや外反弧形となり、端部は平らとなる ・胎厚は薄い ・底部はハラ切り離し ・高台は貼り付けで短く、外開きとなり、内側に平らで接地する	作外法 ロクロ成形 外面 1周辺部はヨコナデである 内面 口縁部はヨコナデで 側面は指頭による波状を残す 高台 つまみによるヨコナデ 、端部ヨコナデ	焼成 良好 色調 淡黄褐色 胎土 少量の砂粒を含む
* 26 26	I号住居跡 (上層)	器 高 3.5		・体部から1周辺部は、やや内溝気味に外開きに立ちあがる ・口縁部でやや肥厚し端部は丸い ・底部はハラ切り離し	ロクロ成形 外面 口縁部はヨコナデ。 、側面は指頭による波状を残す 内面 同軸ヨコナデ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 硅酸鉄を含む
* 27	同 上	同 上		・口縁部を欠く ・体部は直線的に外開きに立ちあがる ・底部はやや薄くなり、ハラ切り離し	ロクロ成形 外面 体部に指頭による波状を残す 内面 同軸ヨコナデ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 硅酸鉄を含む
* 28 回版14 9	同 上	同 上	器 高 3.8	・体部から口縁部は直線的に外開きに立ちあがる ・口縁部は薄くなり、端部は丸味をもつ ・底部はハラ切り離し	ロクロ成形 外面 口縁部はヨコナデ。 、側面は指頭による波状を残す 内面 同軸ヨコナデ	焼成 良好 色調 淡黄褐色 胎土 硅酸鉄を含む
* 29	同 上	同 上	器 高 3.6	・体部から口縁部は直線的に外開きに立ちあがる ・1周辺部、端部は丸味をもつ ・底部はハラ切り離し	ロクロ成形 外面 1周辺部はヨコナデ。 、側面は指頭による波状を残す 内面 同軸ヨコナデ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 硅酸鉄を含む
* 30	同 上	同 上	器 高 3.7	・体部から1周辺部は、やや内溝気味に外開きに立ちあがる ・1周辺部はやや外反し尖がる ・底部はハラ切り離し	ロクロ成形 外面 1周辺部はヨコナデ。 、側面は指頭による波状を残す 内面 同軸ヨコナデ	焼成 良好 色調 淡黄褐色 胎土 硅酸鉄を含む
* 31 回版14 10	同 上	同 上	II 径 13.0 底 径 8.0 器 高 4.4	・体部から口縁部は直線的に外開きに立ちあがる ・1周辺部、端部は丸くなる ・底部が大きく、ハラ切り離し	ロクロ成形 外面 口縁部はヨコナデ。 、側面は指頭による波状を残す 内面 ヨコナデ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 硅酸鉄を含む
* 32	同 上	同 上		・1周辺部を欠く ・体部はやや内溝気味に外開きに立ちあがり、口縁部近くは非常に厚くなる ・底部はハラ切り離し	ロクロ成形 外面 体部に指頭による波状を残す 内面 同軸ヨコナデ。底部一部に細毛日が見受けられる	焼成 良好 色調 淡黄褐色 胎土 硅酸鉄を含む
* 33	同 上	同 上	器 高 4.3	・体部から1周辺部は直線的に外開きに立ちあがる ・口縁部、端部はやや外反弧形に尖がる ・底部はハラ切り離し	ロクロ成形 外面 1周辺部はヨコナデ。 、端部はハラナデ 、側面は指頭による波状を残す 内面 ヨコナデ調模	焼成 良好 色調 淡黄褐色 胎土 硅酸鉄を含む
* 34	同 上	同 上	器 高 4.0	・体部から口縁部はやや内溝気味に外開きに立ちあがる ・口縁部は薄くなり、端部は尖がる ・底部はハラ切り離し	ロクロ成形 外面 口縁部はヨコナデ。 、側面は指頭による波状を残す 内面 同軸ヨコナデ	焼成 やや不良 色調 淡黄褐色 胎土 砂粒を多く含む
第26回 35	同 上	同 上	器 高 3.7 底 径 5.3	・口縁部を欠く ・体部からは直線的に外開きに立ちあがる ・底部はやや肥厚し、ハラ切り離し	ロクロ成形 外面 体部に指頭による波状を残す 内面 同軸ヨコナデ	焼成 良好 色調 淡黄褐色 胎土 多量の砂粒を含む

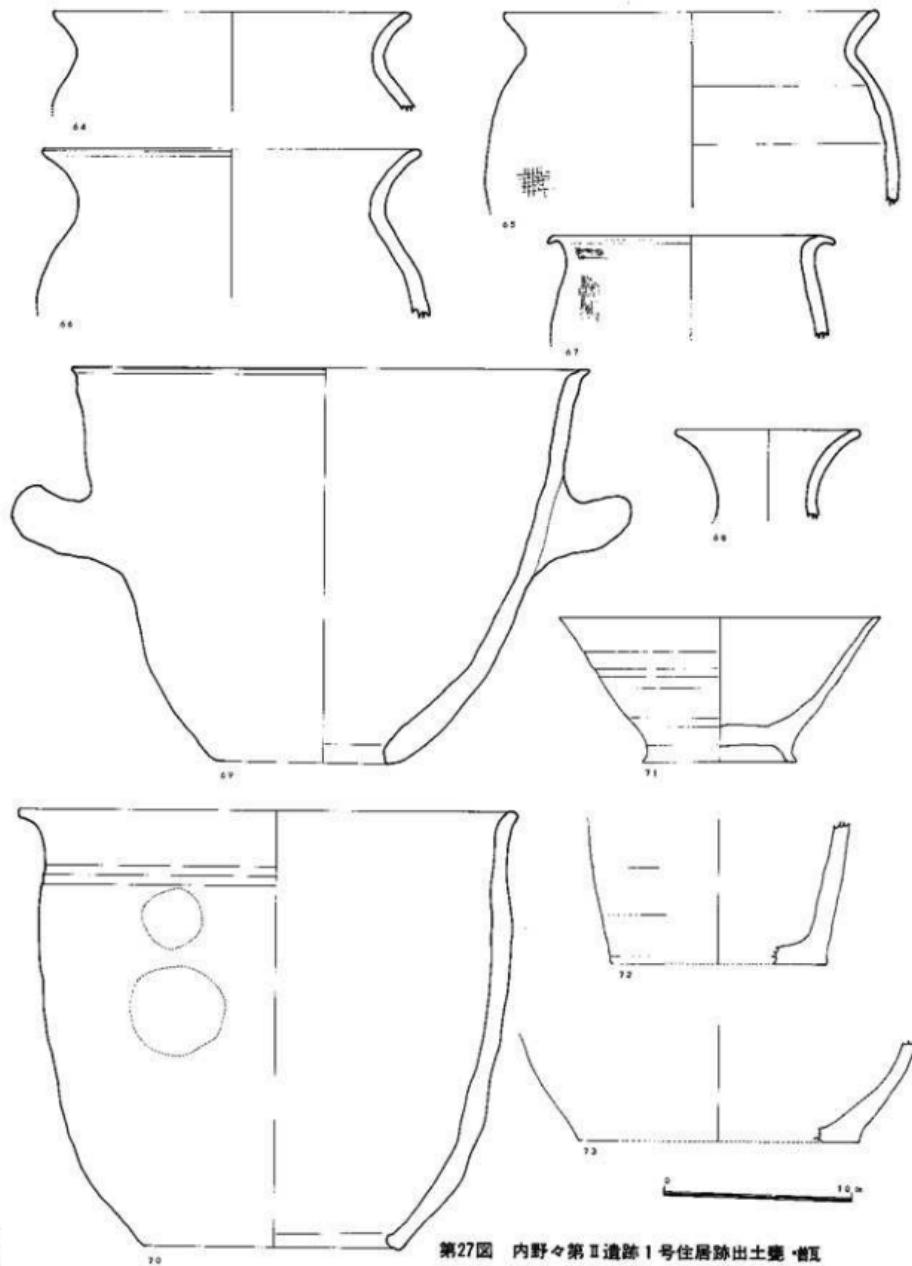
種別	番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高圓	36	(須恵器)	1号住居跡 (下層)		・口縁部を欠く ・体部はやや内湾気味に外開きに立ちあがる ・体部、底部ともに薄手である ・底部はヘタ切り離し	ロクロ成形 外面 体部に指頭による波状を残す。 内面 回転ヨコナデ	焼成 不良 色薄 淡青灰色 胎土 微砂粒を含む
*	37	环 (土師器)	同上	底径 8.0	・口縁部を欠く ・体部は直線的に外開きに立ちあがり、側くなっていく ・底部は中央部で薄くなり、ヘタ切り離し	ロクロ成形 外面 体部に指頭による波状を残す。 内面 回転ヨコナデ	焼成 良好 色薄 淡青褐色 胎土 少量の微砂粒を含む
*	38	同上	同上	底径 8.2	・口縁部を欠く ・体部は直線的に外開きに立ちあがる ・底部はヘタ切り離し	ロクロ成形 外面 体部に指頭による波状を残す。 内面 回転ヨコナデ	焼成 良好 色薄 淡青褐色 胎土 微砂粒を含む
*	39	环 (須恵器)	同上	器高 4.5	・体部から口縁部はやや内湾気味に外開きに立ちあがる ・口縁部は薄くなり、底部は丸い ・底径が大きくヘタ切り離し	ロクロ成形 外面 口縁部ヨコナデ、 体部に指頭による波状を残す 内面 回転ヨコナデ	焼成 良好 色薄 淡青灰色 胎土 少量の微砂粒を含む
*	40	环 (土師器)	同上		・口縁部を欠く ・体部はやや肥厚気味に外開きに立ちあがる ・底部はヘタ切り離し	ロクロ成形 外面 体部に指頭による波状を残す。 内面 回転ヨコナデ	焼成 不良 色薄 淡青褐色 胎土 微砂粒を含む
*	41	同上	同上		・口縁部を欠く ・体部はやや外開きに立ちあがる ・底部はヘタ切り離し	ロクロ成形 外面 体部に指頭による波状を残す。 内面 回転ヨコナデ	焼成 不良 色薄 淡青褐色 胎土 微砂粒を含む
*	42	同上	同上	底径 7.3	・口縁部を欠く ・体部は直線的に外開きに立ちあがり、窪くなる ・底部はヘタ切り離し	ロクロ成形 外面 体部に指頭による波状を残す。 内面 同上ヨコナデ 底部にはヘタ切り離しの溝巻状が強く観察できる	焼成 良好 色薄 淡青褐色 胎土 微砂粒を含む
*	43	同上	同上	器高 4.0	・体部から口縁部は、直線的に外開きに立ちあがる ・口縁部はやや肥厚し、底部は丸い ・底部はヘタ切り離し	ロクロ成形 外面 口縁部ヨコナデ、 体部に指頭による波状を残す 内面 回転ヨコナデ	焼成 良好 色薄 淡青褐色 胎土 微砂粒を含む
*	44	同上	同上	器高 4.0	・底部径が小さく、体部から口縁部にかけては直線的に外開きに立ちあがる ・口縁部はやや薄くなり、底部は外反気味となり尖がる ・底部はヘタ切り離し	ロクロ成形 外面 口縁部ヨコナデ、 体部に指頭による波状を残す 内面 回転ヨコナデ	焼成 良好 色薄 淡青褐色 胎土 微砂粒を含む
*	45	同上	同上	口径 12.8 器高 4.0 底径 7.1	・底部径が大きく、体部から口縁部にかけては直線的に外開きに立ちあがる ・口縁部は得くなり、底部は丸い ・底部は、ヘタ切り離し	ロクロ成形 外面 口縁部ヨコナデ、 体部に指頭による波状を残す 内面 回転ヨコナデ	焼成 良好 色薄 淡青褐色 胎土 微砂粒を含む
*	46	豆 (土師器)	同上		・体部から口縁部は直線的に大きく外開きとなる ・底部は高台を思わせるように垂直に立つ ・口縁部はやや肥厚気味で、底部は外反する ・底部はヘタ切り離し	ロクロ成形 外面 口縁部ヨコナデ、 体部は指頭による波状を残す 内面 回転ヨコナデ	焼成 不良 色薄 淡青褐色 胎土 微砂粒を含む
*	47	高台付壺 (土師器)	1号住居跡 (下層)	高台径( 8.3) 高台高 0.7	・口縁部を欠く ・体部はやや内湾気味に外開きに立ちあがる ・唇厚は薄い ・底部は貼り付けで薄く、やや外開きとなる ・底部は外反し、内面に接着する	ロクロ成形 外面 ヨコナデ 内面 回転ヨコナデ 高台 つまみによるヨコナデ	焼成 良好 色薄 淡青褐色 胎土 微砂粒を含む

排卵番号	群種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
第26X 48	高台付埋 (上脚器)	I 今住層跡 (下部)	口 径(12.2) 器 高 5.6 高台径( 5.4) 高台高 1.2	・体部から口縫部は、やや内渦気味に外開きに立ちあがる ・I 縫部は薄くなり、端部は尖る ・高台は貼り付けで、やや直線的に立つ ・端部は、やや外反し、内側に接地する	ロクロ成形 外面 二脚部ヨコナデ 体部は肩頭による波状を残す 内面 口縫ヨコナデ つまみによるヨコナデ 高台	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁鐵鉱を 多く含む
* 49	同 上	同 上	II 径(14.0) 器 高 5.3 高台径( 7.3) 高台高 0.9	・体部から口縫部は、直線的に外開きに立ちあがる ・I 縫部、II 縫部ともに器底は深く一定してい ・端部は薄くなり、端部は尖る ・高台は貼り付けで、やや外開きとなり、端部は平らで接地する	ロクロ成形 外面 二脚部ヨコナデ 体部は波状による波状を残す 内面 口縫ヨコナデ つまみによるヨコナデ 高台	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁鐵鉱を 多く含む
* 50	同 上	同 上	高台径( 6.6) 高台高 1.2	・口縫部を欠く ・体部は、やや内渦氣味に立ちあがり、單手となる ・端部は、へり切り難い ・高台は貼り付けで小さく外開きとなる ・端部は、薄くなり尖る	ロクロ成形 外面 体部は内凹による波状を残す 内面 口縫ヨコナデ つまみによるヨコナデ 高台	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁鐵鉱を 含む
* 51	同 上	同 上	口 径(13.5) 器 高 5.0 高台径( 5.3) 高台高 0.8	・体部から口縫部は、大きく外開きとなる ・I 縫部器底部は、やや外反気味に尖る ・器底は薄い ・高台は貼り付けで、やや立ち気味に聞く ・端部は平らで接地する	ロクロ成形 外面 口縫部ヨコナデ 体部は指頭による波状を残す 内面 口縫ヨコナデ つまみによるヨコナデ 高台	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁鐵鉱を 含む
* 52	同 上	同 上	高台径( 7.8) 高台高 1.0	・体部から口縫部は、やや内渦氣味に立ちあがる ・器底は薄い ・高台は貼り付けでやや外開きとなる ・端部は平らで接地する	ロクロ成形 外面 体部は指頭による波状を残す 内面 口縫ヨコナデ つまみによるヨコナデ 高台	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁鐵鉱を 含む
* 53	同 上	同 上	器 高 5.8 高台高 0.8	・体部から口縫部は直線的に外開きとなる ・口縫部はやや厚く、端部は尖る ・高台は貼り付けで、やや外開きとなる ・端部は、外反気味で内側に接地する	ロクロ成形 外面 口縫部ヨコナデ 体部は指頭による波状を残す 内面 口縫ヨコナデ つまみによるヨコナデ 高台	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁鐵鉱を 含む
* 54	同 上	同 上	II 径(13.1) 器 高 6.1 高台径 6.7 高台高 1.0	・体部は直線的な外開きとなり、口縫部は、やや内渦氣味 ・口縫部は薄く丸い ・高台は貼り付けで垂直に立ち、しっかりといる ・端部は平らとなる	ロクロ成形 外面 口縫部ヨコナデ 体部は指頭による波状を残す 内面 口縫ヨコナデ つまみによるヨコナデ 高台	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁鐵鉱を 含む
* 55 回版14 11	同 上	同 上	口 径(12.0) 器 高 5.9 高台径 6.5 高台高 0.7	・体部は直線的に外開きとなり、I I 縫部は、やや外反気味に立ちあがる ・器底は、体部はやや深く、口縫部では非常に薄くなり、端部はやや尖るくなる ・高台は貼り付けで、やや外開きとなる、端部は平らとなり接地する	ロクロ成形 外面 口縫部ヨコナデ 体部は指頭による波状を残す 内面 口縫ヨコナデ つまみによるヨコナデ 高台	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁鐵鉱を 含む
* 56	同 上	同 上	高台径 8.4 高台高 0.9	・I I 縫部を欠く ・体部は薄く直線的に外開きとなる ・高台は貼り付けで長く外開きとなる ・端部は外反気味で内側に接地する	ロクロ成形 外面 体部に指頭による波状を残す 内面 口縫ヨコナデ つまみによるヨコナデ 高台	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁鐵鉱を 含む
* 57	同 上	同 上	高台径( 7.2) 高台高 0.7	・I I 縫部を欠く ・体部は、やや内渦氣味に立ちあがる ・底部は、へり切り難い ・高台は貼り付けで斜か外開きとなる ・端部は外反気味で内側に接地する	ロクロ成形 外面 体部上部に指頭による波状を残す 内面 口縫ヨコナデ つまみによるヨコナデ 高台	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁鐵鉱を 含む
* 58	同 上	同 上	高台径 7.3 高台高 0.7	・I I 縫部を欠く ・体部は直線的に外開きとなる ・底部は、へり切り難い ・高台は貼り付けで立ち渦味である。端部は平らとなり接地する	ロクロ成形 外面 体部に指頭による波状を残す 内面 口縫ヨコナデ つまみによるヨコナデ 高台	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁鐵鉱を 含む
* 59	同 上	同 上	高台径( 8.7) 高台高 0.7	・口縫部を欠く ・体部は直線的に外開きとなる ・高台は貼り付けで、やや外開きに立つ ・端部は、やや外反気味に平らとなり接地する	ロクロ成形 外面 体部に指頭による波状を残す 内面 口縫ヨコナデ つまみによるヨコナデ 高台	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁鐵鉱を 含む



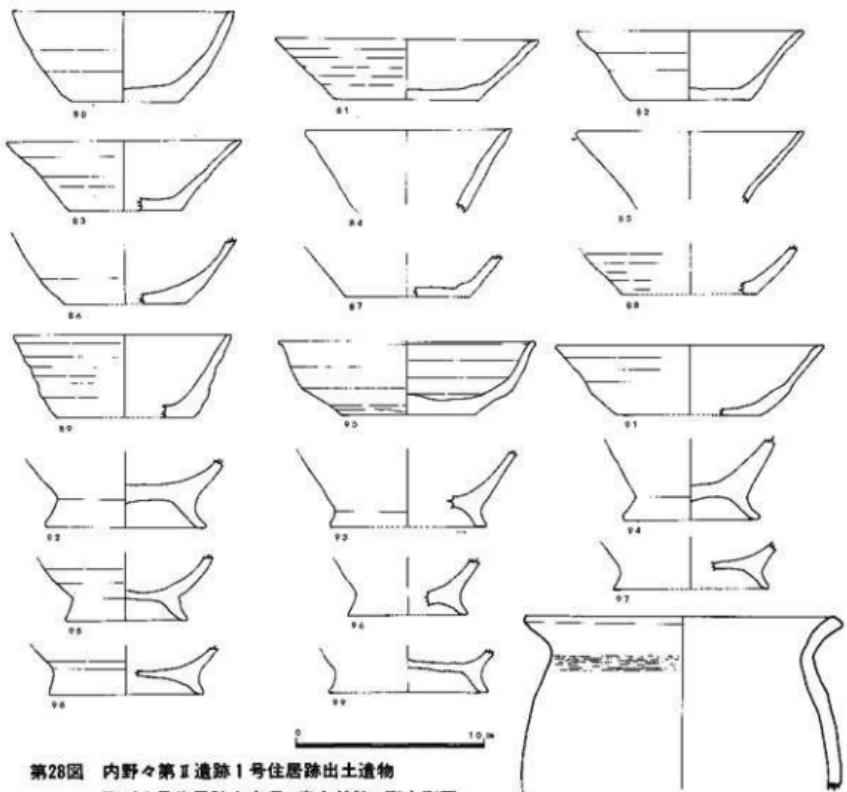
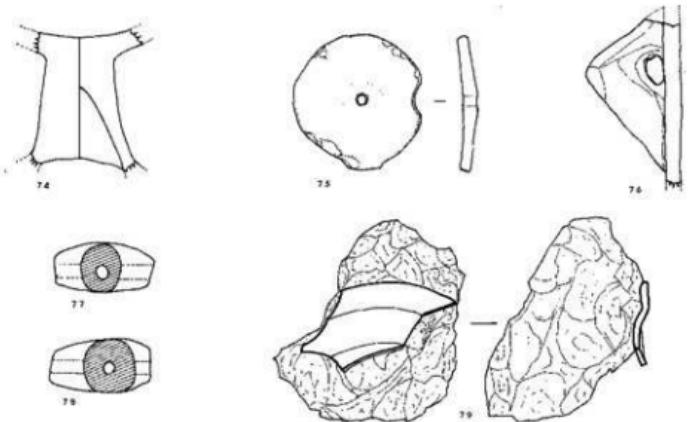
第26図 内野々第Ⅱ遺跡1号住居跡出土壺・高台付壺・鉢実測図

捕獲回数	番号	基種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手注の特徴	備考
第26回 60		漢 鮒	1号住居跡	II 径(22.7)	・口縁部のみの破片である ・頭部から口縁部にかけては内湾形状に立ちあがる ・口縁部は短く外反し端部は丸い	ワブミ成形 外面 口縁部ヨコナデ、頭部にかけてはヘナナデ 内面 ヨコナデ	焼成 良好 色調 淡黄色 胎土 粘土を少 量含む
*	61	漢 鮒	同 上	II 径(19.8)	・端部を欠く ・体部にやや内湾形状が見受けられるが、II 縫部は直線的となり大きく外開きとなる ・口縫部端部がわずかに外反し丸い	ヨクロ成形 外面 全面細かい網毛目 内面 口縫部網毛目 等部 ヘラ擦き	焼成 良好 色調 淡黄色 胎土 粘土を含む
*	62	小形漢鮒	同 上	口 径(15.2)	・体盤から口縫部直線的に外開きに立ちあがる ・口縫部端部は、わずかに外反し丸い ・非常に薄手である ・内巻口筋である	ヨクロ成形 外面 口縫部網毛部ヘラナデ 体部網毛目 内面 口縫部ヨコナデ 体部ハラ擦き	焼成 良好 色調 外青白地 内青白地 被砂粒を含む
*	63	漢 鮒	同 上	II 径(22.0)	・浅縫を見るより直と見るべきものである ・体盤から口縫部にかけては、ゆるやかに内湾がかなり大きくなり、II 縫部からは縫をして成る内傾的の立ちあがる ・口縫部端部にわずかの反りを見受けける ・底部は平たい丸底を呈する	手ブケミ成形 外面 口縫部ヨコナデ 体部ヘラナデ 内面 口縫部ヨコナデ 体部ハラ擦き	焼成 良好 色調 淡褐色 胎土 粘土を含む
第27回 64 回版14 12		甕	同 上	口 径(16.6)	・頭部を欠く ・口縫部は外反し、頭部で拂り頭部はしだいで に盛らみをもつ ・口縫部外反部が肥厚し、端部は丸い	ワブミ成形 外面 口縫部ヨコナデ 頭部ヘラナデ 内面 口縫部網毛目 等部 ヘラナデ	焼成 良好 色調 淡青色 胎土 小砂粒を多 く含む
*	65		同 上	口 径(19.9)	・頭部を欠く ・縫部は短く外反し、頭部から底部へは わずかに縫をなす ・口縫部は肥厚し、端部は丸い ・縫部はゆるやかに盛らみをもつ ・スヌの付着を見受けける	ワブミ成形 外面 口縫部ヨコナデ 頭部から網毛部は粘 土色口縫部下に網毛目 タタキが見受けられ る 内面 網毛目	焼成 良好 色調 淡赤褐色 砂粒を多 く含む相 互い
*	66		同 上	口 径(20.1)	・頭部下を欠く ・口縫部は短く外反し、頭部はゆるやかに盛 らみ盛部をざらめつ ・口縫部端部は薄くなり丸い	ワブミ成形 外面 口縫部ヨコナデ 網毛部ヘラナデ 内面 口縫部網毛目 網部カキ目が見受け られる	焼成 良好 色調 淡赤褐色 砂粒を多 く含む相 互い
*	67		同 上	口 径(15.0)	・頭部下を欠く ・II 縫部は短く外反した後、つまみ反しが 見受けられる ・頭部はわずかに盛らみをもつ	ワブミ成形 外面 口縫部ヨコナデ 頭部ヘラナデ 内面 口縫部ヨコナデ 頭部網毛目	焼成 良好 色調 淡黄白色 砂粒を多 く含む
*	68	広口瓶	同 上	II 径 9.8 縫部径 5.2	・II 縫部のみである ・口縫部は網状底に用ぐ ・頭部は強く捲る ・口縫部端部は丸い	ワブミ成形 外面 口縫部ヨコナデ 頭部網毛目 内面 網毛目	焼成 良好 色調 淡黄色 砂粒を含む
*	69		同 上	口 径 27.5 透御径 8.5 器 高 20.9	・II 縫部端部がわずかに外反し丸い ・II 縫部から頭部は、わずかに盛らみをもつて ですばまる ・頭部下部において縫をもう透御部にいたる ・貼り付けの把手を左右にもつ	ワブミ成形 外面 口縫部ヨコナデ 頭部方向のヘラナ デ 内面 透型ヘラナデ II 縫部ヨコナデ 透御構造のヘラナデ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 砂粒を多 く含む
*	70		同 上	II 径 26.5 透御径 12.7 器 高 22.2	・口縫部が短くわざかに外反し端部は丸い ・頭部から透御部はわずかに盛らみをもつ円窓 状を成す ・口縫部下に2本の浅い洗縫をもつ ・貼り付けの把手を左右に	ワブミ成形 外面 II 縫部ヨコナデ 頭部横方向のヘラナ デ 内面 口縫部ヨコナデ 体部ヨコナデ	焼成 良好 色調 淡褐色 砂粒を多 く含む
*	71	高台付 縛(須恵器)	同 上	口 径 16.9 器 高 7.7 器 高 8.2 高台高 0.8	・体部から二段部は直線的に外開きとなる ・II 縫部は薄くなり縫部は反り突起に尖がる ・高台は貼り付けで窓から外開きとなる ・縫部は、平たい丸底を呈する ・縫部は、ヘラ切り腹に	ヨクロ成形 外面 口縫部ヨコナデ 体部上部のみに窓部 の波状を残す 透御下部はヘラナデ 透御ヨコナデ つまみによくヨコナデ	焼成 良好 色調 淡黄色 砂粒を含む



第27図 内野々第Ⅱ遺跡1号住居跡出土甕・瓶  
・広口甕・高台付塊・鉢実測図

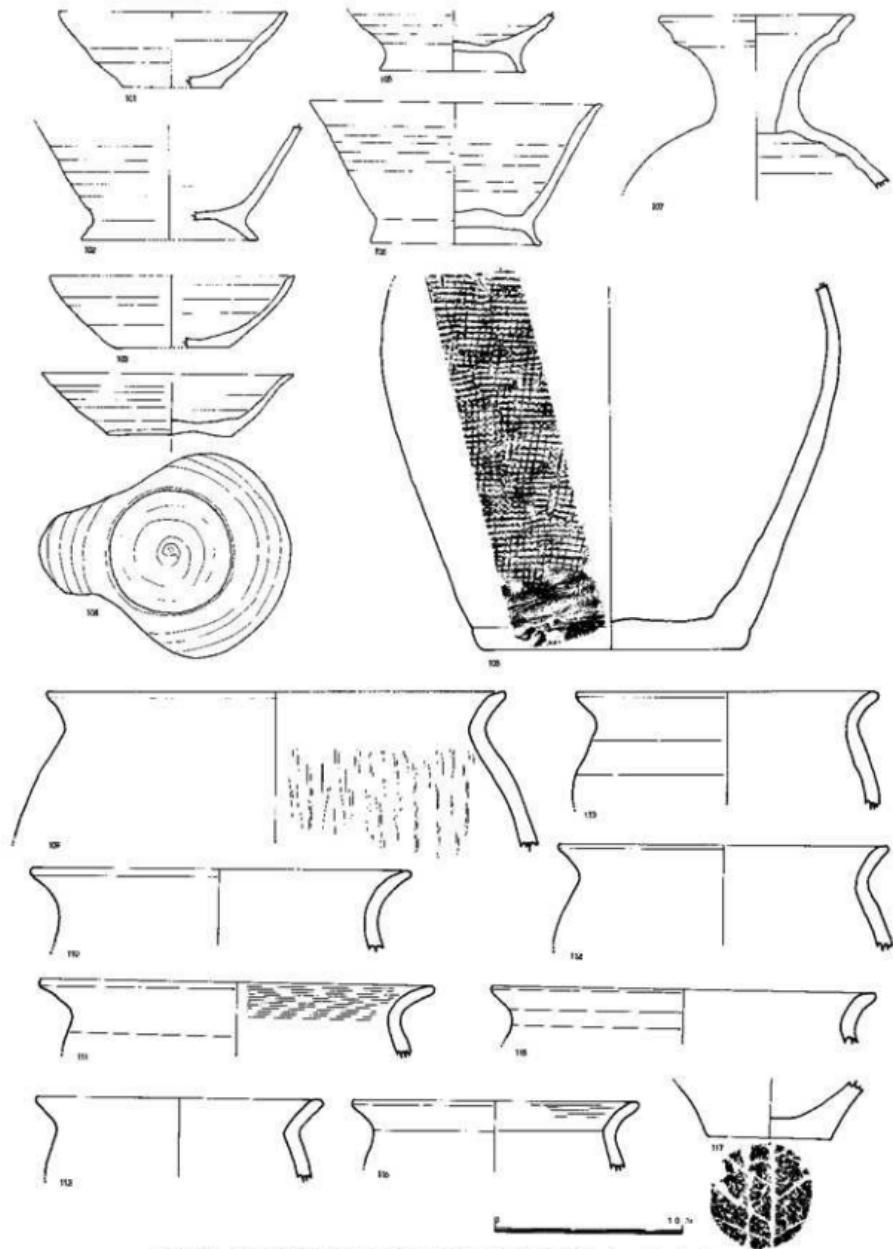
種別 回数	器種	出土地点	法式(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
第27回 72	甕 (須恵器)	1号住居跡	底 径(11.5)	・広口壺の胴部と思われる ・肩部はあまり盛らず直線的に立ちあがる ・底部は平底となる	ワツミ成形 外面 ヘリヨコナデ 内面 木口状による刷毛目	焼成 良好 色調 淡青灰色 粘土 磁砂粒を含む
* 73 回数14 18	甕 (須恵器)	同 上 (試掘時)	底 径(14.8)	・變形土器の脚底部である ・底部から脚部は、内青灰味に立ちあがる ・底部は平底となる	ワツミ成形 外面 條子目タツキ 内面 ヘラナダ	焼成 良好 色調 青灰色 粘土 磁砂粒を含む
第28回 74	高 环 (土器器)	1号住居跡	基部直径 ( 7.2 )	・高环脚部の破片である ・基部が残り脚部は直線的に開き幅は大きくなっている ・脚内部は三角錐状の中空となる	手ブクミ成形 外周 ヘラ削り 内面 ヘラナダ	焼成 不良 色調 淡赤褐色 粘土 磁砂粒を多く含む
* 75 回数15 22	結 連 串 (土器器)	同 上	縦 7.0 穿孔径 0.6	・土器器片を再利用したものである ・縁部は、打ちいたのち磨製している ・穿孔は片方のみからあけられている	表面 ヘラナダ 裏面 ナダ	焼成 良好 色調 淡青白色 粘土 磁砂粒を含む
* 76 * 23	把手 (土器器)	同 上		この把手は、No.70の底の把手になるものである ・断面二角形火を留するので器体との接する部に円孔が見受けられる ・把手部は、上下ともU字形を呈する	貼付け後に穿孔	焼成 良好 色調 淡褐色 粘土 磁砂粒を多く含む
* 77 * 20	土 壶 (土器器)	同 上	長 径 5.3 短 径 2.6 円孔径 0.7	・中腰らみとなり内腹部は折くなる ・断面は円形状を呈する ・円孔は、製作時に棒状を掉し込んでおり、成形後引き抜いたものと思われる	表面 ヘラ削り	焼成 良好 色調 淡青白色 粘土 磁砂粒を多く含む
* 78 * 21	土 壺 (土器器)	同 上	長 径 5.3 短 径 2.3 円孔径 0.7	・中腰らみとなり内腹部は折くなる ・断面は円形状を呈する ・円孔は、製作時に棒状を掉し込んでおり、成形後引き抜いたものと思われる	表面 ヘラ削り	焼成 良好 色調 淡青褐色 粘土 磁砂粒を多量に含む
* 79 回数14 19	須恵器 溶着壺	同 上	土壤長径 10.5 短 径 6.8	・広口壺の口縁部が粘土塊に埋合している ・使土壤は未焼成の状態であるが、溶着している須恵器は、自然釉のかかった施成の良いものである		
第29回 80 回数16 24	环 (土器器)	1号住居跡 2号住居跡	口 径 11.8 器 高 4.3 底 径 5.8	・体部から口縁部は、やや内青灰味に外観され立あがる ・口縁部端部は丸い ・底部から底部にかけては、やや厚くなる ・底部は、ヘラ切り越し	ロクロ成形 外周 口縁部ヨコナダ 体部は木口状による刷毛目 内面 回転ヨコナダ	焼成 良好 色調 淡青褐色 粘土 磁砂粒を少々含む
* 81	同 上	同 上	口 径(14.0) 器 高 3.2 底 径 7.7	・体部から口縁部は大きく厚く ・口縁部でやや肥厚し、端部は丸い ・底部は薄くヘラ切り越し	ロクロ成形 外周 口縁部ヨコナダ 体部は指頭による波状を残す 内面 回転ヨコナダ	焼成 良好 色調 淡青褐色 粘土 磁砂粒を含む
* 82	同 上	同 上	口 径(12.0) 器 高( 3.7 ) 底 径( 6.4 )	・体部から口縁部は大きく外観となる ・口縁部はやや肥厚し、端部は丸い ・底部はヘラ切り越し	ロクロ成形 外周 口縁部ヨコナダ 体部は指頭による波状を残す 内面 回転ヨコナダ	焼成 良好 色調 淡青褐色 粘土 磁砂粒を含む
* 83	同 上	同 上	口 径(12.5) 器 高( 4.7 ) 底 径( 6.0 )	・体部から口縁部は大きく外観となる ・口縁部はやや肥厚し、端部は丸い ・底部はヘラ切り越し	ロクロ成形 外周 口縁部ヨコナダ 体部は指頭による波状を残す 内面 回転ヨコナダ	焼成 良好 色調 淡青褐色 粘土 磁砂粒を含む



第28図 内野々第Ⅱ遺跡1号住居跡出土物  
及び2号住居跡出土壺・高台付塊・變形測図

100

種別 回版	器種	出土地点	法長(cm)	形 動 の 特 徴	手 法 の 特 殊	備 考
第28回 84	口(土師器)	今井住居跡	口 径(10.8)	・窓部を欠く ・体部から口縁部は、直線的に外開きに立ちあがる ・窓部が手となり、窓径は小さくなるものと思われる ・内型の环である	ロクロ成形 外側 口縁部ヨコナギ 体部刷毛口 内面 ハラ磨き	焼成 良好 色調 外面 淡黄褐色 内面 黑褐色を含む 胎土 粘土質を含む
* 85	同 上	同 上	口 径(12.0)	・窓部を欠く ・体部は直線的に外開きとなり、口縁部でやや内溝気味となる ・窓部は非常に薄い ・窓径は小さくなるものと思われる	ロクロ成形 外側 口縁部ヨコナギ 体部刷毛口 内面 同前ヨコナギ	焼成 良好 色調 淡黄褐色 胎土 粘土質を含む
* 86	窓 上	同 上	底 径( 6.4)	・口縁部を欠く ・体部はやや内溝気味に外開きとなる ・窓部は口縁部にかけて薄くなる ・窓部はヘラ切り端	ロクロ成形 外側 体部刷毛口 内面 窓部ヨコナギ	焼成 良好 色調 淡褐色 胎土 粘土質を含む
* 87	窓 上	同 上	底 径( 6.6)	・口縁部を欠く ・体部は直線的に外開きとなる ・窓部は薄い ・窓部はヘラ切り端	ロクロ成形 外側 体部下ヘナナゲ 内面 回松ヨコナギ	焼成 良好 色調 淡黄褐色 胎土 粘土質を含む
* 88	同 上	同 上	底 径( 6.6)	・口縁部を欠く ・体部はやや内溝気味に外開きとなる ・窓部は薄い ・窓部はヘラ切り端	ロクロ成形 外側 陶板による液状を模す 内面 回松ヨコナギ	焼成 良好 色調 淡黄褐色 胎土 粘土質を含む
* 89	口(土 (直垂器))	同 上	口 径(11.5) 器 高 4.4 底 径( 7.2)	・体部から口縁部は、直線的に外開きとなる ・口縁部は薄く環型は尖がる ・体部は器底を凌し、窓部は薄くヘラ切り端	ロクロ成形 外側 口縁部ヨコナギ 体部に深い指痕による液状を模す 内面 回松ヨコナギ	焼成 良好 色調 淡青褐色 胎土 粘土質を含む
* 90 回版16 25	同 上	同 上	口 径 13.6 器 高 3.9 底 径 7.1	・体部で縁をもって内溝し、口縁部は外開きに立ちあがる ・口縁部はやや外反する ・窓部が変形している ・窓部ヘラ切り端	ロクロ成形 外側 口縁部ヨコナギ 体部に窓部による液状を模す 内面 同前ヨコナギ	焼成 良好 色調 淡青褐色 胎土 粘土質を含む
* 91	同 上	同 上	口 径(14.3) 器 高 3.7 底 径( 7.6)	・体部は外開きとなり、口縁部へは縁をもって外開きに立ちあがる ・体部は厚く、口縁部は薄くなる、窓部は丸い ・窓部はヘラ切り端	ロクロ成形 外側 口縁部ヨコナギ 体部に指痕による液状を模す 内面 回松ヨコナギ	焼成 良好 色調 淡青褐色 胎土 粘土質を含む
* 92 回版16 26	高台付窓 (土師器)	同 上	高台径 8.5 高台高 1.2	・口縁部を欠く ・体部はやや内溝気味に外開きとなる ・窓部はやや薄い ・高台は貼り付けで丸く、やや外開きに立つ ・窓部は丸く、内側に接地する	体部はロクロ成形 外側 指痕による液状を模す 内面 同前ヨコナギ つまみによるヨコナギ 窓部はヘナナゲ	焼成 良好 色調 淡青褐色 胎土 粘土質を多く含む
* 93	同 上	同 上	高台径( 8.2) 高台高( 1.0)	・口縁部を欠く ・体部はやや内溝気味に外開きとなる ・窓部はやや薄い ・高台は貼り付けでやや外開きに立つ ・窓部は平らで内側に接地する	体部はロクロ成形 外側 指痕による液状を模す 内面 同前ヨコナギ つまみによるヨコナギ 窓部はヘナナゲ	焼成 良好 色調 淡青褐色 胎土 粘土質を多く含む
* 94	同 上	同 上	高台径( 7.2) 高台高 1.0	・口縁部を欠く ・体部は直線的に外開きに立ちあがり器底が厚い ・高台は貼り付けで細くて長く、外溝気味に立つ ・窓部は丸く内側に接地する	体部ロクロ成形 外側 ハナナゲ 内面 回松ヨコナギ 高台 つまみによるヨコナギ 窓部はヘナナゲ	焼成 良好 色調 淡青褐色 胎土 粘土質を多く含む
* 95	窓 上	同 上	高台径 6.5 高台高 1.1	・口縁部を欠く ・体部は内溝気味に立ちあがり、器底は厚い ・高台は貼り付けで細く立つ ・窓部は尖がる	体部はロクロ成形 外側 陶板によるやや深めの液状を模す 内面 同前ヨコナギ 高台 つまみによるヨコナギ	焼成 良好 色調 淡青褐色 胎土 粘土質を多く含む

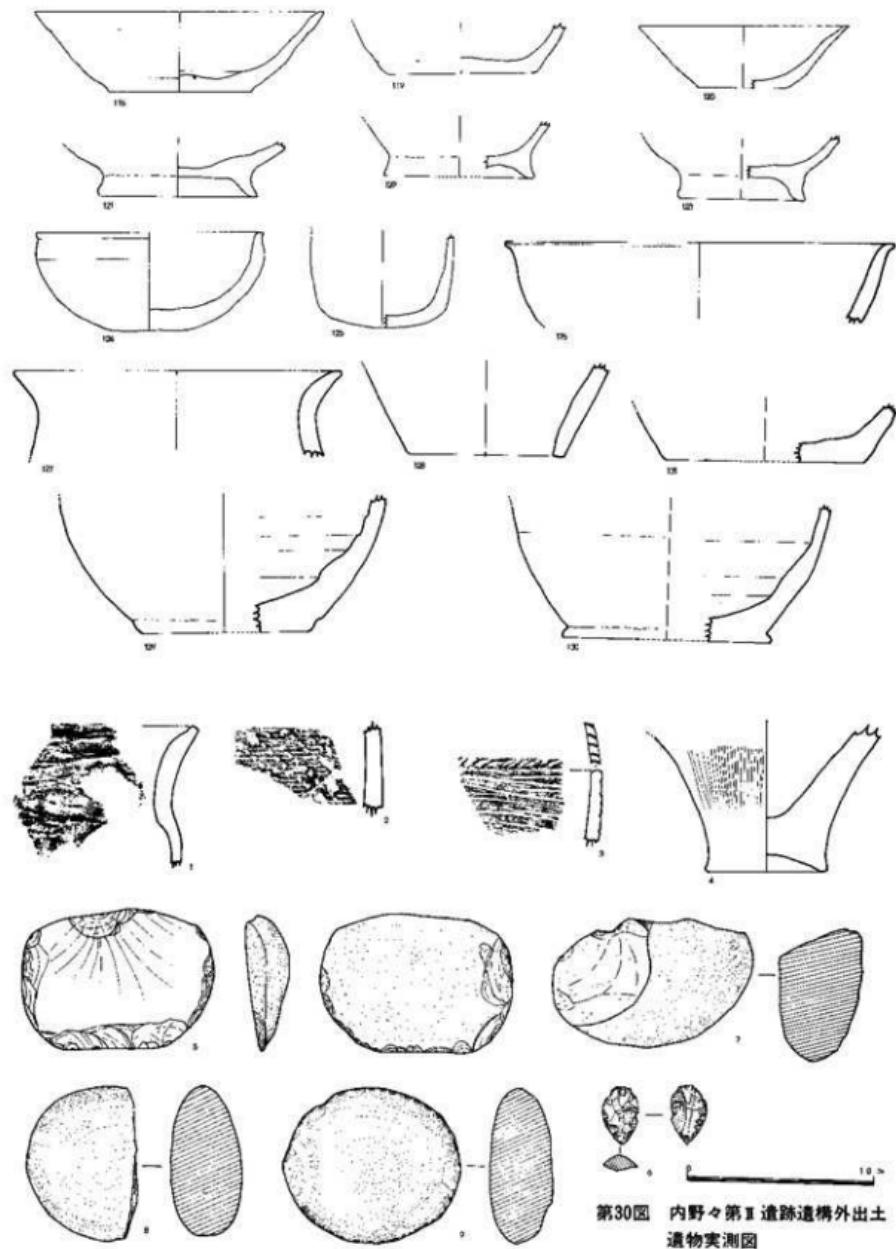


第29図 内野々第Ⅱ遺跡3号住居跡出土環・高台付壺・広口壺・甕実測図

標識番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考	
第28回 96	高台付塊 (上解基)	2号住跡	高台径(6.4) 高台高 0.5	・口縁部を欠く ・体部は直線的に外開きとなる ・高台は貼り付けで近くから外開きとなる ・端部は丸く内側に接地する	体部ロクロ成形 外面 ヨコナデ 内面 回転ヨコナデ 高台 つまみによるヨコナデ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁沙粒を含む	
*	97	同上	同上	高台径(8.3) 高台高 1.0	・口縁部を欠く ・体部はやや内溝気味に外開きとなるものと思われる ・高台は貼り付けで近くから外開きとなる ・端部は反り、内側に接地する	体部 ロクロ成形 外面 ヨコナデ 内面 回転ヨコナデ 高台 つまみによるヨコナデ 施作はヘラナデ	焼成 良好 色調 淡黄褐色 胎土 磁沙粒を含む
*	98	同上	同上	高台径(8.2) 高台高 0.9	・口縁部を欠く ・体部はやや内溝気味に外開きとなる ・高台は貼り付けで近くから外開きとなる ・端部は丸く内側に接地する	体部 ロクロ成形 外面 ヨコナデ 内面 回転ヨコナデ 高台 みまみによるヨコナデ	焼成 良好 色調 淡黄褐色 胎土 磁沙粒を含む
*	99	同上	同上	高台径 8.5 高台高 1.1	・口縁部を欠く ・体部は外開きに立ちあがる ・高台は貼り付けでやや立ち気味となる ・端部は平ら気味で内側に接地する	体部 ロクロ成形 外面 ヨコナデ 内面 回転ヨコナデ 高台 みまみによるヨコナデ 施作はヘラナデ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁沙粒を多く含む
*	100 回数16 28	甕 (土器)	同上	口径 16.9	・脚部下を欠く ・口縁部は直近く外反し、端部は丸い ・脚部はゆるやかに盛らみ脚部を下にもつ	体部 ワブミ成形 外面 口縁部ヨコナデ 脚部刷毛目 脚部ヘラナデ 内面 刷毛目	焼成 良好 色調 淡黄褐色 胎土 磁沙粒を多量に含む
第29回 101 回数17 29	甕 (土器)	3号住跡	口径(12.2) 器高 4.0 底径(5.2)	・体部から口縁部は、やや内溝気味に立ち上がる ・口縁部の基部は薄く端部はわずかに反る ・底部はヘラ切り離し	ロクロ成形 外面 口縁部ヨコナデ { 体部指痕による液状 を残す 内面 回転ヨコナデ	焼成 良好 色調 淡黄褐色 胎土 磁沙粒を多く含む	
*	102	高台付塊 (上解基)	同上	高台径 9.4 高台高 1.0	・体部から口縁部は、直線的に外開きとなる ・高台は薄い ・高台は貼り付けで外開きとなる ・端部は尖り、内側に接地する	体部ロクロ成形 外面 ヘラナデ 内面 脱脂ヨコナデ、一部 に指痕による液状 を残す 高台 つまみによるヨコナデ	焼成 良好 色調 淡黄褐色 胎土 磁沙粒を多く含む
*	103	甕 (須恵器)	同上	口径 13.0 器高 3.8 底径 5.9	・やや変形している ・体部から口縁部は、わずかに内側して立ちあがる ・口縁部端部は、わずかに尖る ・端部はヘラ切り離し	ロクロ成形 外面 11縫部ヨコナデ 体部指痕による液状 を残す 内面 回転ヨコナデ	焼成 良好 色調 淡黄褐色 胎土 磁沙粒を含む
*	104 回数17 31	同上	同上	口径 13.4 器高 3.2 底径 6.3	・器形が非常に歪曲している ・口縁部から体部は、直線的に外開きとなる ・そのものと思われる ・口縁端部は丸い ・底部はヘラ切り離し ・直曲した口縁部は、注ぎ口を思わせる	ロクロ成形 外面 口縁部ヨコナデ { 体部に2本の縫部による液状 を残す 内面 回転ヨコナデ	焼成 良好 色調 青灰色 胎土 磁沙粒を含む
*	105 + 30	高台付塊 (須恵器)	同上	高台 7.7 高台高 1.0	・口縁部を欠く ・体部はあるが、やや内溝気味に立ち上がるるものと思われる ・高台は貼り付け立ち気味に外開きする ・端部は反り、内側に接地する	体部 ロクロ成形 外面 体部に指痕による液 状を残す 内面 回転ヨコナデ 高台 つまみによるヨコナデ 施作はヘラナデ	焼成 良好 色調 淡青灰色 胎土 磁沙粒を含む
*	106	同上	同上	口径 15.0 器高 7.5 高台径 9.1 高台高 0.8	・体部から口縁部は直線的に外開きとなる ・口縁端部は丸く、やや外開きとなる ・高台は貼り付けやや外開きとなる ・端部は反り気味で内側に接地する	体部 ワブミ成形 外面 口縁部ヨコナデ { 体部に指痕による液 状を残す 内面 回転ヨコナデ 高台 つまみによるヨコナデ 施作はヘラナデ	焼成 良好 色調 胎土 内面 磁沙粒を含む
*	107 回数18 32	広口甕 (須恵器)	同上	口径 10.3 器径 4.3	・脚部を欠く ・肩部から脚部は、大きく外反して外開きとなり ・口縁部は丸く、やや外開きとなる ・高台は丸い ・肩部の張りは少々なく、ゆるやかに脚部へと 張らる	脚部はワブミ成形で、口縁部 は貼り付けによる 内外面ともヨコナデ	焼成 良好 色調 青灰色 胎土 磁沙粒を含む

標目番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
第29回 108 昭和18 33	甕	3号住居跡	高 19 底 径 14	・口縁部を欠く ・底部から全体は、直線的にやや開きながら立ちあがる ・口縁部から肩部にかけては、内凹気味に内傾する ・底面は底部からしだいに滑くなっていく ・底部は平底である	ワツミ成形 外側 肩部は格子ヨコナデ 底部はヘラナデ 内面 木口状の輻方向ナデ	焼成 良 好 色調 青灰色 胎土 砂粒を少 く含む
* 109 *(上部) 34	甕	同 上	11 径(24.3)	・底部が残り、口縁部は短く外反する ・端部は丸い ・底部からは、なだらかな肩部脇らみとなる ・底面は全体的に滑い	ワツミ成形 外側 ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、以 下輻方向カキ目	焼成 良 好 色調 淡青褐色 胎土 砂粒を多 く含む
* 110	甕	同 上	11 径(30.2)	・頭部が残り、口縁部はゆるやかに外反する ・口縁部は厚くなり、端部は丸い ・底部からなだらかな脇らみとなる	ワツミ成形 外側 ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、以 下輻方向カキ目	焼成 良 好 色調 淡青褐色 胎土 砂粒を多 く含む
* 111	同 上	同 上	口 径(30.9)	・頭部が残り、口縁部は大きく外反する ・口縁部は、口縁部でやや厚くなり端部は丸 い ・底部からやや脇らみ気味となり、肩部をもつものと思われる	ワツミ成形 外側 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部下、木口状に毛目	焼成 良 好 色調 淡青褐色 胎土 砂粒を含 む
* 112	同 上	同 上	口 径(15.2)	・頭部が残り、口縁部は外反する ・口縁部脇らみは丸い ・頭部下から脇らみをもつ ・底面は滑い	ワツミ成形 外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	焼成 良 好 色調 淡青褐色 胎土 砂粒を多 く含む
* 113	同 上	同 上	口 径(16.0)	・頭部が残り、口縁部はゆるやかに外反する ・口縁部は厚くなり、端部は丸い ・底部から肩部は、ゆるやかな脇らみをもつ	ワツミ成形 外側 口縁部ヨコナデで 以下ヘラナデ 内面 ヨコナデ 以下樹毛目	焼成 良 好 色調 淡青褐色 胎土 砂粒を多 く含む
* 114	同 上	同 上	口 径(17.5)	・頭部が残り、口縁部はやや立ち気味に外反 する ・口縁部は厚くなり、端部は丸い ・底部から肩部は、ゆるやかな脇らみをもつ	ワツミ成形 外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	焼成 良 好 色調 淡青褐色 胎土 砂粒を多 く含む
* 115	同 上	同 上	口 径(20.5)	・口縁部は、ゆるやかに外反し、肩部は丸い ・頭部に指痕ナデによる沈線をもつ	ワツミ成形 外側 ヨコナデ及び指痕ナ デ 内面 ヨコナデ	焼成 良 好 色調 淡青褐色 胎土 砂粒を多 く含む
* 116	同 上	同 上	口 径(15.3)	・口縁部は大きく外反し、端部は丸い ・頭部下は、ゆるやかな脇らみをもつ	ワツミ成形 外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	焼成 良 好 色調 淡青褐色 胎土 砂粒を多 く含む
第29回 117 昭和18 35	甕底部	3号住居跡	底 径(6.5)	・底部の小さい木の茎底である ・底部へは、直線的に外開きに立ちあがる	外側 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	焼成 良 好 色調 淡青褐色 胎土 砂粒を多 く含む
第30回 118 (上部) 119	16 K-2	11 径(15.3) 高 4.2 底 径 7.5	・体部から口縁部はやや内凹気味に外開きと なる ・口縁部端部は尖る ・底部はヘラ切り廻し	ロクロ成形 外側 口縁部ヨコナデ 体部 同軸ヘラナデ 内面 同軸ヨコナデ	焼成 良 好 色調 淡青褐色 胎土 砂粒を多 く含む	
				・口縁部を欠く ・体部はやや内凹気味に立ちあがる ・底部はヘラ切り廻し	ロクロ成形 外側 同軸ヘラナデ 内面 同軸ヨコナデ	焼成 良 好 色調 淡青褐色 胎土 砂粒を多 く含む

新固 固版	器種	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
第3026 120 (土師器)	环	H - 5	口 径(11.3) 高 度 3.2 底 径 4.8	・体部から口縁部は、直線的に大きく聞く ・口縁部は薄くなり、端部は尖がる ・底部は、へう切り難し	ロクロ成形 外周 ヨコナデ 内面 回転ヨコナデ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁砂粒を 多く含む
* 121 (土師器)	高台付碗	I - 4	高台径 8.4 高台高 1.0	・口縁部を大きく ・体部は一部であるが、やや内済気味に立ちあがるものと思われる ・高台は貼り付けで、薄く外側きとなる ・端部はやや反り気味で尖がる	体部はロクロ成形 外周 ヘラナデ 内面 回転ヨコナデ 高台 つきみによるヨコナデ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁砂粒を 多く含む
* 122	同 上	K - 06	高台径 8.0 高台高 0.6	・口縁部を大きく ・体部は一部であるが、やや内済気味に立ちあがる ・高台は貼り付けで立ち気味となる ・端部は平たく、内面に弛地する	体部はロクロ成形 外周 ヘラナデ 内面 回転ヨコナデ 高台 つきみによるヨコナデ 端部はヘラナデ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁砂粒を 多く含む
* 123	同 上	K - 06	高台径 6.7 高台高 1.1	・口縁部を大きく ・体部は薄く内済気味に立ちあがる ・高台は貼り付けで、やや外側きとなる ・端部は尖がり気味となり、内側に弛地する	体部はロクロ成形 外周 ヘラナデ 内面 回転ヨコナデ 高台 つきみによるヨコナデ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁砂粒を 多く含む
* 124 (土師器)	36	N - 03	口 径 12 高 度 3.2	・体部から口縁部は、内済して立ちあがり、 1号部はさらには張りをなして内側気味となる ・口縁部端部は外反氣味となり、尖がる ・底部は、やや半たい丸底をなす	手ヅケ成形 外周 口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ 内面 1号部ヨコナデ 体部ヘラナデ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁砂粒を 多く含む
* 125	尻 上	I - 6	現 高 5.2 口 径( 7.5)	・ミニチュアの环である ・体部から口縁部は直線的に立ちあがる ・底部はやや丸い平底をなす	手ヅケ成形 外周 ヘラナデ 内面 ヘラ磨き	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁砂粒を 多く含む
* 126 (丸 瓶)	浅 瓶	P - 04	口 径(20.6)	・口縁部が外反する ・口縁部から体部は内済する ・底部は丸底をなすものと思われる	内、外面ともにへう書き	焼成 良好 色調 淡赤色 胎土 磁砂粒を 多く含む
* 127	甕	M - 2	II 径(17.3)	・頭部が細り、口縁部は大きく外反する ・口縁部は底部に向かってしだいに厚くなり ・端部は尖がる	ワツミ成形 外周 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁砂粒を 多く含む
* 128	瓶	K - 8	透部径( 8.2)	・透部のみの瓶)である ・透部から胴部へは、直線的に開く	外周 軸方向のヘラナデ 内面 ヨコナデ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁砂粒を 多く含む
* 129 同版19 36	變底部 (須恵器)	M - 6	底 径( 9.0)	・變底部となる ・底部は円錐状の貼り付け ・底部へは内済して立ちあがる	ワツミ成形 外周 ヘラナデ 内面 木口状による回転ヨコナデ	焼成 良好 色調 淡赤色 胎土 磁砂粒を 多く含む
* 130	尻 上	C - 3	底 径(11.0)	・變底部となる ・半底で側部へは一度直線に外側きに立ちあがり、それからさらに内済して立ちあがる ・底部に自然積みがかかっている	ワツミ成形 外周 ヘラナデ 内面 木口状による回転ヨコナデ	焼成 良好 色調 淡赤褐色 胎土 磁砂粒を 多く含む
* 131	同 上	C - 2	底 径(10.6)	・變底部となる ・半底で側部へは直線的に外側きに立ちあがる	底部はヘラナデ	焼成 良好 色調 淡赤色 胎土 磁砂粒を 多く含む



第30図 内野々第Ⅱ遺跡遺構外出土  
遺物実測図

## 7. 結語

内野ヶ第Ⅱ遺跡は、北川内町の現在の集落から北西方向に入り込む谷間に挟まれた丘陵先端部に當まれたものであり、山上遺跡の性格をもつものであった。遺跡は、過去において畠地開墾された経緯もあることから、遺構の完全な状態での発掘調査は出来ない状況にあった。また、ゆるやかではあるが傾斜面をもつ山上ということもあって、表上の流土が考えられ、高位置で薄く、低位置で厚いという状況を呈していた。

遺構では、3基の住居跡と床面を固めた状態を呈する溝状造構2本を検出している。

遺物としては、壺と高台付壺が主体を占めており、瓶、甕他の器種が見受けられた。主体となる壺や高台付壺は、<sup>(注1)</sup>土師式土器集成によると晩期Ⅱに相当するものであり、平安時代初期（9世紀）にあたるものと思われる。

**住居跡** 3基の住居跡を検出しているが、これらは調査区の西側寄りに縦位に並ぶものである。1号住居跡を除いた2号、3号住居跡は隅丸方形を呈するものであり構造的には、竪穴住居を呈するものであるが、非常に退化した状態を呈している。・

1号住居跡は、床面のはっきりしないものであり構造的にも複合している感をもつ。形態上からは変形した長楕円形状を呈し、西側が細く、東側が幅広がりとなるものである。また、幅広がりとなる東側においては中央部にさらに隅丸方形の掘り込みが検出されている。この掘り込みでは、床面にかなり炭の堆積を検出している。落ち込み周辺には生焼けの粘土塊や須恵器の広口壺の口縁部が溶着した粘土塊（第28図）が検出されていることや多量の土師器壺、高台付壺が割れた状態で散乱する状態から土師窯の存在も想起させる感を強くもつものである。しかし、そうした土器溜りの中から甕・瓶・それに土師器片を二次加工した紡錘車・土鍤等の検出を見たことや北西隅において、シラスの凝固した土塊をもって構築した竈の付設から住居跡としての性格が見受けられるのである。こうしたことから、土師器製作操業を伴った生活跡として見ることもできるのではなかろうか。

2号住居跡は、1号住居跡の北側に接しており、隅丸方形を呈する竪穴住居跡である。南西隅とそれに接して東側の2箇所の焼土の分布を検出している。出土遺物は散乱した状態にある。なかでも住居跡北側中央部からは須恵器壺の完形品が出土している。遺物は、土師器の壺と高台付壺が主体を占めている。

3号住居跡は、2号住居跡の北東に接しており、変形した隅丸長方形の竪穴住居跡である。住居跡西側中央部に広い焼土の分布を検出しているが、焼土中には遺物の検出はあまり見受けられなかった。この住居跡の特徴は、須恵器と土師器甕の出土が主体を占め、壺や高台付壺の出土が少なかったことがある。また、甕底部に木の葉底や垂曲した須恵器壺、広口壺が検出されている。

**遺物** 壺は、土師器と須恵器があり、土師器は体部から口縁部にかけて外開きに立ちあがる逆台形状の器形を呈するのに対して、須恵器は体部や口縁部が内湾するものが多い。土師器では、口径が12cm内外を示すものが大半であり、中には14cmを越す大形のものも見受けられる。底径は6cm内外を示すものと8cmを越すものとが見受けられる。器高は4cm内外にとどまっている。成形は、すべてロクロを使用しており、底部は回転によるヘラ切り離しである。また、体部にロクロ成形時の指頭に

より波状を残すのが特徴的である。器形的には、多少の変化は見受けられるもののそれによって時期差が大きく出るよりも思われなく、1時期の集中的な製作と見て良いものであろう。

高台付塊は、土師器と須恵器には製作上の違いは見受けられなく同手法である。器形的には須恵器の方がやや人形を呈するものが多い。口径が13cm~14cm、器高6cm内外、高台高が1cm以内を示すものが一般的な器形である。成形では、体部がクロコ成形であり、底部を切り離した後、高台を貼り付けている。高台に外開きになるものと立つものとがあるが、器形に変化は認められなく時期差はあまりないものと思われる。

鉢は、浅鉢と深鉢が見受けられる。これらの鉢は、1号住居跡から出土しており遺構外からも1点出土している。深鉢は、口縁部から胴部にかけてやや脇らみをもつものであり、浅鉢は体部から口縁部にかけて直線的に外開きとなるものと、浅い丸鉢を呈するものとが見受けられる。

甕は、土師器と須恵器の2種がある。土師陶甕は、1号、2号、3号住居跡それぞれから出土しているが、3号住居跡に最も多く出土している。口縁部がく字形に外反するものであり、頭部から胴部にかけて、やや脇らみをもつものが大半である。斐形土器は手法に違いが見受けられ第27図65のように、胴部に格子目タタキを用いるものや、第29図109のように内面にカキ目を有するもの、第29図111のように口縁部内面に木口状による刷毛目を顯著に残しているもの等が見受けられる。また、底部に木葉底が含まれている。斐形土器を見るかぎりでは、器形調整技法にあまり時代的変化が見受けられない感もある。

須恵器では、口縁部の顯著なものが見受けられない。3号住居跡より出土した甕（第29図108）は、肩部がわずかに脇らみ、胴部から底部にかけてはやや直線的にすぼまり、底部は平底を成す。表面は、格子目タタキで内面は、縱方向のナデ調整が見受けられる。

甕は、1号住居跡から2点と遺構外から1点出土している。1号住居跡の2点は、器形的には異なるものである。また胴上部に鉤状の貼り付け把手を左右に有している。第27図70は、口縁部がわずかに外反し、胴部は円筒状を成し、透部は、あまりすぼまらないもので透部径が大きいものである。把手は、剝離していたが第28図76の吊り手状の把手が今回の調査で出土しており、その貼り付け面が、この甕の把手剝離と同様となるためこの甕には、断面が三角形状を成し、穿孔のある吊り手状の把手が左右に付設されていたものと思われる。

広口壺は、1号住居跡（第27図68）と3号住居跡（第29図107）から出土しており、1号住居跡の広口壺は土師器の口縁部のみであり、3号住居跡のものは須恵器の広口壺である。土師器のものは、口縁部が朝顔形に開くものであるが、須恵器のものは、頸部から外開きに立ち、口縁部にいたって稜を成してさらに外開きとなるものである。この器形は、1号住居跡の生焼け粘土塊に溶着した広口壺（第28図79）と同様である。須恵器のこうした広口壺は、この遺跡での主体を成す<sup>(22)</sup>及び高台付塊の出現する時期に比して先行するものと考えられ、それについて検討を要するものであろう。

以上が、内野々第Ⅱ遺跡出土の主な遺物であり、前述したようにこの遺跡出土の环及び高台付塊は、遺物の主体と指標を成すものであり、單一時期の性格をもつものであろう。

九州地方では、あまり多くの類例が見受けられなく、広島県福山市津之郷町字坂部のザブ遺跡出土<sup>(23)</sup>塊に非常に類似するものである。土師式土器集成によると晩期Ⅱの時期に相当し、9世紀に比定する

ことができるようであり、この時期は圓分式土器の年代に相当するものである。

この時期になると糸切り底の手法が出現する時期であるが、内野々第Ⅱ遺跡からは糸切り底は1点も出土してなく、ロクロ成形後の回転によるヘラ切り離し手法のみである。

内野々第Ⅱ遺跡では、こうした壺及び高台付壺に伴って、壺、瓶、鉢、広口壺等が出土しているが、これらの器形・手法は先行する時期に出現しているものであり、器形・手法の温存があったものか、長い期間使用されたものかについては検討を加える必要があるものと思われる。<sup>(註3)</sup>

宮崎県においては、古墳出土の土師器以外では、淨土江遺跡における住居跡出土の土師器がある。<sup>(註4)</sup> 淨土江遺跡では6世紀から8世紀にかけての土師器の編年を行っている。内野々第Ⅱ遺跡出土の土師器は後続する時期のものと思われるが、淨土江出土の土師器終焉から内野々第Ⅱ遺跡出土の土師器までは、数時期の設定が入るものと思われ、今後、類例遺跡の調査が成され補訂・検討が加えられるべきであろう。

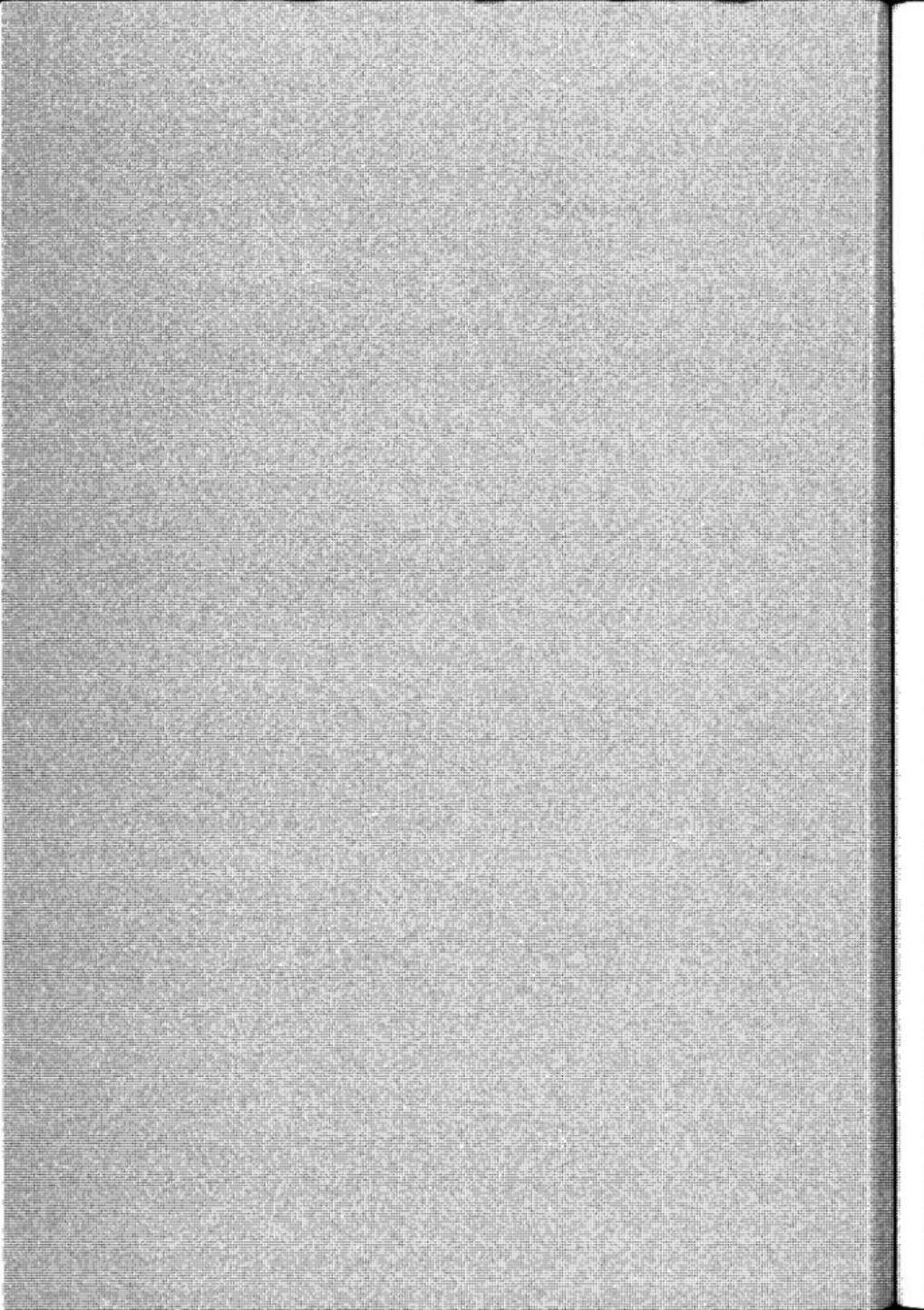
註1) 杉原莊介・大塚初重編「土師式土器集成」本編4(晚期)東京堂出版

(2) 註1)本編P100~P102

(3) 野間重孝、「淨土江遺跡」「宮崎市文化財調査報告書第6集」宮崎市教育委員会1981

(4) 野間重孝、「淨土江遺跡における土師式土器の編年的試論」「宮崎考古第7号」1981

図 版





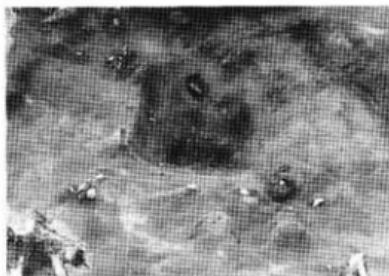
図版8 内野々第Ⅱ遺跡遠景(南東より)



図版9 内野々第Ⅱ遺跡K-03区下層土器群出土状況



図版10 内野々第Ⅱ遺跡K-03区上層土器群出土状況(上)



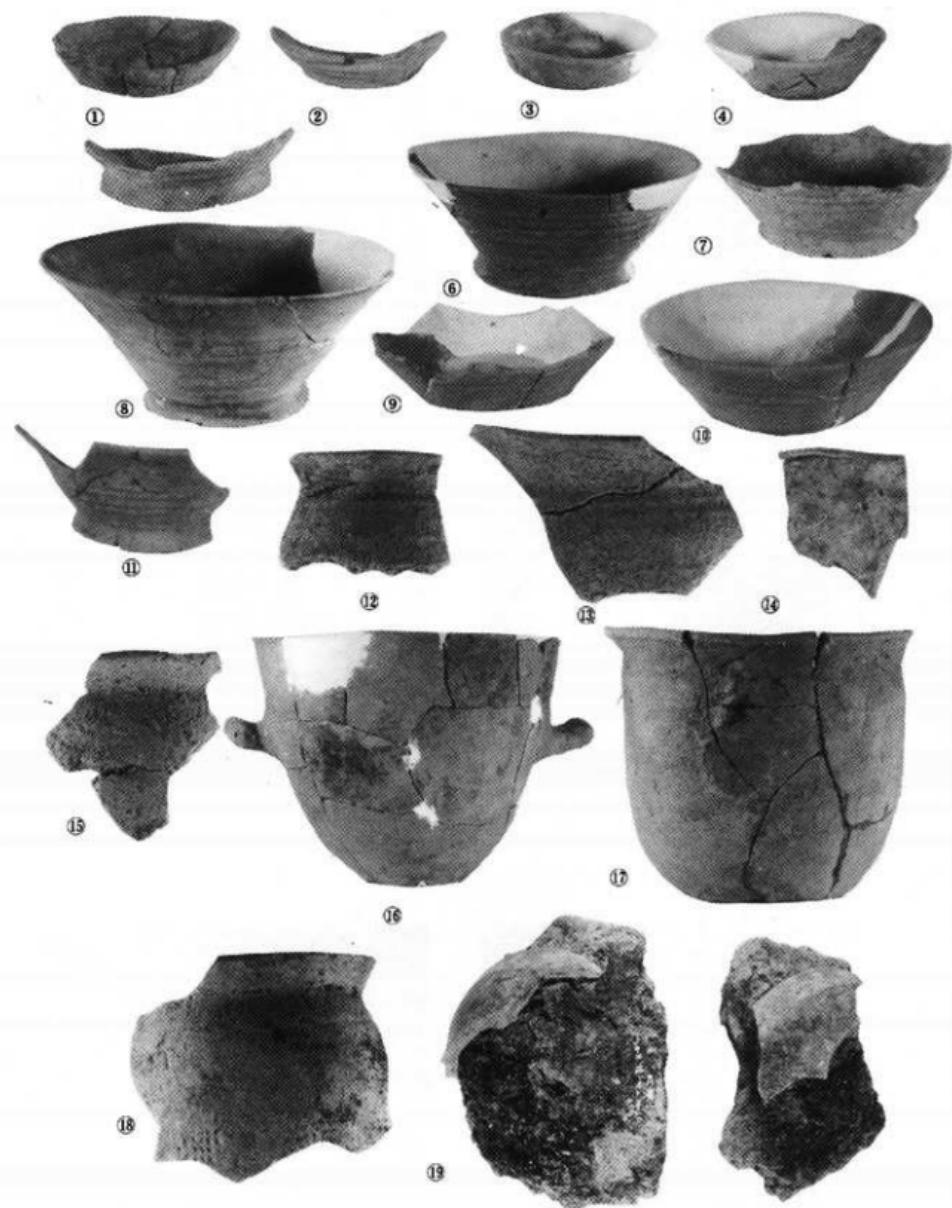
図版11 内野々第Ⅱ遺跡K-02区落ち込み遺構



図版12 内野々第Ⅱ遺跡2号住居跡



図版13 内野々第Ⅱ遺跡3号住居跡



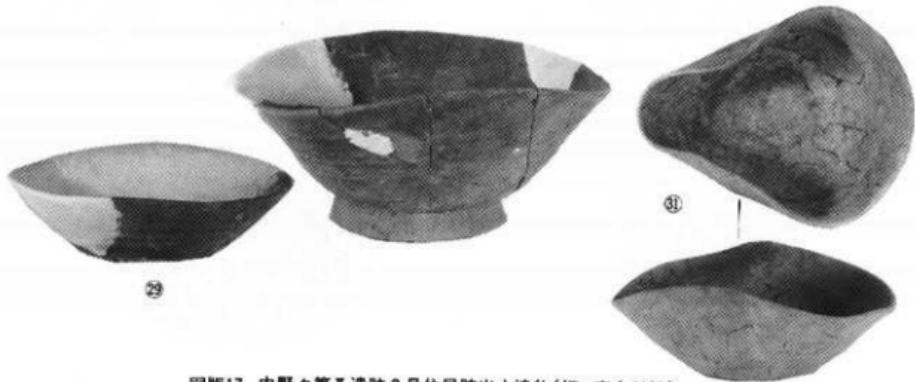
図版14 内野々第Ⅱ遺跡1号住居跡出土遺物(壺・高台付壺・甕・壺・須恵器溶着粘土塊)



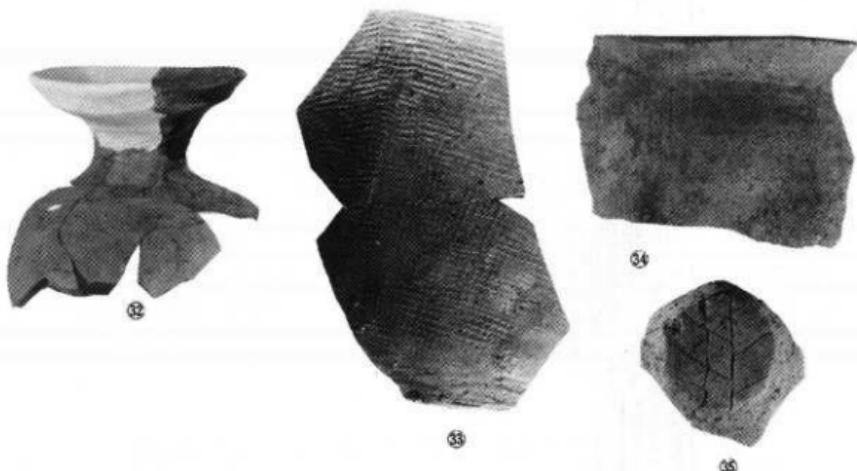
図版15 内野々第Ⅱ遺跡1号住居跡出土遺物(土錘・紡錘車・瓶把手)



図版16 内野々第Ⅱ遺跡2号住居跡出土遺物(壺・高台付壺・甌)



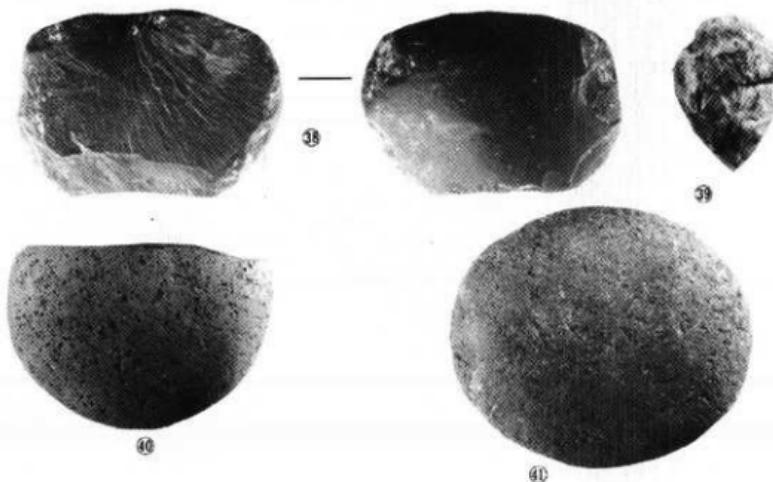
図版17 内野々第Ⅱ遺跡3号住居跡出土遺物(壺・高台付壺)



図版18 内野々第Ⅱ遺跡3号住居跡出土遺物(広口壺・甕・木の葉底)



図版19 内野々第Ⅱ遺跡遺構外出土遺物(甕・弥生式土器)



図版20 内野々第Ⅰ遺跡遺構外出土遺物(石器)

## 第4章 生目台団地建設予定地域内の石仏・石塔について

### 1. はじめに

生目台団地の建設予定地域内においては、昭和56年6月10日・11日の両日に実施された埋蔵文化財等の分布調査によって5ヶ所の石塔（群）所在地が確認された。なかでも大迫の近世石塔群と一丁目の中世石塔群の発見は、県内の石塔研究に新たな資料を提供するものとして評価されるがこれらの石塔（群）については今後の関係者協議によって最良の保存策が導き出されるものと思われる。

### 2. 調査結果

#### ○ 大迫の近世石塔群（宮崎市大塚町大迫）

昭和56年6月の調査時においては34基の石塔が発見されたがその後の再調査によって新たに8基の個体が確認された。これらの石塔を種類別にみると、中・小型の板碑が最も多く（16基）、角柱系の墓石（13基）がこれについているが年代的には、天正19年（1591）の小型板碑が最古のものである。「群」としての時期は、およそ江戸時代中期に求められると思うがこれらの石塔には種別を問わず「ア」、「アーンク」の梵字がみられ、また法印や大越家・阿闍梨等の職名が大半の個体に刻まれていることから、この石塔群には明治3年に廢された旧大塚村の真言宗大迫寺との関係が想起される。

#### ○ 生日神社道標（宮崎市北川内町字内野々）

正面に「いきめ・八まん・北川内村」、左側面に「安政七年（1860）庚午六月十五日」の紀年銘を配する角柱塔である。右側面には造立者「當村 清作」の銘もみられるがこの道標によって北川内方面から生日神社（宮崎市大字生日）に至る参詣往還の存在が確認された。尚、同型式の道標が宮崎郡清武町丸山（乳岩道標）に存在する。

#### ○ 馬頭観音石碑（宮崎市大字生日）

二段重ねの台石と傘石をもつ石碑である。塔身の正面に「南無馬頭観音」、右側面に「奉寄進生日小村謹」の銘が刻まれており、左側面には「嘉永二年（1849）己酉天十一月十九日」の紀年銘が刻まれている。また二段目の台石には清藏、貞蔵、和助ら13名の講衆名も刻られており、当時の庶民信仰の一端をうかがうことができる。

#### ○ 一丁目の中世石塔群（宮崎市大字生日一丁目）

五輪塔2基・板碑2基から成る石塔群であるが年代的には板碑のひとつに「大永六（1526）酉戌二月」の紀年銘がみとめられる。他の個体については紀年銘等が刻まれていないため絶対年代をとらえることはできないが、五輪塔のひとつには南北朝期以前の古様もみとめられる。また近隣の一丁目薬師堂（中世石塔群）との関連性が想起される。

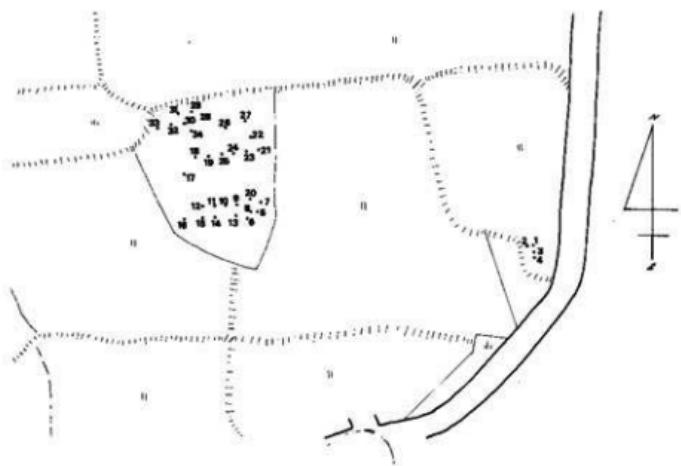
#### ○ 山林事業記念碑（宮崎市北川内野字内野々）

大正年間に造立された記念碑である。碑文内容からは付近の丘陵を対象とした植林事業の顛末を読みとることができる。

第3表 大迫石塔群の年代一覧表

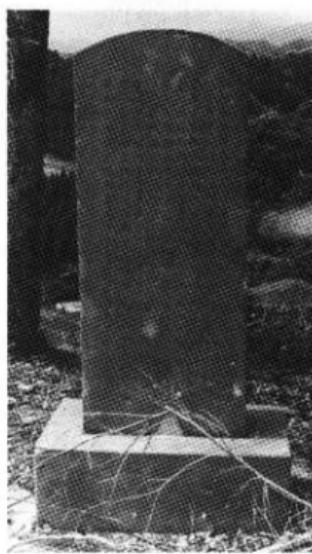
No	種 別	年 号	時 代	No	種 別	年 号	時 代
1	板 碑		(江戸時代)	18	板 碑		(江戸時代)
2	タ		(タ)	19	タ	宝永4(1707)	江戸時代中期
3	タ	寛文6(1666)	江戸時代初期	20	タ		(江戸時代)
4	タ	元和9(1623)	タ	21	墓 石	宝暦13(1763)	江戸時代中期
5	六地蔵 <sup>龕</sup>		(江戸時代)	22	無縫塔		(江戸時代)
6	墓 石	宝永5(1708)	江戸時代中期	23	墓 石	元文6(1741)	江戸時代中期
7	板 碑		(江戸時代)	24	タ	元文3(1738)	タ
8	五輪塔		(タ)	25	タ	寛政8(1796)	江戸時代後期
9	双仏石	正保2(1645)	江戸時代初期	26	タ	延享3(1746)	江戸時代中期
10	墓 石		(江戸時代)	27	台 石	天保9(1838)	江戸時代後期
11	タタ		(タ)	28	板 碑	享保11(1726)	江戸時代中期
12	タ		(タ)	29	タ		(江戸時代)
13	板 碑		(タ)	30	墓 石		(タ)
14	タ	天正19(1591)	桃山時代後期	31	タ	寛延2(1749)	江戸時代中期
15	タ		(江戸時代)	32	板 碑		(江戸時代)
16	仏石 <sup>(3体)</sup>		(タ)	33	タ	享保5(1720)	江戸時代中期
17	墓 石	延享5(1748)	江戸時代中期	34	宝珠・笠		(江戸時代)

※( )内は形態等による推定。



第31図 大迫石塔群配置略図

参考文献 平部義南「日向古蹟誌」歴史図書社 昭和55年



① 大迫石塔群（部分）  
② 生目神社道標  
③ 馬頭観音石碑  
④ 一丁田石塔群（部分）  
⑤ 山林事業記念碑

図版21 生目台団地建設予定地域内の石塔(群)

**生目台住宅団地計画区域内  
埋蔵文化財等調査報告書**

内野々第Ⅰ遺跡  
内野々第Ⅱ遺跡  
石仏・石塔調査

昭和57年5月31日

著　者　宮崎市教育委員会  
発　行　宮崎県住宅供給公社  
印　刷　株式会社宮崎南印刷  
宮崎市大字田口390(2)